
約束

猿丸

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束

【Nコード】

N7828D

【作者名】

猿丸

【あらすじ】

田舎町に生まれ育った一人の少年が、ロックバンドを通して、恋愛、進学、人間関係等に悩みながらも、自分らしく生きていこうとする様を描いた、痛快・学園・恋愛・青春ストーリー。かつての口ツク少年達に捧ぐ・・・。

第一章・春風

空を眺めていた。

澄み切った青い空に、

大きな鳶が風に乗って、悠々と輪を描いている。

大きな羽を広げて、羽ばたきもせず、

風に身を任せて、悠々と……。

『俺も鳥みたいに自由に飛べたらなあ……。』

「第一章・春風」

こんな田舎町に生まれたくせに、

何を血迷ったかROCKやR&B、ソウルやブルースにはまってしまい、

こんな田舎町に生まれたせいで、話が合う奴はほとんど居なくて、回りからは白い目で見られていたが、

それでも、何人かを騙し、おだてて、バンドを結成していた。

そのバンドで演奏する事が、

マイクの前で、でたらめにシャウトする事だけが、

俺のフラストラーションを解消する唯一の手段だった。

ただ、高2の終わりともなると、

やれ進学だ、就職だと煩くなってきた、
バンドの一部のメンバーの強い希望で、
春休みまで練習は停止。

さしずめ今日なんかは最悪で、
担任に一人一人呼ばれて、将来を話し合っただとさ。

うちの学校は、一応進学校なので、
三年になるとそれぞれの進路に合わせて授業を選択するシステムだ
った。

今回の面接で来年の授業の選択をする事になっている。

きつと今頃、誰も彼もがドキドキで、
普段は「ケンカだ、バイクだ、シンナーだ、万引きだ、SEXだ！」
って

騒いでるヤンキー野郎でさえ、
所詮こんな田舎町、グレる要因は一つもないので、
単なるファッションでしかない奴らの「抵抗」は、
この時ばかりはナリを潜め、
真面目な顔して話してるんだろうって事が、
俺を一層イライラさせた。

だからそんなうつつとうしい事から逃げ出して、
一番お気に入りの場所、校舎の屋上の中でも最上である、
「出入り口の屋根の上」に寝転んで、こうしてタバコを吹かしなが
ら、
いつものように空を眺めているのだ。

ある意味ここは俺だけの空間で、

仮に屋上に誰か上がってきたとしても、
視角になって見えないわけで、
ここへの上り方だつてきつと誰も知らない。

知っているのはわずか二人、
幼なじみの”キョウ”と”ヨージ”だけだ。

”キョウ”はうちのバンドのリードギター。
いわゆる親友のような存在で、
普段は無口だけど、一言一言が鋭いと言うか、確信を突いてくるの
で、

俺はいつも思いのたけを奴に話し、鋭い評論をしてもらっていた。
行動力は意外にあり、エフェクターを作っちゃったり、
自分のうちの屋根にごっついアンテナをぶっ立てて、
普通なら聴く事の出来ない”FM東京”を傍受し、
色々な音楽を俺に聴かせてくれたり、
何処で入手するのか、エロ本を廻してくれたりと、
する事がいちいち”粋”なやつだ。

”ヨージ”はバンドのメンバーじゃないんだが、
なぜかいつも俺たちの周りをウロウロしている。
奴とは腐れ縁と言うのだろうか、
家も近所、物心ついたときにはすでに存在していて、
しかも、小学、中学、そして高校までまさかずっと同じクラスにな
ろうとは、

この小さな田舎町に生まれたことを悔やむしかない。

おしゃべりな正確で、時々うつとうしくなるのだが、
俺の幼い頃の”恥ずかしい出来事”を色々知っていて、

余り邪険にして喋られるとかなりヤバイので、やさしくしてあげている。

ただ二人とも俺と違うのは、”勉強ができる”ということ。

これからの事は話した事もないが、

確実に二人とも”大学”に進むであろう。

なんだか俺だけが取り残された気分だった。

本当はそのことが、

今こうしてイジけている最大の原因なのだ……。

「コラッ！」

突然、背後からの、いや、寝転んでいたので頭上からの声に、俺の体も脳みそも、固まった。

タバコは口に咥えたままだし、懇談中とはいえ、今は授業中……。

完全に謹慎だ……。

お袋の悲しそうな顔が浮かんで消えた……。

ゆっくり起き上がりながら、

唇にくっついたタバコを隠すように取りながら、振り向いた。

屋根の端にチョコンと顔だけが覗いていた。

ヒロミだった……。

「現行犯！謹慎だよ！！」

少し首を傾けてニコニコと笑っているヒロミに、
安堵と、”安らぎ”のような感覚を感じた。

「びつくりしたあゝ。」

ヒロミはさらに白い歯を見せて笑っている。

「なんで？ここが解ったんだ？」

「だって、ロープのついた椅子が置いてあったから。」

「あつ……。」

椅子を引き上げるのをすっかり忘れていた。

屋上には、誰が持ってきたのが数客の椅子があり、
屋根の上に縛り付けてあるロープを背もたれに結び、
椅子を使って屋根に登る。

後はロープを引き上げて、椅子を上げればいいってわけだ。
降りる時はその逆だけで、最後にロープは垂らしっ放しても、
今まで誰も気にしないでいた。

「上がって来れるか？」

「任せといてよ。」

ヒロミは運動神経が良い。

ヒョイっと上り、自分でロープを引っ張って、椅子を屋根の上に乗
せ、

隣に座った。

人間には、ある一定の距離感があって、

親近度によってその距離は近づくとと思う。

ヒロミは、彼女と呼べる存在ではないのに、
出会った頃から、いつも”友達の距離”より中に入って来ていた。
そして俺はいつもドキドキするのだった。

ポカポカとしたお昼前。

誰も知らない屋根の上。

手を伸ばせば、抱きしめる事だって出来てしまいそんな距離なのに、
ヒロミの前では、いつもなぜか、助平な自分は影をひそめ、
この甘く切ない”ドキドキ”をずっと味わっていたと思っていた。

そう、”抱きしめたい”と思うだけで良かった。

「こんなところに隠れていたとは。」

「内緒にしといてくれよな。」

「もう、ずいぶん探したんだよ。」

「えっ？」

「だって、先生と話し終わって教室に帰ったらいないんだもん。
また逃げ出したと思って。」

「……………」

「ホント、いい加減だね。どうするの？進路。」

「うーん、勉強は嫌いだし、働くのはもっと嫌だし……………」

「お前はどうすんの？」

勇気を出して聞いた。

ヒロミの進路は非常に気になるところだ。

「東京の専門学校。」

「へえ〜。」

「資格をとるの。女が一人でも生きていけるように。」

「えっ？結婚しない気なの？」

「そうじゃなくて……。」

もし将来の旦那さんが死んじゃったら困るでしょ。」

「ふーん。」

そう答えながら、『俺は絶対死なないぞ！』って思った。

「ねえ。」

「ん？」

ヒロミは俺のことを”ねえ”と呼ぶ。

他のやつらの事は”君”とか”あだな”とかで呼ぶくせに。

他の奴らの前で俺の話をする時は、名前で呼んでいるんだろつか……。

言葉を選んでいるのか、うつむきながら、ゆっくりと、話し始めた。

「東京に行くんでしょ？」

進学も、就職も、してもしなくても……東京へ行くんでしょ？」

「バンド続けるなら、東京だよなあ……。」

「そうだよ、バンド続けるんでしょ？続けなきゃ。」

「うん、でもなんで？」

「……東京へ行っても、こうして話せるといいね……。」

『それじゃあ、ヒロミは俺が東京へ行く事を予想して、自分も東京へ行く事にしたのか？？』って思ったが、言い出せずに頷くのが精一杯だった。

『ヤバイぞ！この空気。』

まるでドラマのワンシーンみたいじゃないか！

ラッキー！いや、ヤバイ……。どうしたらいいのかわからない。

『

ドキドキと言うより、胸の奥を”ギュッ”とつかまれたような、
息苦しいような、でも、ずっとこのままで居たいような、
そんな感じだった。

だが、こんな時には決まって邪魔者が現れる……。

「おい、トシロー！ー！いるんだろー！」

ヨージの声だ。

「やまゝ、やまゝ！」

「ねえ、”やまゝ”ってなに？」

「ここ見つけた頃、合言葉を作ってたさ、

でも、良く考えたら、屋上に誰がいるときはここへ上がって来れ
ねエから、

消滅したんだけど、あいつ、まだ覚えてたのか……。」

ヒロミと顔を見合わせて笑った。

「かわ。」

顔を出してやった。

「かわ。」

続いてヒロミも顔を出した。

ヨージの顔が一瞬固まったが、

それ所ではない様子で、早口にまくし立てた。

「トシロー、ヤバイ、ヤバイ。センコー、スッゲー怒ってるぜ。面接こないんだったら、理数の進学コースで授業組むってさ。」

「何！」

くっそー、その手で来やがったか。
教師の特権振りかざしやがって！

「わかった、すぐ行く！」

急いで椅子を下ろし、慌てて椅子に飛び降りた。

「ヒロミ、降りて来いよ。」

「うん・・・スカート・・・。」

ヨージが”オッ”と言う顔をした。

「てめえ、見たらぶっ殺す！」

そっついながらヨージを背中から抱き、
そこから離れた。

その際、小声でヨージがささやいた。

「すまん、邪魔して。」

「いや、正直助かったよ。」

「えっ？」

「あとで話す・・・。」

「いいよ。」

ヒロミの声で振り返ると、すぐさま取り繕うように、

ヨージがヒロミに近づきながら言った。

「ヒロミ、聞いたぜ！テルの事、フツたんだって！？」

「え？！」

思わず声が出た。

テルは”プレイボーイと言う言葉はコイツのためにある”

と思えるほどの女好きで、俺の知るところでは、現在三人彼女が居る。

でも、一週間に十三人の女にフラれたという記録保持者でもあった。

『くっそー！テルの奴、ヒロミにも言い寄っていたのか。
ぶっ殺す！！』

ヒロミはチラッと俺を見て、ヨージに言った。

「うん、私、いい加減な人嫌いだから。」

「ふうん、いい加減ねえ……ここにもっといい加減な奴もいますか……。」

ヨージは、ニヤニヤしながら俺を見た。

「ホントだあ。」

ヒロミは小声で笑った。

「な・な・なんだよ！俺は真面目で几帳面なA型だぞ！」

「何、動揺してんだか。」

ヨージも笑った。

俺も照れくさくて笑った振りをした。

春を告げる風が、心地よく三人の隙間をすり抜けていった。

第二章・四面楚歌

「第二章・四面楚歌」

今日は卒業式。

明日から春休みだ。毎日バンドの練習だ。

溜まりに溜まった”フラストレーション”を発散するには、シャウトしまくるしかない。

だいたい一ヶ月近くも練習してなかった事自体、俺には考えられない事だった。

朝から張り切って、休み中に教室を借りる手続きをすまし、五月の”新生歓迎ライブ”に向け、練習のプログラムも、メンバー分作り終えた。

卒業式を適当にやり過ごし、メンバー全員が待つ部室のドアを開けた。

もう皆揃っている。

「あれ？ヨージ、何でお前までここにいるんだ？」

「いいだろ！マネージャーみたいなもんなんだからあ。」

「マネージャーだったら客集める！暇なだけだろ！！」

まあいい。今日の俺は機嫌がいいもんねえ！

さあ、みんな！待ちに待った春休みだ！

練習のプログラム作ってあるよ。」

「あのさあ、トシロー、チヨットその前に話しあるんだけど……」

。」

ドラムのコウイチが切り出した。

コウイチは、春休みまで練習は出来ないと言い出した張本人だ。
イヤゝな予感……。

「実は、俺……バンド抜けたいんだけど……。」

「えっ？」

何となく予感があった。驚いたフリをただけだ。

練習を休止する前も、何かと理由をつけては遅れてきたり、
休んだりしがちだったし、演奏もノリが悪く、リズムはモタリっぱなしだった。

「ずっと前から考えてたんだ。

俺、大学行きたいし、家、金ないから私立は無理だし、勉強しないと……。」

本当はもっと早く言い出そうと思ってたけど、

トシロー、ずっと機嫌悪いし、ホントゴメン！」

コウイチはうつむいたまま、俺の返事を待っているかのようにだった。
俺は、キョウの方を見た。キョウは俺の顔を見、そして頷いた。

「わかってたさ。良いよ、良いよ。ドラムは一年にヘルプ頼むさ。
それより悪かったな、今まで付き合ってくれて。」

こんな時の備えに、一年のバンドのドラマーには、
ヘルプの了解をコッソリ取っていた。（半分脅したが……。）
バンドを結成する時、ドラムやる奴がいなくて、
コウイチを唆してドラムをやらせたのは俺だった。
初めは嫌々だったけど、コウイチは一生懸命練習をしてくれた。

これ以上、引き止める権利なんてなかった。

「実はさあ……。」

今度はベースのテツオが話し始めた。

「俺も辞めたいんだ。」

「えっ？」

今度はマジに驚いた。

「なんでー！どうした？何か有ったのか？？」

俺より先にキヨウが切り出した。

ヨージも、コウイチもビツクリしている。

「いやさあ、この間の面接で先生と話してさあ、影響受けたっていうかさあ、

親父とも話したんだけどさあ、このままで良いのかって考えてさあ、

三年になったら真面目になろうかなあって……。」

「真面目ってなんだよ！真面目にバンドやってんじゃないか！」

「いやさあ、タバコも止めたいし、帰りも早く帰ってさあ、

彼女も欲しいし……。」

「タバコ止めるのと、彼女がいないのと、バンドは関係ないだろ！大体早く帰って何すんだよ！テレビでも見るのか？」

「そうだよ、テツオ！辞めんなよ！」

コウイチまでも止めに入っている。

だが、俺と、ヨージは大体のことは理解した。

去年の夏、俺と、ヨージと、テツオの三人は、

担任にタバコを吸っているところを見つかり呼び出された。

三人で説教されている時、

テツオはなんと泣き出したのだ。

「オヤジには内緒にしてください。」と哀願したのだ。

その姿が余りにも惨めで、俺たちも一生懸命誤り倒し、何とか黙認してもらったのだった。

テツオは父親が怖いのだ……。

その父親が何か言ったに違いない。

そして、テツオには好きな娘がいた。

テツオとその娘は家が同じ方角で、バスで通っていた。

今回練習が休止になり、テツオが、その娘や他の奴らと何人かで、とても楽しそうに帰っていくのを俺たちは目撃していた。

「キョウ、もういいよ。……テツオ、解った!」

「よくない! どうすんだよバンドは!!」

いつもはクールなキョウが、マジに怒っている。

「テツオ、コウイチ、もういいから帰れ!」

「うん……ホント、ゴメン。」

コウイチがテツオを引っ張って部室を出て行った。

二人が退散した後も、キョウの怒りは収まらない。

「どうすんだよ! トシローと二人でフォークデュオでもやんのかよ!」

「でもさあ、やる気のない奴、無理やり演らせててもダメだろ。」

あいつらはもうダメだ。」

「ハァー……。」

三人でため息をついた。

ひよんな事から、あっけなくも、二年間続いた俺たちのバンド、
”ローリング・クレイドルズ”は解散した……。

静寂の部室、タバコの煙が充満した中、
キヨウが冷静さを取り戻す代わりに、
俺の落ち込みは増していった。

「クソツ！大体、勉強は家ですんだろ！ドラムは家じゃ練習できねーから、
あいつ家に帰れば勉強三昧じゃねーか。勉強するからって理由は嘘だな。

女だな、女！でも、だいたい、あいつに女が出来たのも、
バンドやってたからじゃねーか。

それにしてもムカつくのはテツオだ。
何を騙されたか、教師と一回話したくらいで影響受けるなってんだ。

一教師が一生徒をどれだけ心配するかってんだ！
それに、いい歳して親父が怖いって、なんなんだよ！
なんでも相談してんじゃねーのか？女の口説き方とかよー！
あいつは全部、自分で決めてると思ってるけど、全部、人に決めてもらってる。

自分って者が無いんだ。そのくせ目立ちたがりやだからまいるぜ。

それで……」

「とりあえず俺に任せてくれ。」

キヨウが俺の愚痴を遮った。

「任せてくれって、どうすんだよ。」

「今日から一週間、トシローはおとなしくしててくれ。」

「あっ？」

「他のメンバー探したり、そういうの無し。一週間でいいから。」

「キョウ！なんかいい事思いついたようだな！トシロー、任せちゃえよ。」

任せるも何も、これからの事なんて何も考えられなかった。

俺のストレスは発散できずに内に籠ったのだ。

イライラが鬱に変わった。こめかみの辺りが重く感じる。

「まあ、いいけど……。ハア……帰る……。」

二人を先において部屋を出た。

絶望感つてのがどんどん俺の頭を支配していく。

『どうすりゃいいんだ……』

下駄箱で靴を履き替え外を向くと、

校門に人影が見える。

『ヒ・ヒロミだあゝ！あゝ話聞いてもらおう。癒してもらおう。』

一瞬で目の前が明るくなった気がした。

わざと靴をバタバタさせて履きながら玄関を出た。

ヒロミは背を向けて、誰かと話している。

俺は戸惑い、足を止めた。

話している相手は、卒業生のアキラだった。

アキラは、テニス部の部長だった男だ。

真面目な男で、高校に入ってからテニスを初め、

大して運動神経もよくないのに、努力して県大会で優勝した立派な

男だった。

近寄りがたい雰囲気だった。

引き返そうと思ったとき、アキラが俺に気付き、ヒロミに言った。

「ありがとう。元気だな。ヒロミ……。」

そしてもう一度、俺の方をチラッと見、帰っていった。

ヒロミはアキラの後姿をしばらく見送っていたが、突然振り返り、うつむいたまま、固まって動けない俺の横を走り去っていった。

あんなヒロミは始めて見た。

いつもニコニコと話し掛けてくるヒロミ。

いつもハキハキと元気なヒロミ。

いつも思わせ振りのヒロミ。

なのに、あの後姿はとても小さく、とてもか弱く、とても女だった……。

しかも、俺の存在に気付いているのか、いないのか……。
気付いているなら、余りに情けなく、
気付いていないなら、余りに淋しい……。

「トシロー、ちょっと待てよー！一緒に帰ろーぜ。」

ヨージとキョウが追いついた。

「いま、ヒロミとすれ違ったけど、なんか言っただろ？
八つ当たりしたろ？泣いてたぞ。」

『泣いてた……。』

「いや、俺じゃない……。。」

どうすることも出来ない虚無感に襲われ、
そう言うのが精一杯だった。

第三章・普通の高校生

「第三章・普通の高校生」

田舎の春休みは長い。

もうすでに一週間、俺は家に閉じこもりウジウジしていた。
キヨウも、ヨージも顔すら出さなかった。
退屈な毎日、一層俺をイジケさせた。

もう何も残っちゃいない。

俺はもうおしまいだ。これからはのんびり暮らそう。
テキトーに学校行って、テキトーに家に帰って、
テキトーに田舎に就職して、テキトーに彼女作って、
テキトーに結婚しよう。テキトーに子供作って、
テキトーに家建てて、テキトーに人生全うしよう。

その方がいい。イライラしなくて済む。

その方がいいに決まってる。悲しくならないで済む。

変にいろんな事、期待した俺がバカだった。

チヨットいきがって、ステージに上がって、
シャウトしたら気持ち良かったんで、
その気になっちゃってたんだ。

もう辞めよ……バカみたいだ……。

ヒロミにしたって、本当はアキラが好きだったんだ。
なのに、チョット俺にやさしかったからって、
別に俺のこと、なんとも思ってたやしかったんだ。
それなのに勘違いして、ヘラヘラして、デレデレして。

大体そんな上手い話あるわけ無いよな。

俺なんかを好きになってくれる女なんかいるわけ無いよな……。

ヒロミとも、親しくするの辞めよ。

クラスメートの一人なんだ……ただの……。

あゝあ、俺ってバカだなあ……。

こんな事をずっと、一週間も考えてた。

ちょうど一週間目の夜、キョウから電話が来た。

明日の10時に教室へ来いとのことだった。

キョウが何か企んでるとしても、もう止めよ。

テツオみたいに真面目になるって言うんだ。

明日、教室で引退宣言しよ。「普通の高校生に戻ります！」って言
おう……。

次の日、学校へ付き、階段を上がると、
ドラムの音が聞こえてきた。

単純なエイトビートだが、ずいぶんハッキリしたビートを刻んでい
る。

時々つまづくけど、なんともサッパリとした、軽快なリズムだ。

コウイチでも、一年のドラムのリズムでもない。

奴らのリズムは、ハード系な、重く、力強いリズムだ。

今聴こえて来るリズムは、流れるように、とても軽い。

『一体誰が叩いているんだろう?』

『でもまあ、もう俺には関係ないもんね。

キヨウが新しく見つけてきた奴だとしても、どうせ気が合っわけねえ。

またすぐに辞めるって言うに決まってるさ。その前に俺は辞めるんだ。』

ベースがドラムに被さってきた。

単純な循環コードだ。ルートだけを弾いている。いい感じだった。

とても単純だけど、単純がゆえに解りやすくノリやすい。

『ノリだけは認めてやるか……。』

そう思いながら教室のドアを開けた。

「おう！トシロー！」

「えっ?今、ドラム叩いてたの、お前か?」

「へへへ……。』

信じられない光景だった。

教室の中にはベースを下げたキヨウと、

そして、ドラムの前に座っていたのは、なんと、”ヨージ”だったのだ。

「ビックリしたろー。実は前から考えてたんだ。

ヨージはいつも練習見にきてたし、コウイチのリズムが狂うのをトシローより早く気がついて嫌な顔してたの、俺知ってたんだ。何より俺たちが好きな音楽も全部聴いてるし。

それにリズム感、メチャクチャいいぞ！一週間でこれだ！

トシロー、聴こえてただろ！？」

「トシロー、俺も仲間に入れてくれよ。一生懸命叩くからさあ。」

嬉しくて涙が出そうだった……。

「バカヤロ！何で最初から言わないんだよ！

俺は一週間、ずーっとウジウジしてたんだからな！

何でそんな楽しい事、内緒にしてやがって、早く教える！！」

「いや、トシローのあの精神状態でこんな話しても、

”できるわけねえ”の一点張りさ。

だから一週間、俺たち二人で練習してたんだ。」

キヨウとヨージは二人つきりですつと練習してたのか。

地味な練習を一週間ずつと……。

確かに何も叩けないヨージを見たら、俺はきっと投げ出したに違いない。

……持つべき物は友達だ。

「ん？でも、ベースどうすんの？ベース？

キョウが弾いて、俺がギター？歌は？インストはやダゼ。
俺、唄歌いたいし……。」

「いや、色々考えたんだけど、トシロー、ベース弾きながら歌え。
今みたいに、ルート弾きながらだったら歌えるだろ？」

「ベース、俺？でも、音薄くなりすぎない？」

「いや、薄いからいい感じでノリやすい。」

それに、今までのレパトリー、全部捨てる。

これからは簡単な解りやすいヤツと、オリジナルでいこう。」

「ベースにボーカル……ポリス！ステイングかあ！」

カツコいい！！それでいこうそれで！……でも、三人じゃ薄
すぎない？」

「そういうと思ってさ、ホレ。」

「デイレイじやんか？どうしたのこれ？」

「レスポール売って、バイト代と小遣い合わせて買った。」

あと、これコーラス。これは作った。」

「……レスポール売ったのか。」

「ああ、前からその気だったんだ。もつと軽快なのやりたくてさ。
それにレスポールは重いし……。」

キョウは俺以上にバンドの事を考えているのかもしれない。

「よし、ベース練習しちゃうぜ！三日でテツオ超えてやるからな。
ところでこのベース、テツオんだろ？借りてていいのか？」

「ああ、永久的に貸してくれるらしいぞ！アンプも。」

どうも、家に無い方がいいみたい。」

「親父怖いもんね……。」

「ヨージ、ついて来れるかあ！？俺はキビシーよ。」

「バンドの救世主に向かって何だその口の聞き方は……。」
「すいません、ヨージさん、よろしくおねがいします……。」

久しぶりに、本当に久しぶりに大笑いした。
一週間の憂鬱が、わずか数分で消し飛んだ。

「早く練習だー！練習ー！！ドゥードゥードゥー・で・ダーダーダ
ー」

「おつとその前に、ミーティング。」
「なんだよ、ノッてんによ。」

「これからはキツチリいきたい。ただテキストにコピーして演るん
じゃなく、

キツチリ計算して進めていきたいんだ。こんな田舎でのライブだ
けじゃなく、

将来的には東京のライブハウス、その先はレコードデビューまで
考えて。」

「……レコードデビューって、おまえ……。」

「いや、それくらい真剣につて事。」

もう嫌なんだ、やる気の無い奴、煽てたり、言いたい事我慢した
りするの。」

「うん、うん。」

「この三人なら何でも言えるし、何でも出来そうな気がするんだ。
だからこの際、思いっきりやってみたい事、やっていきたいんだ。」

ヨージと顔を見合わせた。

あのクールなキョウにこんな情熱が隠れていたとは……。

「うん、いいよ。んで、どーすればいい？」

「まず、ヨージは練習あるのみだな。いちいちテープ渡すから、それ叩けるようにする事。」

「俺は？」

「トシローはベース弾きながら歌う練習と……オリジナルだ。」

「あー？オリジナル、俺が書くの？？」

「ボーカルが書かない唄、説得力ないだろうって、

曲は俺も手伝うけど、詞書けないもん、俺……。」

「俺だって書けねーよ！」

「いや、トシローなら書ける。言葉のボキャブラリーは豊富だし、中学の時、俳句で賞取った事もあるし……。」

「そういや、小学校の時も誌で賞取ったよな、トシロー。」

幼なじみは怖い……。

つまらねえー事憶えてやがる……。

「わかったよ……。」

やってみるけど、その代わり条件がある。

バンドの名前は俺につけさせる。」

「えゝ、また変な名前にするんじゃ……。」

「いいよ、名前なんて任せる。」

「ヨージは？」

「仕方ないなあ……。」

「よし、バンドの名前は……。」

「”松竹梅”だー！」

「フンツ」と二人とも胡散臭そうな顔をした。

「よりによってなんで松竹梅！？しかも漢字！？」

ヨージが嫌そうに言った。

「カッコいいだろ！カッコ悪いところが物凄くカッコいい！俺が松田優作で、キョウが竹田鉄也で、お前は梅毒だ！！」

「訳わかんねえー事言ってんなよ。カッコ悪すぎ。なあ、キョウ。」

「いや、最初聞いた瞬間は、最悪だと思ったが、カッコいい。カッコ悪いところがカッコいい。」

「おいおい、いいかあ、カッコ悪いのはカッコ悪いの！なんかズレてるぞ！二人とも。」

「決定だ！松竹梅！！」

「なあ、なあ、”サージエントペパーズ・ロンリーハーツ・クラブ・バンド”

みたいな名前にしよーよ。」

「いや、いい！カッコいい、松竹梅！トシロー、決定だ！！」

「よっしゃー！練習だあー！」

「お前ら二人のセンスにはついていけない……やめようかな……。」

「ヨージ、もう手遅れだぜ……。」

お前はもう、このバンド地獄に片足を突っ込んでしまった。これからどんどん地獄に嵌って行くだろーぜ。

ステージに上がり、脚光を浴び、

もつと、もつとこの視線を浴びたいと思うようになり、

そして、ドラムを叩かなけりゃいられない体になり、

社会から逸脱し、麻薬に手を出し……ギャー！！

フ・フ・フ・フ・よーこそーバンド地獄へ。」

「さあ、馬鹿なこと言ってないで練習しよう。」

エイトビートで、コードは、C・Am・F・Gの循環コードで。」

とても簡単な練習だけど、とても気持ちよかった。
浮かんでくるメロディーを口ずさんだりもした。

フツツとヒロミのことが頭をよぎる。
それを振り切ろうと余計熱を上げる。
そんな繰り返しだった。

”普通の高校生”に戻らなくて良かった。

俺には、これしかないのだ・・・。

第四章・キスの味

「第四章・キスの味」

練習は毎日続いた。

ヨージも時々おかずを入れられるようになったし、ベースも、簡単にルートを拾いながらだけど、弾きながら歌も歌えるようになって来た。

例の単純な循環コードに少し手を啜え、メロディーができた。

後は詞だけだ。

作り話を書く事はとても出来そうに無い。

今感じてる事、思っている事。

それを書くしかないのだが、

ただスラズラと書き出してみても、

それを省略し、また、聴く側に解りやすくするにはどうしたらいいのか……。

その事ばかりを考えるようになって、

頭の中がゴチャゴチャだった。

何かいい気分転換は無いものか……。

春休みももうすぐ終わる。

新たな気分で再出発だ。”松竹梅”も、ヒロミのこと……。

よし、髪でも切ろう。完全にイメージチェンジしよう。
そしたら、きつと何かが変わってくさ。

よし、ブリティッシュ・パンク系で決めよう。
これまでの、伸ばしっぱなしの肩までかかる髪を、
耳半分くらいにし、てっぺんはバサバサにすいて貰い、ツンツン逆
立てる。

ジーンズも、黒のスリムにして、
靴はコンバースのハイカット、もちろん色は黒だ。

とりあえず髪だ。後は徐々にそろえていけばいい。

そして、この街で唯一のまともな美容院へ行き、髪を切った。
音楽雑誌”プレイヤー”を持って行き、
東京帰りのお姉さんと相談し、切って貰った。

さすがは東京帰りだ。
思った以上に決まっている。

お姉さんは「こんな頭にして、学校、大丈夫？」と心配してくれた
が、

こんな田舎町の教師、リーゼント、オールバック、はもちろん、
ちよつとしたデザインパーマまで、ヤンキー系には過剰反応を示す
が、

パンクなんて知る由も無い。

案の定、学校で何人かの教師に出会ったが、
「どうした？その頭??」と不思議がられるくらいで、
「自分で切ったら失敗して、寝癖が治らないんです……。」と
答えたら、

笑われて終わりだった。

『フン！田舎者め！！』

”失恋して髪を切る。” ”髪を切るのは心の区切り。”とかよく言うが、本当だ。

これはよく効いた。

気分一新と言おうか、頭の中が随分すっきりした。

俺は生まれ変わったのだ。

そしてその夜、俺は一気にオリジナルの詞を書いた。
これは、テツオとコウイチに向けた決別の歌だ。

「Show me please」

解つてないよ 何もかも嘘さ 踊らされるだけの Dancing

Doll

見えてないよ 風のかけらさえ 君にはただの Scrap

昨日までの話し方と仕草が違ってる

何から何まで知ってるつもりなの Mistake

Show me please Show me please
Show me your style .

いつものように波に身を任せ その場限りの夢を愛し
消えていく人ゴミの中に 自分を見つけ出してる

「いつだって手に入れない夢追いかけてる」

何から何まで知ってるつもりなの Mistake

Show me please Show me please
Show me your Style .

Night & amp ; Day }
ホラ！君にバラードは唄えない Show me your Style .

「トシロー、カッコいいじゃん！良く書いたな！。」

「天才だあゝ！天才ゝ！！」

キョウとヨージにメチャクチャ誉められた。
発表する時、チョット恥ずかしかったけど、
余りにも誉めるんで、『俺って天才かな！。』とも思った。
とても気分の良い練習であった。

俺たちの高校は丘の上にあり、

帰り道はいつも駅まで坂を下るのだが、

その途中に自販機があり、いつもそこでジュースを買っては、
飲みながら駅まで行くのが日課だった。

俺たちは隣町から電車で通っていた。

校門を出て、坂を下っていくと、自販機の前にヒロミがいた。

多分、部活の帰りだろう。

こつちを向いて、後ろに手を組み、首を傾けてニコニコしている。

『クラスメート、クラスメート、自然に、自然に……。』
そう言い聞かせながらヒロミの前まで来た。

「髪切ったんだ。」

「うん。」

「イメージチェンジ？それとも、何か有ったとか……。。」
「うん……。いや、別に……。。」

自然どころではなかった。

妙に意識しすぎて、顔すらまともに見れやしねえ。

「さーで、今日は何にしようかなあー。」

ヨージとキョウが自販機の前でジュースを買おうとしている。
俺は、コンバースが欲しいので節約だ。

喉は唄いっぱなしでカラカラだけど、コンバースのためだ。

「おい、キョウ、ファнта・オレンジにしろよ。」

「俺、炭酸飲まないようにしてんだ。」

甘ったるそーなコーヒーを買った。

「おい、ヨージ、ファнта・オレンジ美味いぞ！」

「今日はコーラな気分だな。」

「コーラは歯が溶けるって言うぞ！ファнтаにしろ。ファнта！」
「ファнтаでもいいけど、トシローにはやんねーぞ。」

間接キスしたくねーもん。」

「口付けないで飲むから……。ファнтаにしろよ。」
「やっぱ、コーラだ。」

男の友情なんてこんなもんだ。

すると、おもむろにヒロミが財布を取り出して、
ファンタ・オレンジのボタンを押した。

『俺に買ってくれたのかな？』と思ったが、
蓋を開けて飲み始めた。

「あゝ、おいしー!!」

「うめえー!」

「トシロー、可愛そうに。コンバース買ったもんな。

我慢、我慢……。」

三人で見せびらかしながら美味そうに飲んでいる。

『あー、ジュース買ったやおうかなあ。明日から節約しようかなあ・
……。』

そう思った矢先、ヒロミがファンタ・オレンジを俺に差し出した。

「一口飲んでいいよ。」

『か・か・か・間接キスしちゃうじゃねーかよ。』

躊躇したが、ここでグズグズしてるのはカッコ悪い。

何食わぬ顔して一口飲んだ。

何食わぬ顔してヒロミに缶を返した。

何食わぬ顔してヒロミはまたそれを飲む。

『こ・こ・こ・こいつ、何考えてんだ?』

「ねえ、まだ半分くらい有るけど、あげる。」
「えっ？」

「んじゃ、練習頑張つて・・・髪、似合ってるよ。」
そう言くとヒロミは背中を向け歩き始めたが、
何かを思い出したように立ち止まり、
振り返つて言つた。

「・・・気にしなくて平気だから。」
「えっ？」

そう言つたまま、ヒロミは走り去っていった。

「気にしなくて平気だつてよ。」
キヨウが背中を叩いた。

「何の事だと思う??」

「そりゃあ、あの事でしょ。ヒロミも気にしてたんじゃないの。」
「キヨウ・・・本当にそう思うか？」

「思う!あの一言を言つたために、ここでトシローが来るの待つてたんだぜ!」

「ホ・ホ・ホ・ホントか？」

「そうじゃなきゃ、間接キスしないっしょ!」

「そ・そ・そ・そうかな!」

「いや、ヒロミは誰とでも間接キスするかもよ。」
「ヨージがからかうように言つた。」

「・・・。」

「ジョーダンだよ、らしくねーなあ。」

「気にしなくて平気だつて言われたろ。髪も似合ってるし。」

「・・・余計気にするよ・・・。」

「いいなあ、トシロー、ファーストキスじゃんか。」

「おい、こういうのもファーストキスって言うのか？」

「さあね。どうだろうね。自分で考えたら。」

「なあ、からかわないで教えてくれよ。」

「しつつかし、ヒロミのことになると別人だな、トシローは。」

頭の中が炭酸で泡だらけになったような気がした。

今ならラブソングが書けそうだった。

そして何より、

ファーストキスは、いや、

ファースト間接キスは……

”ファンタ・オレンジ”の味がした……。

第五章・ジヨニー・B・グッド

「第五章・ジヨニー・B・グッド」

春になった。

高三になった。

授業も選択になり、クラスメートたちも皆バラバラになった。

ぼんやりとヒロミの後姿を眺める時間が少なくなった事を除けば、バンドは順調だし、ヒロミとも今まで通りで、

何事も無く毎日過ぎていく。

五月のライブまで後一ヶ月。オリジナルは二曲出来た。

ただ、当然の事だが誰も知らない曲なので、盛り上がりには欠ける。

後、三曲ほど、コピーする曲をセレクトしなければいけなかった。

「んじゃあ、今日は練習無しにして、各々コピーする曲を考える日にしよう。」

とキョウが言い出し、いつもより早い時間に駅についた。

電車は一時間に一本しかないので、

次の電車には三十分以上時間があつた。

「たまには待合室行ってみる？面白い事あるかもよ。」

駅の待合室は、代々、ミナミのヤンキー達の溜まり場で、

去年までは、やたら絡まれてうつとうしいので避けていたが、今年は三年、絡まれる事はないだろう。

”ミナミ”とは、俺たちの高校から、
川を挟んだ反対側の丘にある商業高校の事で、
俺たちは北側にあるので”キタ”、商業高校は南にあるので”ミナ
ミ”と、

古くから通称で呼ばれていた。

ミナミは、どういう訳かヤンキーが多い。

待合室のドアを開け、中に入ったが、思ったより人は少なく、
一番奥の隅に、何人かのヤンキー達がいるだけだった。

「なんだ、誰もいないじゃん。面白い事もなさそうだな。」

「おい、トシロー、あれ見ろよ、あれ・・・。」

ヨージが小声だが、ちよつと興奮気味にささやいた。

「あれって？」

「あの奥の一番端の女。」

「おお!!」

三人の目は釘付けとなった。

なんともアカ抜けた、なんともこの田舎に似つかわしくない、
なんとも美しいヤンキー少女ではないか・・・。

「おい、誰だ、アレ？」

「アレが噂の”ミナミのマドンナ”だ。」

ヨージの情報網はすごい。

「”ミナミのマドンナ”？」

「お前たち知らないの？何でも、去年、親の仕事の都合で、
東京から編入してきたらしい。」

「東京かあ。」

「親の仕事って、こんな田舎に来る位だから、左遷だな多分。」
キョウらしい分析だ。

「おい！コラア！何ジロジロ見てんだよ！」

その中の一人の男が俺たちに気付き、近寄ってきた。
ヤンキーは、人に見られるのが嫌いな奴が多い。
見ると必ず寄って来る。

「オメエー、トシローじゃねえか。」

「あっ？」

「俺の顔、忘れたっつーのかー。」

『何だコイツ？こんな奴しらねーぞ？』

「ノブ！元氣そうじゃねーか。」

キョウが先に気がついた。

「ノブ？ノブって、あの、泣き虫ノブかあ？？」

ノブは一つ下で、背が小さくて、口が達者で、
生意気だったので、よくからかっていた。
そしていつも最後に、泣きながら「憶えてろよ！」と捨て台詞を吐く。

「ノブ、お前、ミナミだったのかあ。」

あんまり小さいんで全然気がつかなかったぞ。」

もう、ヨージがからかい始めている。

「小さい？もう小さくないぞ！」

確かに、見違えるほど身長が伸びていた。

「牛乳沢山飲んだのか〜！」

「そういや、テメエ、さっき何て言った？！トシローって言わなかったか？」

「いつからそんなに偉くなったんだ？？」

「俺にそんな口聞いて良いのかあ〜？ミナミの仲間が黙っちゃいないぜえ〜。」

キョウト、ヨージはもう笑い転げている。

「テメエ、ちょっと身長伸びたからって、何も変わらねえー事教えてやる！」

そう言つて、ノブのほっぺたをつねった。

「生意気なのは、この口か！この口か！」

「イテテテテ、ごめん、許してトシロー君、ゴメンなさい・・・。」

「最初からそうしてりゃいいんだ。いきがるから。」

ノブの顔つきが、”泣き虫ノブ”の顔に戻った。

「ミナミ行つたからって、お前が強くなつたわけじゃないんだぞ！勘違いすんなよ！」

「ノブ！どうかしたのか？」

待合室のドアを開けて、誰か入ってきた。

「あつ、ノリユキさん！こいつら何とかしてくださいー！」

「あ〜？」

その男を見て俺たちは固まった。

なんともひさしの長〜いリーゼント。

長ランに、幅の広〜いボタン。

何事にも程度つてもんがあるだろうに、

コイツのファッションはイキまくりすぎだ。

開いた口が塞がらないってのはこういうことだ。

「ノリユキさん、こいつら、ミナミをナメてますよ。」

追いつちをかけるようにノブは言い付ける。

「ヨージ、キョウ、トシローも、ひっさしぶりじゃん!」

「おう、ノリユキ、元気そうじゃん。」

それにしてもスッゲーカッコだなあ……。」

ヨージが答えた。ノリユキも俺たちと中学時代一緒だった。

特にヨージとは仲がよく、ノリユキが無事ミナミに合格したのも、ヨージが付きっ切りで勉強を教えたからだ。

ノリユキは中学時代から、

ミナミへ行つて”番長”になるのが夢だと言っていた。

「ノリユキ、番長になれたのか?」

「おうよ、カッコいいだろ、この長ラン。」

もうミナミで俺に逆らえる奴はいねえよ。」

「スッゲーカッコしてんな。銀蠅が入ってきたかと思ったぞ!」

「そんなにカッコいいか?! ヨージに誉められるのが一番嬉しいよ。」

「……………」

「……………」

「……………」

「なんだ、トシローもキョウも、やっぱりまだバンドやってんのか？」

「俺もやってんだぞ。」

「えっ、ヨージ、入れてもらったの？いいなあ……………」

「なあトシロー、俺もバンドいれてくれよー。」

「……………考えとく。」

「バツカだなあ、俺だって入るのに二年かかってんのに、お前何年かかると思ってるんだ。楽器なんかできねーだろ？」

「そー言わないでさー、楽器教えてくれよ。頼むよ、キョウ……………」

「……………」

「よし、ノリユキ、そんなに入りたいんなら、まずは下積みだ。

これから俺たちがライブやる時は、必ず客集めてくる事。

そしたら、俺から二人に頼んでやる。」

「そんな事で良いのか？ありがと、ヨージ。よし、任せとけ！！」

ヨージの前ではミナミの番長も形無しである。

「ちょっと、ちょっと、ノリユキさん、良いんですか？

こいつら、随分ナメた口利いてますよ。」

ノブが隣からノリユキに囁いた。

ボカッ！と音がするほど、ノリユキはノブの頭を殴った。

「バカヤロー！テメエ、誰に意見してんだ！

いいか、こいつらは昔から全部ナメてんだよ。

自分の認めた奴以外、大人だろーが、教師だろーが、

芸能人だろーが、ヤクザだろーが、みんなナメてんだ。
ナメられたく無かったら、筋通して、認められるしかねエ。
それにヨージは言わば命の恩人だ。

ヨージがいなかったら、今の俺は無えんだよ！

ノブ！こいつらにちょっかい出したら、どうなるか解ってんだろーなー！！」

「オ、オ、オス。」

泣き虫ノブは今にも泣きそうだ。

ノリユキに、妙な迫力が付いた事だけは確かだった……。

「ノリユキ、まあ、そう言っなよ。俺はノブの生意気なところ面白いからさ。」

「人をナメクジみたいに言うな……。」

「俺は命を助けた覚えは無いぞ……。」

そんな事より、マドンナ紹介しろよ。」

「おう、お安い御用さ。」

ノリユキはマドンナたちが座っている方へ歩いていき、俺たちを手招きした。

「クミコ、俺のダチ紹介するぜ。ヨージと、キョウと、トシロー。

んで、こっちがクミコちゃんです。可愛いだろ？

変な気起こすなよ。でもまあ、君たちじゃあダメだけどね。

クミコは強い男が好きだってさー！！」

「ども……。」

「……。」

クミコは軽く会釈をするだけで、こっちを見ようもしない。

色の白い、北欧系の顔つきで、軽くパーマをかけた茶色い髪がよく似合っていた。しかも、ピンクの口紅と、長いスカートの間からのぞく、紫の靴下が妙に色っぽい……。

「クミコちゃん、何処から来たの？」

「すかさずヨージが話し始めた。」

「……東京。」

「どう？こつちへ来て？」

「……べつに。」

ヨージがなんとか会話に弾みをつけようとしているが、一向に相手にする気は無いらしい。

淡々と、シラけた顔で答えるだけだった。

少しムカついてきた。からかってやる！

「おいアンタ、部屋にジエームスディーンのポスター貼ってるだろ？」

「えっ？」

突然の質問にビックリしたのか、ついに俺の顔を見た。

「俺、超能力あるんだよ。貼ってたんだろ？」

クミコが何か言おうとした時、横槍が入った。

「俺も、貼ってるぞ。」

「俺も、俺も、ジエームスディーン、カッコいいもんねえ。」

「えゝ、私も欲しいなあ、ジエームスディーン。」

知らぬ間に復活していたノブまでもが言った。

「ああ、ジエームスディーンね。アレはカッコいい。」

「では問題です！ジエームスディーンが主演した映画は？」

「えっ、ジエームスディーンって俳優だったの？」

「俺は知らん。」

「えっ、ミュージシャンかと思ってた……。」

「フー」とため息を付き、クミコが俺を見て、かったるそうに答えた。

キラキラした目だった。

「エデンの東、理由なき反抗、ジャイアンツ……でしょ。」

「正解。」

「さすがあー！」とか、「すごい！」とかミナミの連中がざわめく。

『盛り上がってきた。もうこっちのペースだ……。』

「では、次の質問。皆さん、矢沢永吉は知ってるよね。

では、永ちゃんの歌で好きな歌はなんですか？」

「時間よ止まれ！」

「俺も！」

「私も！」

「俺はファンキーモンキーベイビー！」

何年前かに”時間よ止まれ”がヒットした。

やつら、それしか知らない……。

まあ、唯一、ノブはキャロルを知っているようだが……。

「……I LOVE YOU OK!」

一瞬の沈黙が皆を包んだ。

「ほう……。」

さすが東京者、答えが違う。

「んじゃあ、最後の質問です！」

皆さん、好きな歌手、またはミュージシャンは誰ですかー！」

「俺、聖子ちゃん。」

「私、マツチ！」

「銀蠅！」

初めは、からかうつもり質問コーナーだったが、クミコはどんな音楽を聴くのか、本気で知りたくなっていた。

「アンタは？」

「……知らないと思うけど？」

「良いから……誰？」

「……デビット・ボウイとか……。」

思わずクミコの手を取り握手した。

「俺、トシローってんだ。よろしく。」

感動した。まさか、キョウ以外の口から、

デビット・ボウイの名前を聞くとは思ひもなかった。

呆然として、手を握り締めたまま、クミコの顔を見ていた。

クミコも俺の顔を見ていたが、フツと我に返り、手を振り払った。
「イテェーな、何すんだよ。」

「コラ、トシロー、クミコの手握りやがって、
いつからそんなに手が早くなっただんだあ。」
ノリユキがヘッドロックをかましてきた。

「解った解った、スマン、つい……。」

「おい、トシロー、そろそろ電車来るぞ！」

「ノリユキ、お前もいつしよに帰るか？」

「いや、もうちょっと遊んでく。」

「そうか、んじゃ、俺たち帰るから。」

「またな。」

ヘッドロックを振り払い、急いで待合室を出た。
ドアを閉める時、クミコと目が合った。

“バイバイ”のつもりで、クルリと手を廻した。

クミコも指だけで“バイバイ”と返してきた。

「おい、あのマドンナ、本物だぞ。感動した。」

「トシロー、いきなり手握んだもん、ビックリしたぜ。」

「いや、だって、感動したんだ。いきなり、デビットボウイだぞ。」

「ジギースターダストだぞ！」

「確かにいいセンスしてるよ。さすが東京者だ。」

「それにしても、あいつら素直でいい感じだったな。」

「うん、悪そうなかッコしてっけだな。」

「しかし、ノリユキも貫禄ついたな！。夢の番長になったんだもん
な。」

「いまどき、番長はねーけどな。」

「でも、夢叶えたんだからすごいよ。」

久しぶりにノリユキと、ノブに会い、
クミコの持つ、都会的な雰囲気を受け、俺たちは興奮していた。

「おい、一曲決めたぞ。」

「えっ？」

「デビット・ボウイか？」

「いや、クミコのためじゃねえ。あいつら皆のために演る。」

「永ちゃんか？嫌だぜ、俺。」

「いや、それでもねえ。」

「なんだよ、じらすなよトシロー、何演るんだよ。」

「ジョニー・B・グッド！」

第六章・ロックンロール・ショウ！

「第六章・ロックンロール・ショウ！」

いよいよ、待ちに待ったライブ当日。

”新人生歓迎ライブ”と、ダサく銘打たれてはいるが、そんな事はどうでも良い。

この日のために練習を繰り返してきた。

キョウはレスポールを売り、

ヨージの手の平はマメだらけになり、

俺の左手の指先も、今まで以上にガチガチになっている。

俺たち”松竹梅”は、今日から始まる。

会場は、二つある体育館のうちの小さい方で、入場無料、土曜日なので、学校の生徒だけではなく、誰でも入場できるようになっている。

出演バンドは、二年が、フォーク系と、ロック系の合わせて二つ、三年は、フォーク系が三つと、ポップス一つ、そして俺たちの、全部で七つのバンドが演奏する。

持ち時間は、セッティングの時間も入れて三〇分。

授業が終わり次第集合して、部員全員でパイプ椅子を並べ、十二時半より二年から始めた。

その後、フォーク系を行い、ポップスバンド、

最後に俺たちが演奏することになっていた。

今回のLIVEで、一番盛り上がる、ないしは一番お客を集めたバンドが、

夏休み明けに行われる”文化祭”で、

”一番良い時間を選ぶ事が出来る権利”を得ることになっている。

俄然張り切るわけだが、

ポップスバンドが群を抜いて人気があり、
後はみんなどっこいどっこいであつた。

俺たちのバンドも例外ではなく、

こんなクソ田舎、洋楽聴いてる奴なんてほとんどいないし、
ポップスバンドは、最近流行りのボーイソプラノで愛を囁く、
女受けするバンドのコピーを中心に行っているので、
毎回、悔しい思いをさせられてきていた。

今回も勝算は皆無に等しい……。

予想通り、ポップスバンドが始まる三時頃より、
女生徒の数が増え始め、
小さな体育館は甘い香りに包まれている。

どうせ、こいつらの演奏が終われば、一人減り、二人減り、
俺たちの演奏が中盤に差し掛かった頃には、
半分くらいの人数になる事だろう……。

「あゝ、緊張するー！」

さっきからヨージは緊張しっぱなしだった。

初めてのステージ、初めての演奏、
憶えて間もないドラム……。

緊張するなって言う方が野暮である。

「大丈夫、大丈夫、今にこのドキドキが辞められなくなるから。」

キョウがヨージの緊張を解すように言った。

実はさつきから、俺も緊張していた。

初めてのベース、初めての松竹梅、
俺たちの時間が近づいている……。

ポップスバンドの最後の曲が終わった途端、

普段はすぐにアンコールの掛け声が聞こえてくるのだが、
客席が随分ざわついている……。

「おい、なんか変だぞ……。」

ステージの脇から顔を出し、客席を見回した。

信じられない光景だ。

”ミナミ”のヤンキー達が、ゾロゾロと入場しているではないか。
二十人、いや、三十人はいる。

「おい、なんか凄い事になってるぞ!」

「やつと、来たか……。」

キョウが顔色一つ変えずに答えた。

「この、策士め！」

すべては、キョウの策略だったのだ。

たぶんヨージからノリユキへ指令を出し、

俺たちの演奏が始まる前に入場させ、

ポップスバンドのアンコールを遮る……。

確かに、”キタ”のライブに”ミナミ”が見にくる事は、

羊の群れに狼が紛れ込むような物だ。

会場がざわめき、アンコールなどそっちのけになるのは想像できる。

しかも、何人ものヤンキーが入り口付近に溜まっているので、

帰りたくても帰れない。

「お前らの仕業かよ。汚ない真似しやがって……。」

アンコールを待っていたポップスバンドの一人が悔しそうに言った。

「残念だなあ。今年の文化祭は俺たちのもんだ……。」

キョウは、こめかみ辺りを指で叩きながら吐き捨てる。

恐ろしい男だ……。

キョウが味方で本当によかった。

「ざまあみろだ！」

過度な緊張から開き直ったヨージも追い討ちをかける。

「アンコール無いんで、次のバンド、お願いしま〜す。」

『俺も悪態吐いちゃおうかなー』と思った矢先、

進行係がいいタイミングで声を掛けた。

「よし、フルボリユームでイクぜ！」

ステージに上がると、今までもらった事の無い声援を受けた。
ノリユキと、ノブはすでに興奮状態にあり、
訳がわからない事を叫んでいる。

「待たせたなー。」松竹梅”だア！ Show me please
！」

”ズドン！”

ヨージのスネアの合図で、
俺たち、”松竹梅”はデビューした。
毎日毎日、繰り返し練習してきた曲だ。
そして初めて作ったオリジナルだ。

誰も聴いた事のない、誰も知らない”名曲”だ。

『コウイチよ、テツオよ、
お前らの選択が、間違いだつたと気付く日がきたとしても、
もう手遅れだ。』

俺は、お前らの何十年後が手に取るように解るぜ。
せつかくのチャンスを棒に振ったなあ。

お前らのスタイルを俺に見せてみるよ。
お前らの明日を俺に見せてくれよ。

『

そんな事を考えながら唄った。

キヨウの考えた進行通り、
MCは曲紹介のみで、四曲を突っ走った。

「あつという間の三〇分。もう最後の曲になっちゃいました。
これは、今日、遙々”キタ”まで来てくれた、”ミナミの皆”に
送ります。

・・・ジョニー・B・グッド！」

田舎者とは言え、この曲くらいは耳にした事があるだろう。
しかも、ミナミにしてみたら、ロックンロールが、
目の前で演奏されるのを見るのはきつと初めての事だ。
初めは戸惑っていても、”キタ”の連中より正直な分、
素直に楽しんでくれている。

”ジョニーBグッド”は、山奥の田舎者の歌だ。

”読み書きもロクに出来ないけれど、
得意のギターでいつか世に出てやるぜ”って歌だ。

俺たちや、ミナミの奴等にぴったりの歌だ。

Go go go Johnny go go Johnny
ny B Goode

行け！田舎者！行くんだ！田舎者！

と俺は叫び続けた。

客席はミナミの奴等に占領されたかのように、立ち上がって手を叩く奴ら、へたくそなツイストを踊る奴ら、ステージの前に来て、一緒に叫んでる奴ら、等など……、大変な騒ぎだ。

ノリノリな態度と裏腹に、俺の体は鳥肌が立っていた。そしてそれが、なんとも言えない快感であつた。

初めてアンコールをもらったが、もちろん用意してなかったのもう一度「Show me please」を演つた。

大騒ぎは、知らない曲でも続いた。

俺たち、「松竹梅」のデビューは、「軽音部」始まって以来の、いや、多分「キタ」創立以来の「ロックンロール・ショー」になった。

全てを終え、俺たちはステージを降りた。

物凄く疲れ、汗だったが、今までに味わつた事の無い爽快感だつた。

客席は、まだ興奮冷め遣らぬといった感じだったが、ノリユキに礼を言つたために出て行つた。

「ノリユキ、ありがとな。おかげで大成功だよ。」

「いやゝ、よかったよ。もう、ノリノリだぜゝ。約束通り、客連れてきたんだから、メンバーにしてくれよな。」

「まだまだ、こんなくらいじゃメンバーにはなれないさ。今度は文化祭だ。」

ヨージは次を狙っていった。

「いや、ノリユキはもうメンバーだ。松竹梅の一員だ。ホント、嬉しかったよ。ありがとな。」

「トシロー……。」

ヨージが心配そうな目で俺を見た。

「でも、演奏が出来るわけじゃねーし、練習にも毎日来ねえだろだから、ノリユキは”客席担当の応援団長”だ。

だが、スタッフじゃねえ。メンバーだ。それでいいか?」

「おう、応援団長か。カッコいいなあ。やりてえー。」

「よし、決定だ。」と言って、握手をした。

「ノリユキ、早速仕事だが、頼んで良いか?」

「おう、何でも言ってくれ、キョウ!」

「あそこに突っ立ってる、ポップスバンドの奴等に挨拶してこいよ。」

”今日から松竹梅のメンバーになったノリユキだ、ヨロシク。”
って。」

「おう、そうか、言ってくる。」

ノリユキはニコニコで、リーゼントを揺らしながら走っていった。

「おい、キョウ……。お前、いつか刺されるぜ……。。」

第七章・君が僕を知ってる

「第七章・君が僕を知ってる」

「さあて、後片付けの前に、ちょっと一服してくるか。」

「俺、タオル置いてきた。取ってくるから、先に行っててくれ。」

皆に遅れて体育館を出たところで呼び止められた。

「トシロー。」

振り返ると、クミコが立っていた。

『いきなり呼び捨てかー。』と思ったが、悪い気はしない。

「ほら、差し入れ。」

クミコがわざわざ買ってきてくれたのか、コーラを差し出した。体育館の側面は人通りが少ない。そっちへ歩いていき、腰をおろした。

何となく、人目が気になったのだ。

クミコも俺の隣にしゃがんだ。

コーラの蓋を開け、グビグビと飲んだ。

ほとんど一気に飲み干してしまった。

炭酸はやっぱり喉で飲まないだね。

「なんだ、来てたんだ？」

「せっかく来てやったのに」なんだ」はねえだろ。コーラ返せ。」

「スマン、そういうつもりじゃ……。んで、どうだった？ライブ？」

「うん。結構やるな。認めてやるよ。」

「ファンになっちゃった？」

「バーカ！いい気になんなよ。」

「ホントは好きになっちゃったとか。」

「テメエー、本気で怒るぞ。コーラ返せ！！」

「解った、解った。ところで、こっちには慣れたか？」

「まあな、遊ぶとこ、何にもないけどな。あいつら良いヤツらだし……。」

「そうか、そりゃ良かった。」

「トシロー、”クミコ”って呼んでいいぞ。」

「えっ？」

「私、超能力あるんだ。呼んでいいぞ。」

「……。解った。」

”フフツ”と二人で笑った。

クミコとは不思議とスムーズに話せる。

ヒロミとだったら一々考えちゃうのに……。

ドキドキしないからだろうか。

”相性がいい”とはこういう事なのだろうか。

「タバコ吸いに行くところだったんだろ？」

「ん？ああ、でもいいよ、コーラ貰ったから。」

クミコ、吸わないのか？何なら一緒に行く？」

「私は吸わない。……。タバコやめた方がいいぞ。」

「意外な発言だねえ。体に悪いとか言うのか？」

「うっん。キスする時臭いから。」

「え？」

”ドキッ！”とした。

思わずクミコのピンクの唇を凝視してしまった……。

「何考えてんだ！このスケベ！そう意味で言っただんじやない！」

「へへッ、そういう意味かと思っただぜ……。」

でも、今の発言、クミコ、キスしたことあるんだ。」

「あるよ。」

「えっ？あるの？」

「アツタリめーだろ、いくつだと思っただ。」

えっ？トシロー、キスしたことないの？？」

『そうなのか……東京の高校生はみんなキスしてんのか……』

「へへ、カッコつけてる割りに純情なんだ。」

何か、

物凄くバカにされてるような、

物凄く自分が遅れているような、

物凄く自分が情けないような気になった。

「俺は硬派なんだ！」

「へへ、でも、してみたいだろ？毎晩、Hな本とか見てるくせに。」

『本当に超能力あるのかな……。』

「そりゃあ、男だもん、興味あるさ。なんならクミコ、相手してくれるか？」

「バーカ、するわけねえーだろ！」

クミコの視線が、突然、俺の後ろに向けられた。
「トシロー、結構モテるんだなあ……。んじゃ、私、帰るわ。」
「えっ？」

振り返ると、ヒロミがこっちを見ていた。

「お・おう！クミコ、またな。サンキュー！」

クミコは立ち上がり、

「カッコ良かったぞ！」と小さな声で言った。

俺はクミコを見上げたが、こちらを見ようとせず、
ヒロミが立つ、体育館の入り口の方へ歩いて行った。

クミコと入れ替わり、ヒロミが俺の隣に、しかも、クミコより近くに座った。

「今の人、誰？」

「ん？あー、ミナミの転校生。」

「ふーん、キレイな人……。」

「そ・そうか？」

何を動揺してんだか、クミコには何の感情も無いのに……。

「これ、差し入れ。」

そう言つて、ファンタオレンジを差し出した。
蓋を開け、少し飲んだ。

さすがにコーラの後だ。ちよつときつい……。

「ライブ、凄かったらしいね。」

「……って言う事は見てないの？」

「うん、だって部活だもん。」

「そうか、県大会もうすぐだもんな。」

「うん。でも、文化祭は必ず見るよ。」

「ちよつと恥ずかしいなあ……。」

「なんで？」

「なんでだろ。」

「ヨージ君たちは？」

タバコを吸うポーズをして見せた。

「タバコか……。」

「ねえ、タバコやめたら!？」

「えっ？」

『ヒロミも”キスすると臭い”とか言うのかな。』

まさか、キスしたことあるとか……。

相手は……？アキラか？えっ？そんな……。」

「ねえ、ちよつと、聞いてるの!？」

「えっ？」

「もう、だから、タバコは体に良くないって!」

「うん。」

「ねえ、どうしてタバコ吸うの？」

「……。」

余りにも率直な質問に、言葉を失った。

『ホントだ、なぜ俺はタバコを吸うんだろう？』

中毒？確かにもう中毒なのかもしれない。

じゃあ、なぜ止めようとしなないんだろう？

止めようとすれば止めれるかもしれないのに……。

確かに初めは、タバコを吸う事で、

ちよつと大人になったような、ちよつと悪い奴になったような気がする、

それがカツコよくて吸い始めた。でも今は、そんな気もない。普通に吸ってる。飯食うのと同じように吸ってる……。』

「なぜなんだろ……。。」

「もーう、いい加減なんだから。」

「スマン。」

「ねえ、今日から真面目になって。タバコ吸ったり、授業サボったりするの、

やめて、”普通”になつて。」

「普通？」

「そう、普通。勉強して、大学行って、ちゃんと就職するの。」

「お前、そう言うのが好きなの？」

「うん。普通がいいに決まってるよ。」

「お前……。今日機嫌悪い？」

「どうして!」

「何かイライラしてない？」

「どうして私がイライラするわけ？イライラするわけないよ！

人が真面目に話してるのに、どうしてそんな事言うの！

もう、イライラしてきちゃったじゃない。帰る!」

そう言つて、立ち上がると、早足で歩き始めた。

「ヒロミー！ゴメン!」

俺は、慌てて後姿にそう叫んだ。

ヒロミは立ち止まり、こっちを向いた。

「俺、普通とか、真面目とか、まだよく解らないし、
いい加減に見えるかもしれないけど、
俺は俺なりに一生懸命やってんだ。
だから・・・お前だけは解っててくれ。」

俺は、初めてヒロミの前で自己主張した。

ヒロミは首を傾げてニコっとしながら、

「わかってるよ・・・。」と言い、

小さく”バイバイ”と手を動かし、
また後ろを向いて歩いていった。

また胸が苦しくなった。

その後姿に、「好きだ〜!」って叫びそうになったけど、
心の中だけにしておいた。

それにしても、今日のヒロミは、
なぜかいつものヒロミとは違った・・・。

第八章・雨の物語

「第八章・雨の物語」

梅雨なんて大嫌いだ。

ジメジメうつとうしいだけでなく、
屋上の例の場所もびしょ濡れな訳で、
タバコを吸うにも、授業をサボるにも難儀する。
部室は時々、抜き打ち検査が入るので、
あまり頻繁に使えない。

ただ、どうしても、昼飯の後の一服だけは我慢できないし……。
なんとも嫌な季節だ。

気分だけでもサッパリしたくて、
東京帰りのお姉さんのいる美容院へ立ち寄った。
あれから伸ばしっぱなしの髪は、もうパンクじゃなくなっていた。

「聞いたよー！先月のライブ、凄かったんだって？」

「うん、まあ……。」

「私の友達がさー、バンドやってるんだけど、

来週のライブ出てくれないかなって言ってたよ。」

「来週のライブって、公民館のやつ？夜やるやつでしょ？」

「そうそう、私も手伝い頼まれてるのよ。」

「えっ？それに出させてくれるの??」

「出させてじゃなくて、こっちからお願いしたいのよ。
参加バンドも少ないし、”ニシ”始まって以来の伝説バンドじゃない。」

「いや、それほどでも。」

「ねっ、出てよ。友達に言っておくから……。」

「うん……他のメンバーにも聞いてみないと……俺的には
o.k!」

「よしっ！決まり！詳しい事は友達から電話させるから。
よし、そうと決まれば、カッコよくしてあげるね。」

『おいおい！やったぜ！！大人から出演依頼がきたよ！！』

俺の頭の中は、もうそのライブでいっぱいだった。

急いでキヨウとヨージに連絡した。

二人とも大喜びであった。

「おい、喜んでばかりもいらねえぞ。」

今度の相手は大人だ。どうせやるなら大人バンドも喰っちまおう。

「トシロー、強気じゃん。ヨッシャー、練習だ。」

「後一週間しかないから、新曲はやめて、前回と同じ曲で行こう。
ただ、下手に学校にバレて禁止させられるとマズい。」

ヨージはノリユキに連絡して、”ミナミ”の客集める。
今回、”キタ”のヤツラには秘密だ。」

「え、ヒロミにもかあ？？やっとな、聴いて貰えると思ったのに。」

「ヒロミくらい言ってもいいけど、多分来ないと思うよ。
真面目だから……。」

そうなのだ。

今度のライブは、金曜の夜、七時開演だ。

”ミナミ”のヤンキー達ならともかく、”キタ”の連中は多分来ないどころか学校にチクリ、禁止にでもさせられたら、たまったもんじゃない。

「ちえっ、少しやる気がうせたぜ……。」

でも、いいか！文化祭に大人のお客集めちやえば、伝説の黄金バンドとして歴史に残るだろう。」

「そうそう、その意気だぜ、トシロー、さあ、練習しよ。」

一週間は”あっ”という間に過ぎた。

「わりいゝ、俺、着替え家に忘れてきちゃったから、一回帰ってか
ら行く。」

先行ってて。」

そう言っつて、ヨージは慌てて部室を出て行った。

「どうする？準備までには時間あるし……。」

「オリジナルの方でも進めますか。」

キョウと二人でアコースティックギターを弾きながら、メロディーを考えた。

今度の新曲は渋いバラードになりそうだ。

「ラブソングにしたいなあ。」

「いいけど、詞が書けねえ。」

「ヒロミに捧げる歌でも書いたら。」

「うん、いまいち書けないんだよなあ。エピソードがないって言うか……。」

「いや、文化祭に向けて、ラブソング、二曲は欲しいよなあ。」
「うん……。」

”トントン”と誰かがドアをノックした。

一瞬ヒヤツとしたが、抜き打ちに備え用心していたので、
「ハイハイー！」と答え、ドアを開けた。

「おう！サチ！」

「キヨウ君いる？」

「ああ、いるよ！入れよ。」

「うん。」

そう言ってサチを招き入れた。

”サチ”はキヨウの彼女だ。

二年の時、キヨウにラブレターを書き、
それ以来、二人は付き合っていた。

ここんどこ、練習ばかりで、あまり一緒じゃなかったけど、
時々、一緒に駅まで帰ったり、夜に電話しているらしい。

「ちょっと話があるんだけどいいかなあ……。」

なんとなく、”お邪魔なのかな”と感じた俺は、

「んじゃあ、俺、先に公民館へ行ってるよ。」

と言って部室を出た。

玄関を出ると、雨だった。

『また雨かよ。今日は曇りだって言ってたのによ。』

傘を持ってこなかった。

学校から公民館まで、走っても十分はかかる。
服は着替えがあるからいいとしても、
ベースを濡らしたくなかった。

「傘、持ってこなかったの？」
そう言つて、ヒロミが隣に立った。

「うん、今日は雲りっだっていうからさあ。」

「この時期、傘くらい学校へ置いておいたら。」

「あー、失敗した。」

「入ってく？ 駅まででしょ。」

「いや、今日は公民館なんだ……。」

「公民館？ なんで？」

「うーん、ヒミツ。」

「ふーん、誰かと待ち合わせとか……。」

「違う、違う！ ！しょうがねえなあ、内緒だぞ。」

じつは……。」

以前、ヒロミには「真面目になれ！」と言われているので、
ライブの事は言いたくなかった。

「そんなに遅くに家に帰るの。」と怒られそうだし。

だから最初からのいきさつを、少し大げさに説明し、

「どうしても断れなかったんだ。」ってところを強調して話した。

「えゝ、すごいじゃん。大人と一緒にライブやるなんて！」

「あれ？」

「なにが？」

「怒んないの？不良って。」

「もう慣れた。これくらい……。仕方ない、送ってってあげる。」

そう言ってヒロミは傘を差し出した。

真っ赤な傘だった……。。

嘘のような出来事だった。

もし、神様がいるとしたら、今は絶対に俺の味方だ。

ヨージ、着替え、忘れてきてくれてありがとう。

サチ、ありがとう。

そしてヒロミ、いいタイミングで現れてくれてありがとう……。。

素直にそう思った。

雨の壁が、傘の中と外を完全に遮断している。

俺は、右手で傘を持ち、左側にいるヒロミが濡れないように差した。

『傘の中は、こんなに小さかったっけ。』

ヒロミはこんなに小さかったっけ。』

触れているヒロミの肩のぬくもりが、胸を締め付ける。

「部活、残念だったな。」

「うん、終わっちゃった。」

「でも、全力で頑張ったんだろ。」

「うん、悔いはないよ。」

「なら、よかった……。」

「……。」

時々、たわいもない話をしたが、いつものように会話は続かなかった。

でも、ずっとこのままでもなくて、いつもより歩く速度を遅くした。歩いて二十分の道のりを、三十分かけて俺たちは歩いた。

「あゝ、もう着いちゃったね。」

「ああ、着いちゃった。」

ヒロミに傘を渡し、公民館の入り口の屋根の下に入った。

「トシロー君！」

ノブだ。仲間を二人連れてる。嫌な奴に出くわしちゃった。

「トシロー君、今日のライブ、見させてもらいます。」

あつ、この人、トシロー君の彼女？綺麗な人だなあ……。

さっすが！トシロー君！」

思わずヒロミと顔を見合わせた。

ヒロミはニコツとして言った。

「じゃあ、ライブ頑張つて。」

いつもよりキラキラした目で、上目使いに俺を見た。
また胸が”キュン”とした。
「うん。ありがと……。」

赤い傘をクルクルつと廻しながら、ヒロミは行ってしまった。

「トシロー君、すいません。邪魔だったみたいで。」

「おい、ノブ、お前なんか変だぞ。熱でもあんのか？」

「何言ってるんですか、いつもと同じですよ。」

それよりトシロー君、俺って昔からトシロー君と友達ですよね。」

「友達って……お前……。」

「そうですよね！」

「うん……まあ、そうだけど……。」

「ホラ！俺の言った通りだろ！！俺とトシロー君は小さい頃から、
深い友情で結ばれてんだよ！！」

「スゲー！ノブ、スツゲー！なあ、俺たちも紹介してくれよ。」

「よし、解りゃーいいんだ。トシロー君、こいつら俺のダチなんす
けど、

この間のライブでファンになっちゃったみたいなんで、
憶えといてやってください。」

「ファンって……。」

悪い気はしなかったが、
初めてのファンが”こいつら”ってのも、どうかと思った。

「おゝし、今日から俺たちは友達だ。今日のライブ見るだろ？
それまで暇だろ？」

「ハ・ハイ……。」

「んじゃあー、準備手伝うよなー。今日は特別スタッフだ。準備と後片付けよろしくー!」

「ウッス!うれしいっす!カッコいいよな、スタッフだってよ。」

こいつら……どうかしている。

こうも単純だと、俺が何か仕出かして、こいつらがガツカリした時、「こんな人とは思わなかったー!」とか言いながら、手の平返したように、敵に周るんだろーなー。気をつけよ……。

ライブのための準備が始まった。

仕事を終えたお兄さんたちが、車で機材を運んでくる。

それを体育館まで運んだり、椅子を並べたり、

お兄さん達の小間使いのような事をさせられた。

この仕事をさせるために、俺たちを呼んだんじゃないだろーなーと、疑いたくなるほどハードであつた。

だが、さすが大人。

凄い機材だ。

まるで本物のコンサートのようだ。

ヨージが来た。

「おまたせー。あれっ?キョウは?」

「いや、サチと一緒にだったから、そろそろ来るんじゃないかな。」

「ふーん。それにしても、スッゲー、ドラム……。タムいくつについてんだあ。」

「いくつあってもお前には叩けないけどな。」

「それを言っちゃあ、おしまいだろー!」

「ハーイ、リハーサル行きま〜す！最後のバンドから。」

『へ〜、リハーサルって最後からやるのか。』

『へ〜、無理にハウリングさせて、イコライザーで消すのか。』

『へ〜、リハーサルって、最後まで演奏しないのか。』
などなど、感心させられっぱなしだった。

「おい、次、俺たちだぜ。キョウどうしたんだろ？」

「うん、入り口まで見に行こうぜ。」

入り口でキョウを待ってた。

東京帰りのお姉さんが慌てて俺たちを呼びに来た。

「ちょっと、何してんの？リハーサル、始まるよ。早くして。」

「ごめん、ギターがまだ来てないんです。」

「まだって、もう6時よ。」

「あつ来た。あれ、そうじゃないか？お〜いキョウ〜！！」

キョウは、傘も差さずに歩いてきた。

激しい雨の中を、ギターが濡れないように抱えながら、ズブ濡れになって・・・。

「おい、何か変だぞ・・・。」

第九章・雨上がりの夜空に

「第九章・雨上がりの夜空に」

ズブ濡れのキヨウが到着した。

「おい、キヨウ何やってたんだよ。おせーよ。」
「……………」

ヨージが急かすように言ったが、反応がない。

「あら、あら、ズブ濡れじゃない。いい男が台無しよ。
着替え持つてるんでしょ。早く楽屋で着替えなさい。
髪、セットしてあげるから……………」

お姉さんがキヨウを楽屋へ連れて行く。

「お姉さん、キヨウの事ヨロシク！俺たちリハーサルしてきまーす
！」
「了解ー。しっかりねー。」

「キヨウ無しでリハーサルすんのか？」
「ああ、あんなの、音量決めるだけだから、ノブにでも弾かせる。」
「何かへんだなー、今日のキヨウ……………」
「ああ……………」

嫌な予感がしていた。
俺が部室を出てから、”サチ”と何か有ったに違いない。

リハーサルはノブにギターを弾かせた。
ノブはギターなんて弾いた事なくせに、
大喜びで、でたらめに弾きまくったために、
随分戸惑った。

さあ、開場だ。

俺たちは一発目なので、楽屋に戻った。
キヨウは楽屋の隅っこでギターを拭いていた。

「おい、キヨウ……。何があつたか言ってみるよ。
演りたくないなら帰ってもいいぞ……。」
「いや……。演る。」

ヨージには、「俺が聞くからお前は喋るな」といつておいた。
ヨージは何か言いたげに俺を見たり、キヨウを見たり、落ち着かない様子だ。

「わかった。何も聞かないから、演奏は頑張ろうぜ。」

「実は……。フラれたんだ……。」

「えっ？」

「えーーーーー!!!!!!」

「なんでえーーーー！嘘だろ、キヨウ！」

サチがキヨウを振る訳がなかった。

サチはキヨウにベタ惚れだった。

いつも俺たちの練習を、廊下からコッソリ見ていた。

いや、俺たちじゃない、キョウを見ていたんだ。

キョウがサチを振るなら解るが、まさかあのサチが……。

「何かの間違いだ、キョウ、詳しく話せ！」

「詳しくも何も……好きな奴が出来たんだと。」

「あ~~~~~!!!!!!」

信じられなかった。本当に信じられなかった。

「絶対何かの間違いだ！俺、電話してくる。」

「やめてくれ！」

「だって……。」

「もういいんだ。余計なマネすんな。……ホントにもういいんだ……。」

「一つだけ、頼みがある。」

「何だ？」

「今夜の最後の曲、”FEEL SO BAD”に代えてくれ。」

「いいけど……。」

「エンディングのギターソロ、俺が合図するまで、好きなだけ弾かせてくれ。」

「……解った。好きなだけ弾きまくれ。ジョニーBグッドは無しだ。」

四曲でいく。思い切り弾きまくれ、キョウ！」

「スマン……。」

「ヨージ、いいな。」

「ああ、もちろんさ。」

俺たちのステージが始まった。

客席は八分くらいの入りで、ミナミの連中は十人ほどだった。

『やつら、突っ張ってるわりには、

夜、出歩けない良い子ちゃんなのか……。』

ノリユキや、ノブ達が頑張って盛り上げようとしてくれたが、あまり盛り上がりえず、最後の曲になった。

”FEEL SO BAD”はキヨウが作曲した歌だ。

軽快なテンポで進み、エンディングのギターソロが荒れ狂う。

『さあ、エンディングだ。キヨウ！弾きまくれ！

荒れ狂え！俺たちは最後まで付き合ってやる。』

キヨウのギター・ソロは、鬼気迫るものがあつた。

ベースを弾きながら、聴き入ってしまうほどだった。

そう、キヨウのギターは泣いているようだった……。

アンコールもなく、俺たちは楽屋へ戻った。

「ありがと。スッキリした。」

キヨウが笑った。

「あれだけ弾けばスッキリするよな。」

「ああ。」

「社会人バンド見に行こうぜ。どんなもんかよ。」

「わりー、俺もうちょっとギター弾いてる。」

「そうか、客席にいるから。」

スッキリしたとは言っているが、そんなに簡単にスッキリするものか。

キョウを置いて客席に出た。

「俺のほうがスッキリしねーよ。何なんだ、サチは。」

「はんとだよ。女なんてそんなもんかもなあ……。」

「そうだな……。信じらんねえなあ。」

客席の入り口に受付がある。

そこにお姉さんがいた。

「よかったよー。さすが伝説バンド。」

あれ、あのギターの子は？キョウ君って言ったっけ。」

「あつ、まだ楽屋にいます。」

「そう、ギター、凄かったね。でも、あの子、何かあったでしょ。」

「お姉さん、超能力ありますか？」

「やっぱ、あったんだ。よし、お姉さんが慰めてあげるか。」

受け付けお願い。」

そう言つて、楽屋の方へ小走りに駆けていった。

「慰めてつて……。。」

「……。どうやって……。。」

「いいなあ……。キョウ。」

「私が慰めてあげようか？」

「えっ？」

クミコとノリユキだった。

「いや、俺が慰めてやるよ。」

「うえゝ、勘弁してくれよゝ、気持ち悪い。」

「ハイ、差し入れ。」

「コーラを差し出した。」

「ハイ、ヨージも。」

「ヨージって……。」

「クミコ、サンキュー。」

「クミコって……トシロー、いつからそんなに仲良くなったわけ？」

「ヨージが小声で言った。」

「いつからって、この間のライブからだよ。言わなかったわけ？」

「言わねーよ。」

「何コソコソはなしてんだ？」

「いや、なんでもない。それよりどうだった？」

「最後の曲、キョウ、なんかすごかったな。」

「俺、鳥肌立つちゃったよ。」

「クミコは？」

「まあまあ、だな。」

「それよりノリユキ、随分仲間が少なかったよな。」

「ヨージはミナミの番長にだけは物凄く強気だ。」

「スマン、ヨージ。あいつら、普段はえらそーにしてくせに、夜の外出はビビりやがったんだ。明日シメとくから勘弁してくれ！」

「おい、こんな事ぐらいで大げさな……。」

「いいよ、いいよ、文化祭にしっかり来てくれれば。」
「そうだよ。それよりよく来てくれたよ、10人も。」
「いや、そう言ってもらえると嬉しいよ。」

世間話をしていると、受付の交代が来てくれた。
もう最後のバンドだ。

最後のバンドは、お姉さんの友達のバンドで、
今回のライブの主催者でもある”ジュンさん”が率いるバンドだ。

俺たちは客席に入った。

「おっ！さすが社会人、結構上手いじゃん。」

「うん。でもなんかピンと来ないなあ……。」

「ノリユキ、どう？」

「うーん、俺、ホントは、音楽よくわかんねえんだ。」

「……。」

「クミコ、どうだ？」

「ダメだな。」

「随分ハッキリ言うなあ……。どうして？」

「ここに来ないんだ。」

クミコは胸を叩きながらそう言った。

「ここか……。」

「私は、音楽は”胸に来るか来ないか”だと思うんだ。」

妙に説得力がある一言だった。

クールな顔からは想像が出来ないほど、
内面は熱いのかも知れない。

「このバンドは上手いけどそれだけだ。

この間のポップスバンドもそうだったけど、

きつと、レコード買って、楽譜買って、

そっくりになるように練習してんだろ。そんなのモノマネだ。

それだったらレコード聴いたほうがいいもんな。」

俺の胸の中の”モヤモヤ”・・・このバンドや、ポップスバンドがどこか”ピン”とこない訳を、いとも簡単にクミコは答えた。

「俺たちはどうだった？胸にきたか？」

「ああ、前はトシローの唄、今回はキヨウのギターが良かった。」

「えっ？俺のドラムは？」

「まだ、ダメだ。」

「くッソー、だめか・・・。」

よし、見てるよ、今度はクミコをうならせてやる！」

「誰が呼び捨てにして良いって言った？」

「えっ？だめなの？」

「ダメ。」

「そんな〜、俺だけ？」

「そうだよ、ヨージはまだドラムの練習が足りねーからな。」

「そうだぞ！ヨージ、練習あるのみだな。」

「チエツ、トシローまで・・・。」

結局、客席でコソコソ話をしていて、

社会人バンドの演奏なんて聴いてやしなかった。

俺は笑談しながら、

クミコに、少しづつ惹かれていく自分に気がつき、戸惑いを感じていた・・・。

全ての演奏が終わり、皆で後片付けをしていると、ジュンさんが俺を呼んだ。

「トシロー君、どうだった？俺たちのライブに参加してみて。」

「うーん、結構勉強になりました。リハーサル一つとっても違うし、機材が凄いいし……。」

「卒業したら、この町に就職して、一緒にバンドやらないか。」
「えっ？」

「まだ若いから、夢もあるとは思っけど、
やっぱり働いて、金貰って、好きな楽器買って、車買って、
時々、こうやってライブして……やっぱり、音楽は楽しくないとね。」

君なら、うちのバンドのボーカルに大歓迎だよ。」

「はぁ……考えときます。」

内心、何処となく嫌な気分だった。

でも、ジュンさんに悪気がないのは解っていたので、適当に答えた。

『ジュンさんは、音楽を完全に趣味だと割り切って活動している。
俺はどうなんだろう。』

飯を食うためとか、金を稼ぐためなんて、考えちゃいないし、
でも、ジュンさんみたいに趣味だと胸を張るのは、違う気がする。
俺は、なぜ、何のために唄を歌ってるのだろうか……。」

後片付けが終わり、公民館の入り口で解散した。
ジュンさん達は打ち上げに行くらしい。
俺たちも誘われたが、遠慮しておいた。

正直、この人たちとはウマが合いそうにない。
どこか退屈なのだ。

「急いで帰らないと、終電に間に合わねーぞ。」

「あれ？キヨウは？」

「あれ？」

「プップー」と後ろから来た車がクラクションを鳴らした。
振り返ると、お姉さんの車だった。

お姉さんの車は、俺たちの横に止まった。

「みんな、おつかれー！」

キヨウ君は、私を送ってくから、心配しないでね。」

「えっ・・・俺たちは・・・。」

「そんなに大勢乗れないでしょ。」

「トシロー、悪いーな！お先ー！」

キヨウが助手席の窓を開けて笑った。

「お、おい、キヨウ！」

「んじゃあ。」

お姉さんの車は、キヨウを乗せて走り去っていった。

「・・・。」

「トシロー、もしかして、もう立ち直ったのかなあ、キヨウの奴・・・。」

「あいつ・・・いつか絶対刺されるぜ・・・。」

気が付くと、雨はすっかり上がっていた・・・。

第十章・墮天使のささやき

「第十章・墮天使のささやき」

終電車に間に合うように、駅までの道のりを早足で歩いた。

ヨージと、ノリユキと、ノブと、俺。

なんとも見栄えのしない男4人で、夜の町を歩いた。

「なあ、ノリユキ、クミコって、いつもあんななのか？」

ヨージは自分だけ認めてもらえなかったのが、
気に食わなかったのだろうか……。

「ああ、いつもあんな感じで、あまり笑わない。」

「どうしてこんな田舎に引っ越してきたのか聞いたか？」

「聞いたけど、喋りたくないみたいだ。」

でも、どうも親父さんと二人暮らしみたいなんだ。」

「へえ、離婚とか……。だからグレてんのか……。。」

「その辺はわかんねけど……。。」

「いや、クミコさんちに遊びに行っただけで女から聞いたんすけど、」

その親父さんも、帰りが遅かったり、居なかったりって話す。
「ふん、結局、家庭に原因ありのパターンか……。。」

一歩後ろを歩いていた俺は、

この会話を聞きながら、クミコのことを考えていた。

キヨウがお姉さんの車で行ってしまった後の事だ。

「おい、俺たちも急がないと、終電行っちゃうぞ。」

「おい、ノブ、帰るぞー！！」

「先行っててくれ、タバコ買ってくる。すぐ追いつくから。」

自販機は駅と反対方向へ30Mくらい行ったところにあつた。

タバコを買っていると、クミコと、ノブのダチ二人が歩いてきた。

「トシローさん、今夜は楽しかったツス、またよろしく願いします。」

「ああ、ちゃんとクミコ送っててくれな。」

「ハイ！」

「なあ、私、トシローとちょっと話しあつから、先行ってて……」

ノブのダチは”えっ？”って顔をしたが、気を利かせるように歩いていった。

「何だよ、話つて。」

「トシロー、電話番号教えろよ。今夜電話すつから。」

一瞬戸惑ったが、

「ああ、いいよ。何時でもいいぞ。でも、あんまり遅いと寝ちやうかも。」

そう言つて、電話番号を教えた。

「うん。じゃあ……。」と言つて、クミコはそっけなく行つてしまった。

『話って何かなー？まさか「付き合ってくれ」とは言わないだろうなー。』

ヒロミのこともあるし、言われたらまずいよなー。

それより、相談事かなあ……。

いや、相談してくるようなタマじゃないしなあ……。

少し嬉しかった。

周りの目を気にせず、クミコと話ができる。

「おい、トシロー！何ニヤニヤしてんだよ。」

ノリユキが振り返り声を掛けた。

「い・いや、別に……。いや、キョウ、キョウの事考えてたんだ。」

「ホントだよなー、今頃何してんだか……。ウツシツシツシ。」

「うらやましー!!」

上手く誤魔化す事が出来た。

皆考える事は一緒だ。

多感な男が4人も集まれば、自然とスケベな話に花が咲く……。

「それにしてもキョウの奴……。いいなあ……。」

もう、キョウが振られた事なんて、とつくに忘れていた……。

家に着き、シャワーだけ急いで浴びた。

考えてみたら、晩飯は食っていない。

カップラーメンにお湯を注ぎ、電話を俺の部屋に切り替え、急いで部屋に入った。

ちなみに俺の部屋は、母屋からの離れにあった。

俺が音楽に目覚めてしまってから、

真夜中だろーが、何だろーが、でかい音でレコード聴いたり、ギター弾きながら絶叫するのに”業を煮やした”親父が、

隣の畑に、何処かで貰ってきたプレハブを置き、

そこを俺の部屋にしたのだった。

母屋からは、中学の時、技術の時間に作ったインターホンと、昔使っていた古い黒電話を、キョウに頼んで引き込んでもらっていた。

カップラーメンを食べながら、黒電話の前でクミコからのベルを待った。

電話を待つ時間というのは、何て長いんだろう。

ソワソワしながら、ギターを弾いてみたり、

ベースを弾いてみたり、レコードを駆けてはやめてみたりと、落ち着かない時間だけが過ぎていく。

「ジ・リ・リ・リ・リン」

古臭い、ゆっくりとした”クミコからのベル”が鳴った。

「もしもし!」

「.....」

「もしもし!クミコだろ!おせえーよ。」

「.....随分早く出るからビックリした。今、良いか?」

「ずっと前から準備万端だぜ。飯喰ったし、シャワー浴びたし。

それより、お前こそ大丈夫なのか?こんなに遅くて.....」

「家、今日、誰もいないんだ。」

「えっ？」

「今日だけじゃないんだ。週末はいつも一人だ。」

「なんで？」

「親父は週末になると東京に帰っから。」

「ふん。なあ、言いたくなければ言わなくていいから、根掘り葉掘り聞いていいか？」

「何を……。」

「お前の事。」

「どうして？」

「どうしてかよく解んねえけど、知ってた方がいいだろ。気を使ったり、遠慮したり、変に勘ぐったりするの、ガラじゃねえんだ。」

それに、お前の事、一人位ちゃんと知ってる奴がいてもいいだろ

！」

「……確かに気を使われるのは嫌だな。」

しょうがねえーなー、何でも答えてやるか。」

そして俺はクミコを質問攻めにした。

クミコは東京で両親と暮らしていた。

兄貴がいるが、もう独り立ちしているらしい。

どういう訳か、父親が単身赴任することになって、

母親も仕事をしているし、家も持ち家で開けなくなかった。

父親は、自分で身の回りの事を出来ないの、

クミコが付いてくる事になったというのだ。

「でも、なんでグレてんだ？」

「別にぐれちゃいねえーよ。」

「そうか？！そんならいいけどね。」

「トシロー、こういうカツコ嫌いかな？」

「いや、似合ってればいいと思うよ。行き過ぎはみつともないけどね。」

「ノリユキの事か……。」

「ああ、田舎者は、最初ちよつとだけオシヤレしてみるんだ。」

たとえば髪。初めは少し髪を掻き揚げてみる。

それに慣れてくると、もう少し頑張つてリーゼントにしてみる。またそれに慣れると、今度はパーマだ……っていうように、どんどん過激になっていった結果がノリユキだ。」

「ハハハ。」

「いや、ノリユキに限らずみんなそうさ。」

「なんか解る気がするよ。」

「でも、クミコ、つまんないかな？こんな田舎で……。」

「うーん……。みんな悪いヤツラじゃないから上手くやっていけるけど、

話が合わないのがちよつとな……。」

「何か解る気がする、俺も。」

「だから勇気出して、トシローの電話番号聞いたんだぞ。」

トシローとは、なぜか話が合うから……。」

『ふーん、勇気出したのか……。女の子っぽい事も言うんだなあ……。』

「そうか、いつでも電話しろよ。」

考えてみたら、学校違うし、連絡取れないもんね、俺たち……。」

「つたく、今頃気付いたのか？」

「そう言う訳じゃないけどさ……。」

こんな田舎者、相手にしてくれないと思ってさ。」

「よく言うよ、自信満々なくせに。まあいいか……。」

そしてクミコの電話番号をメモした。

その後も、少し話をして電話を切った。

電話を切るとき、クミコは意味深な事を言った。

「トシロー、彼女いるのか？」

一瞬ヒロミの顔が浮かんた。

赤い傘を回しているヒロミが……。

でも、ヒロミは彼女ではない。

それに、俺はまだ、アキラとの一件を引きずっていた。

「いや、いない。」

「この間の娘、彼女じゃないんだ。」

「ああ。」

「ふーん、そうか……。」

『まさか、“好き”とか言うのかな……。』と少しドキドキしたが、

「んじゃ、遠慮なく電話するぞ、じゃーな！」
と言っただけだった。

『なんだ……。それだけか……。』
電話を切ってから、しばらく考えた。

『クミコはきつと、ああ言っても淋しいんだろうな。
そりゃそうだな。週末は一人つきりで、特別仲の良い友達もい

ないし、

それに、言わなかったけど、家庭の事情も複雑そうだし。

そうじゃなきゃ、あんなにクールな表情なわけないもんな……。

” 箸が転んでも可笑しい年頃 ” って言うもんな。

それなのに、あんなに落ち着いてて、あんまり笑わないって言うし、

うーん、きっと何かあるな……。」

その日以来、俺たちは、時々夜中に電話で話すようになった。

学校の話や、音楽の話、時々言い争いにもなるけど、

クミコは俺の気持ちや、考えを、一番解ってくれる存在のような気がした。

ただ、どうしても、ヒロミと話すときのような ” ドキドキ ” はなかった。

それが残念な気もしていた。

そしてある夜、俺は作りかけのバラードを完成させた。

4ビートの渋い曲になった。

JAZZ風の大人っぽさが、クミコにはピッタリだと自我自賛した。

「堕天使のささやき」

天使たちが囁いた ” 幸せ ” なんて 嘘っぱちさ
口クな事などありやしねえ 落ちていくだけさ

流れに任せて渡ってる奴等は 案外良いかもしれないけど
上手く泳げない不器用な俺は どうすりゃいいのさ

気が狂いそうに耐えられない夜は

なぜか君の声が聞きたくて 眠らせておくれよ

いつか君が知らない誰かといなくなるまで……

君の肩に降りかかる 天使たちの気まぐれは
素顔のままの無邪気な君を 大人に変えた

いつも調子よく笑ってる奴等は 今夜も我者顔で
知ってか知らずか俺たちを また傷つけていく

この風向きは変えられないけれど

誰にも悪く言わせたりしないさ 信じておくれよ

いつか君がやさしい笑顔を取り戻す日まで……

それでも夜に耐え切れない時は

誰も知らない どこか遠くまで一緒に出かけよう

天使たちの囁きに耳を傾けて……

第十一章・真夏の夜の花火

「第十一章・真夏の夜の花火」

夏が来た。

後、一ヶ月半で文化祭だ。

文化祭では、約一時間の持ち時間なので、

8曲程にレパートリーを増やさなくてはいけない。

オリジナルを書きながらも、アレンジ、ベースの練習と、ハードな毎日が過ぎていく。

そんな中、この町最大のビックイイベント、

”夏祭り”が今年もやって来た。

”盆”、”暮れ”、”正月”にさえ帰郷しない”この町の出身者”の多くが、

”夏祭り”だけは帰って来るといふほど、

祭りに異様な執着が、この町の人々にはある。

とはいえ、特別変わった事が行われるわけでもなく、
神輿が町を練り歩き、後は花火・・・それくらいか・・・。

俺は隣町の出身ではあるが、やはり楽しみにしていた。

「今夜は俺に仕切らせる！」と、

ヨージが妙に張り切っているので、任せる事にした。

待ち合わせは六時半に駅。

「どうせ同じ町なんだから、一緒に行こう」という、俺の誘いを、
「いや、色々段取りがあるから……。」とヨージに断られ、
「スマン、俺、今夜、一緒には無理だ……。」とキヨウはお姉
さんを選び、

チヨットふて腐れ気味に、一人で駅に着いた。

「トシロー！遅い、遅い！」

「仕方ねえーだろ！電車なんだから。」

「まあまあ、実はさ……。今日は、二人で歩くんじゃないんだ。」

「えっ？なんで？俺、うつとうしいの嫌だぞ。」

「解ってるって。でも、その前に、紹介したい人がいるって言うか、何と言うか……。」

「あ？誰だよ、うっとうしいなあ……。帰ろっかな……」

「トシロー君！」

いきなりの声に振り向くと、クラスメイトの「カオリ」だった。

「おう！カオリ、祭り見に来たのか？」

「いや、そーじゃないんだ、紹介したいってのは、カオリなんだ。」

「カオリなら紹介しなくても知って……えっ?! まさか……。」

「そう、そのまさかなんだ……。」

「え〜〜〜〜〜〜！！！！！！」

「ビックリしたでしょ、トシロー君。私が付き合ってたって言ったの。」

「うそだろ？ カオリ、よく考える？ ヨージだぞ、ヨージ。」

「そういう言い方は無いだろ、トシロー！」

「ヨージ、お前……この話には何か裏があるぞ！だまされるな
！！」

「何よそれ……。私は本当にヨージ君が好きなの!!」

そう言っで、カオリはヨージと手を繋いで見せた。

「カオリ」は背が小さく、少しぽっちゃりしている。

昔で言うなら”トランジスタ・グラマー”というやつだ。

髪は軽めの天パーで、

切れ長の目をして大人っぽい顔つきをしているので、
学校でもモテるほうだ。

あの”テル”が、女好きになったのも、

もともとは、中学時代からカオリの事が好きで、
でもカオリが一向に相手にしてくれないため、

これ見よがしに女を口説くようになったらしい。

テルはカオリに五回フラれている……。

「奇跡だ……。しっかしカオリ、何でヨージなの？」

カオリなら選ぶ放題だったのに。まあ、他の奴はともかく、
何で俺じゃないの？」

「私、ヨージ君みたいなタイプなんだ。やさしいし、頭良いし……。

それに、トシロー君はヒロミのものでしょ？」

「えっ？」

「見てれば解るよ。私、ヒロミとは付き合い長いし、
ヒロミ、絶対トシロー君の事、好きだと思っな。」

「うーん、実はそうでもなさそうなんだよな……。」

「聞いた。アキラさんの事でしょ。」

でもあれは、きつと憧れみたいなもんだと思っな。
もつと自信を持った方がいいよ。」

「おい、ヨージ、てめえ何でも話してるのか、この裏切り者!!」

「いや、俺はトシローにも幸せになって欲しいと思つてさ……」

「くそっ！何が幸せだ。」

それになんて俺がお前らと一緒に歩かなきゃいけねえんだよ。
お前ら二人で歩けば良いだろ！」

「そう言つと思つて……ヒロミも誘つたよ、トシロー君。」

「えっ、ヒロミ来るの？」

「いや、ホントはさあ、文化祭まで、俺たちが付き合つてるのバレたくないんだ。」

文化祭で皆をビックリさせたいつてことになつてさ、だから頼む

！」

「なんだ、結局、俺はカモフラージュか……」

そついうことなら仕方ないか……。ヨージ、ジューズおごりだぞ。」

「ホントはヒロミが来るからなくせに。」

「あれ、そんなこと言つていいの？！学校行ったら、喋っちゃおうかな。」

それとも、今でも良いよ。みなさん！」

「解つた、解つた、ジューズおごる。」

もしかしたら、一番ヤバイ奴に知られちゃったかも……。カオリ……。」

「大丈夫、大丈夫。」

トシロー君、ヨージ君いじめたら、ヒロミに言っちゃうからね。

トシロー君がヒロミのこと好きだって。あつ、ヒロミ！」

「そんな芝居に騙されねーぞ！言いたきゃ言いやがれ！」

「お待たせ！」

本当にヒロミがやつて来た。

「ヒロミ、あのね、トシロー君がさ……」

「解った、ごめん、カオリ、ヨージと俺は親友でゝす!!」

「何？何の話してたの？」

「いや、なんでもない、ちょっとバンド内のゴタゴタを……。」

てな訳で、四人で町を練り歩く事になった。

カオリの巧妙なシナリオ通り、

最初は俺とヨージ、ヒロミとカオリのペアで、
前後に別れて町を歩いた。

「おい、ヨージ、何で黙ってたんだ！」

後ろを歩く二人に聞こえないように、小さな声で話した。

「ゴメン、言おうと思ったけど、カオリが絶対内緒だって言うから
さ……。」

「もう尻に敷かれてんのか！なっさけねえーな！。

でも、すげえラッキーだったな。お前、一年の時から好きだった
もんな。」

「ああ、初めは信じられなかったよ。」

「んで、いつからなんだ？もうヤツたのか？」

「そんな、ヤレルわけねえーだろ！まだ付き合って二週間だぞ。」

「キスくらいしたのか？」

「それもまだなんだ……。」

「よし、私に任せなさい！今夜は忘れられない夜にしてやるぜ！」

「いや、いい。余計な事すんなよ、トシロー！」

「遠慮しなさんなって。」

「コラ！何コソコソ話してんの？」

「いや、べつに……。」

タイミングを計ったかのように、カオリが入れ替わろうとしてきた。

カオリの頭の回転の良さには脱帽する……。

そして俺は、ヒロミの横を歩いた。

「ねえ、お似合いだよ。あの二人。」

「お前、知ってたのか？」

「うん、随分カオリから相談されたから。」

カオリ、いつになく真剣だったよ。」

「へえ、カオリが相談ねえ……。」

前を歩く二人は、完全に自分たちの世界に入り込んだようで、もう誰も寄せ付けないような”オーラ”を放っていた。

『あゝあ、ヨージにも彼女が出来たか……。』

キヨウの奴だって、今頃お姉さんと……。

なんで、俺だけ”パツ”としねえのかな……。」

確かにヒロミは、隣を歩いているのだが、

何の確信も持てるはずがなく、少し気分が落ち込んだ。

しばらく歩いていると、急にヒロミが立ち止まった。

ヒロミの見つめるその先に……アキラがいた。

やはり夏祭りに、帰ってきていたのだ。

しかも彼女らしき女連れで。

横目でヒロミの顔を見た。

気のせいかもしれないけど、悲しそうに見えた。

「ヒロミ、俺、金魚すくいやりたい。」

思いつくままに、近くにあった”金魚すくい屋”へヒロミを誘った。

幸い、まだアキラは俺たちに気付いていない。

このままアキラをやり過ごすのも、ちゃんと挨拶するのもヒロミ次第だ。

「私も。」そう言って、ヒロミは俺の隣に座った。

『やっぱり、顔合わせるのは辛いか……。』

そう勝手に解釈をし、わざと中々すくえないようなフリをして、気配を消しながら、アキラが通り過ぎるのを待った。

アキラが通り過ぎてから、ヒロミは少し無口になったような気がした。

そして俺も、何を話していいかわからず、無口になった。

『ヒロミは、明らかにアキラに対して何らかしらの感情がある。

そうじゃなきゃ、アキラに挨拶したはずだ。

なのにヒロミは隠れた。俺と一緒にだったからか？いや、違う。

それじゃあなぜ、ヒロミは俺の周りをウロウロするんだ？

なぜ、いつも思わせ振りの態度を取るんだ……。』

そんなことを考えながら歩いていたら、

突然、「ドーン！」と花火が上がった。

「確か、カオリのシナリオでは、花火は学校で見るんだったよな。仕方ないから、学校へ行こう。」

金魚すくいをしたせいで、ヨージ達と逸れたままだった。

「うん。もう学校へ行ってるかもね。」

「うん。それとも、これで解散して二人だけにしておけようか。」

「えっ？もう帰りたいの？」

「ううん、そうじゃないけど……。」

「それなら、学校へ行って花火見ようよ。二人だけでも良いじゃん。」

『二人だけでもって、ホント何考えてんだろう……。』

二人で学校を目指して坂を上がり始めた。

「おい、トシロー！！ヨージとカオリが探してたぞ。」

クラスメイトのタカシ達だ。

男五人で歩いて、何が楽しいんだか……。

「それで何だって言ってた？」

「何でも、急にトシローとヒロミがいなくなっただって、

二人きりになりたいきや言えばいいのになって、

いいダシに使われてたって、

何も言わないから心配してんだって、カオリと二人で探してたぞ。

トシローとヒロミ、やっぱそういう仲か。ニクイねえ……。』

『クソ、あいつら……。俺たちをダシにしてるくせに……。』

『

「そうじゃねえ、タマタマ逸れたんだよ！んで、奴等は？」

「学校の方も探してみるって、会ったら言っといってくれて言っただ。」

「そうか、サンキュー！」

「やっぱり、もう学校行ってるんだね。」

「ああ、でもあいつら、完全に俺たちをダシにしてやがる……。」

「しょうがないよ。ダシになりに来たんだから。私は全然平気だけどな。」

「そんならいけど……。」

「早く学校行つて、ゆっくり花火見よ！」

ヒロミはそう言つて、俺の腕に自分の腕を絡め、歩き出した。

時々上がる、花火の音を合図に立ち止まっては、空を見上げ、花火を眺めた。

暗がりの中で、よく見えないヒロミの顔も、花火が上がるたび、ピンクになったり、青になったりして浮かび上がる。

それがとても綺麗で、ドキドキした。

それよりも、時々腕に当たるヒロミの”胸のふくらみ”の感触は、もっとドキドキした。

『もうアキラのことは気にしねえ。絶対にヒロミを彼女にするんだ』

そう考えながら、「このまま時間が止まればいいのに」って思った。

第十二章・真夏の夜の夢

「第十二章・真夏の夜の夢」

学校へ着いた。

グラウンドには、何組ものカップルが花火を見上げている。

「さうて、ヨージは何処にいるかな……。」

もちろん照明など点いておらず、

花火の灯りだけで探すのは容易ではなかった。

「花火が終わってから入り口で待っていていようよ。
それより花火見よ。」

ヒロミはそう言って、俺を引っ張っていった。
腕は依然絡めたままで……。

校舎の壁に背中をつけて座った。

「ドーン！」と花火が上がる時にだけ、辺りの様子が見える。
思ってた以上にカップルが多く、ある種、異様な雰囲気だ。

寄り添って花火を見ている奴ら、
抱き合ってる奴ら、
キスしてる奴ら……。

きつとこの中のどこかに、ヨージとカオリがいて、

きつとあいつらも似たような事になっているに違いない。

そして俺たちも、その中の一組のカップルでしかないわけで、これからどうなってしまうのかという”期待”と、こんな奴らの仲間になりたくないという”理性”で、俺は困惑していた。

花火は終盤に向かって、次第に盛り上がっていく。

それまで、ずっと黙って花火を見ていたヒロミが、俺の肩に首を傾けてきた。

ビクリしてヒロミを見た。

ヒロミは黙って花火を見ている。

「ヒロミ……。」

「……このままで……いさせて。」

「いいけど……タバコ吸っていいか？」

「……うん。今だけだよ。」

タバコを吸わずにはいられなかった。

そうじゃなきゃ、何をしてしまうか解らない。

手を伸ばせば、

キスをする事も……、

抱きしめる事も……、

何でもできるような気がして。

でも、心の何処かに、そんな俺にSTOPをかける”何か”があった。

花火が終焉を迎えた。

心臓に響くほど大きな爆発音。

いくつもの花火が大空で花を咲かせる。

そして、”花火の音だけの静寂”は破られ、

帰る奴らの”せわしない雑音”が辺りを包み始めた。

「さて、ヨージ達探そ。」

そう言って立ち上がるつもりだったが、

ヒロミは俺の腕をつかんだまま、力を入れて立ち上がるつもりがなかった。

「もう少しだけ……。」

俺にSTOPをかけた、

”何か””悪い予感”は、

”確信に限りなく近い予感”となり、俺を支配した。

俺は、何も言わず、ヒロミの隣に座り続けた。

『ヒロミの気が済むまで、付き合ってやるよ。これが最後だ。』
そう心の中で話し掛けた。

息苦しいような沈黙の中だった。

しばらくすると、何処からか呼ぶ声が聞こえた。

「トシロー！」

「ヒロミー！」

「何処だー！」

「おい！」

なんと表現したら良いか……。

そう、”できるだけ声を押し殺した、できるだけ大きな声”とでも言おうか。

「ごめん、ありがと、もう行かなきゃ。」

ヒロミは腕を放し立ち上がった。

「今夜の私、どうかしてた……気にしないで。」

「うん……。」

気にしないでといわれても、気にしないでいられるはずがない。

「きっとヒロミは、アキラを見て淋しくなったんだ。」

だから俺に腕を組んだり、もたれ掛かったりしてきたんだ。所詮、俺はアキラの代わりだったんだ。

俺はヒロミの心の隙間を埋めるだけの存在だったんだ。

今までの行動も、発言も、すべてそうだったってことだ。

俺は結局一人で有頂天になっていただけなのか……。」

さっきまでの決心はどこかに消え去り、

敗北感のような、絶望感のようなものだけが頭の中を渦巻いている。

「もう、うんざりだ……。」

ヨージとカオリの方へ早足で歩いた。

「おう！トシロー、もう、何処行つてたんだよ。探したぜ。」
「ホント、急に二人で居なくなるから、心配しちゃった。」

「ふざけんな！勝手なことばかり言いやがって！

てめえ達の事しか考えてねえくせに、偉そうに言うな！
もう俺は降りっからな……。」

「な・な・何怒ってんだよ、トシロー。」
「うるせえ……。」

早足で坂を下った。

早くその場から逃げ出したかった。

あいつらには罪はない。

そんなこと解りきっていた。

俺は、敗北感の余りに、八つ当たりしただけの事だ。

『俺は最低だ……。』

自己嫌悪に押し潰されそうだ。

「クソッ！何でいつも俺ばかりがこうなるんだ……。。」

第十三章・嘘

「第十三章・嘘」

最悪な気分のまま部屋に着いた。

蒸し暑い部屋は、一層俺をイライラさせた。

一度灯りを点けたが、眩し過ぎるので消した。

こんな気分にあうレコードもなかった。

ベッドに寝転んでタバコを吸い込んだ。

少しだけ、落ち着くような気がした。

以前、ヒロミが俺に質問した答えが、少し解ったような気がした。

『タバコを吸うと、気分が少し落ち着くんだ……。』

『ヘッ、今更こんな事がどうだって言うんだ。』

「ジ・リ・リ・リ・リン ジ・リ・リ・リ・リン」

暗闇にベルが鳴った。

『クミコか……。そっいや、祭りにいなかったなあ。』

「もしもし。」

「あの、夜分遅くにすみません。トシロー君お願いしたいんですけど……。」

クミコじゃなかった。別の女の声だった。

随分小さな声で、オドオドした感じだ。

「俺ですけど……。」

「……ヒロミだけど……。」

「……。」

ドキツとした。

何を喋っていいか解らず、黙ったままだった。

「ねえ、聞こえる？」

「うん。……どうした？」

「さっきはごめん。怒って帰っちゃたから、謝ろうと思って。」

「……別に前に怒ったんじゃないよ。」

「それならいいけど……じゃあ、なんで？」

「……自分に腹が立つたって言うか……。」

「どうして？」

「……。」

言える訳なかった。

ヒロミが自分の事好きじゃないのに気付いて、

惨めな気分になって、怒って帰ってきたなんて、

言える訳ない。

「言ってる事、よく解んないよ。何で？どうしたの？」

「上手く説明なんて出来ないよ。ただ……。」

「ただ？」

「何ていうか……お前、俺の気持ち、考えた事あるのか？」

「あるよ！いつも考えてるよ！だからこうして電話してるんですよ

！」

「じゃあ、解るはずだろ。」

「……………」

「何で俺が頭来たかとか、どんな気持ちになったかとか！」
「……………」

”いつも考えてる”なんて良く言えたものだと思った。

「俺の事、好きでもないくせに、
思わせ振りの態度取りやがって、ドキドキさせやがって、
いつも考えてんのは俺の方だ。」

お前はアキラの事、考えてるんだろ。」

と言ってしまいそうになった。

「……………ねえ……………もっと、強くなつてよ……………」

ヒロミは泣いているようだった。
鼻をすすりながら、か細い声で言った。

「ヒロミ……………。俺は、強くないか？」

「……………」

「強いつて何だ？どうすれば強くなれるんだ？」
「……………」

ヒロミはもう、言葉にならないくらい泣いている。

何を言っても、しゃくりあげるだけで、
でもきつと、受話器を耳に押し付けて、
俺の言葉を聞いているように感じた時、

今までの苛立ちは嘘のように消え、我に帰った気がした。

『俺がヒロミを泣かしたんだ。』

あの元気にいつも笑っているヒロミを、泣かせてるのは俺なんだ。

」

「ヒロミ……ごめん。俺が悪かったよ。

もう泣くなよ。もう怒ってないし、強くなるからさ。」

謝っているのに、ヒロミは、もっと泣き出してしまった。
まるで子供のように、声を出して。

それを押し殺すように、きつと、親に聞こえないように、
小さな声で、声を出して泣いた。

「ヒロミ。もう泣くなよ。ホント、俺が悪かったから。

お前の気持ち解ったから。」

「涙が……止まらなくなっちゃったの……。

ホントに……悪いと思ってるなら……この涙……止
めてよ。」

『お前は子供かぁ！何ムチャクチャなこといつてんだ！！』

と叫びそうになったが、そんなこと言えるはずもなく、
こんな状況で、ギャグが浮かぶわけはなく……。

「ヒロミ……お前は、泣いている顔より……。

笑ってる顔の方が……か・か・か・かわいい……よ……

・。

これまで、人に可愛いなんて言ったことがなく、

しかも相手がヒロミだったので、

恥ずかしくて、顔が熱くなった。

「……ウソ。」

「ウソじゃないよ。俺はウソだけはつかない。」

「じゃあ・・・私の気持ちも・・・ちゃんと解った？」

「う・うん。解ってるから、もう泣かないでくれよ。」

「・・・それだったら許してあげる。」

「・・・遅くにゴメンね。じゃあ、また、学校で・・・。」

「うん。」

そう言ってヒロミは電話を切った。

随分呆気ない切り方だった。

それにしてもヒロミは何を考えているのか、また解らなくなった。

「ヒロミの気持ち、解ったから。」なんて、嘘をついてしまった・・・。

第十四章・閃き

「第十四章・閃き」

昨夜のことが有ったので、寝坊をしてしまい、
ヨージ達とも、顔を会わせ辛かったので、
授業をサボって、ずっと屋上にいた。

いつもなら、照りつける太陽で、
そんなに長くいられないのだが、
幸い曇り空だった。

時々強く吹きつける風が気持ち良かった。

昼飯を告げるチャイムが鳴った。

弁当はとうに食っちまったし、ここでの時間は満喫したし、
そろそろ家に帰ろうかと思った。

「トシロー、いるんだろ？」

下からヨージの声がした。

「なんだよ。」

顔を出すと、ヨージとカオリが上を見上げている。

「とりあえず、椅子おろしてくれよ。上がってくから。」

渋々と椅子を下ろし、ヨージとカオリが上がってきた。

「へえ、こんなところに隠れてるんだ、いつも。」

カオリがニコニコと見回した。

「ヨージ、てめえ、ここは、秘密なんじゃなかったのか？」

「なんだよ！自分だってヒロミに教えてたくせに！」

「あれは偶然バレちゃったんだ！」

「フーン、どうだかねえ。」

「何！」

「チョット、ケンカしに来たんじゃないでしょ、ヨージ君！」

「だってさあ……。」

「トシロー君、昨日はゴメンナサイ。私達、調子に乗ってたかも。」

「……別に怒ってないよ……。」

「え、でも昨日はあんなに怒って帰ったじゃない。」

私、あれから反省したんだ。」

「いや……俺の方こそ悪かったよ……。」

「ホラ！カオリ、言った通りだろ！トシローはあんな事で怒んないんだ。」

怒ってたのは何か別に有ったんだ。

「……俺たちが居ない時、ヒロミと何か有ったに決まってるって。」

「そうなの？トシロー君。」

さすがヨージだ。伊達に付き合いが長くねえ。

でも二人の格好の話題提供者にはなりたくなかった。

「いや、別に何もないさ。」

「正直に言って！！」

「カ・カオリ……。」

カオリは、ヨージもビククリするほど、真剣な目つきで俺を睨んだ。

「私が昨日ヒロミを呼んだのは、別に私たちのカモフラージュになってもらう為じゃないんだよ。本当だよ。」

私は本気でヒロミとトシロー君が付き合えば良いなって思ってるから。」

あまりの迫力に、俺はヨージの顔を見た。

ヨージはそれを受けてカオリに言った。

「おい、カオリ、どうしたんだよ、急に……。」

「ヨージ君だって言ってたよね。」

”トシロー君はああ見えても臆病だから、絶対自分から告白しない”って。

でも、私達四人で遊びに行ったりしたら楽しいだろうなって。」

「おい、ヨージ、誰が臆病だって!？」

「な・な・なんだよ!ホントの事だろ!

いっつもウジウジして、一年の頃からずっくとチャンス逃して、俺や、キョウが絶対大丈夫だって言ってたのに……。」

このまま卒業するつもりかよ!!!」

なぜだかヨージも興奮して、その二人の迫力に、

俺は完全に吞まれてしまった。

「解った。解ったからそんなに興奮すんなよ、二人とも……。
誰か下に来たらバレちゃうだろ!もつと冷静に話そうぜ……。」

」

二人は顔を見合し、カオリから切り出してきた。

「ねえ、ハッキリさせときたいんだけど、トシロー君は、ヒロミのこと好きだよな。」

付き合いたいと思っっているよね。」

「……………」

率直な質問が恥ずかしく、頷くだけが精一杯だった。

「私はヒロミと付き合いが長いから、良く知ってるけど、トシロー君は全然ヒロミのタイプじゃないよ。」

「えっ……………」

「おい、カオリ……………」

「話は最後まで聞く!」

「ハイ。」

「はい。」

「ヒロミは、スポーツマンで、真面目で、さわやかな人がタイプなの。」

「あゝ、段々落ち込むんですけど…………トシローが……………」

「うるさい! ヨージ君は黙ってなさい!

いい、私が言いたいのは、これからなの。よく聞いて。

それなのにヒロミは、なぜトシロー君みたいな人と仲良いのかって聞いたことがあるの。そしたら、何て言っただと思う?」

「何て言っただの?」

「解らないって。」

ヨージと二人で”ガクツ”とした。

「解らないけど、何か気になるんだって。話してると楽しいって。今までそんなこと一度も言っただ事ないんだよ、ヒロミは。」

私はビクリして好きなのって聞いたなら、”まだ解らない”っていい?! ヒロミが”まだ解らない”って言っただって事は充分”好

き”なのよ。

あの娘、絶対そんなこと言わないもん。」

「そうかー！やったな！トシロー！！」

「いや、チョット待って……。」

俺は力オリの真剣な眼差しに、ついつい昨夜の事を話してしまった。

「……トシロー君、あなたやっぱり馬鹿だわ。」

「うんうん、俺もそう思う。」

「なんでー。」

「ヒロミはトシロー君に引つ張ってもらいたかったんだと思うな。

確かに、アキラさんの事、好きだったかもしれない。

でも、それは憧れだったんじゃないかな。だって、タイプだもん。

アキラさんと、トシロー君の間で揺れ動いていた気持ちを、

強引にでも、自分の方へ引き寄せてもらいたかったって言う女心、

解らないの？だから強くなってるって言ったんじゃないの！？」

「そうだったのかな……。」

「おいおい、トシロー、マジでヒロミの事となると何も解らなくなるんだな。」

人の事だとあれだけ分析できるのにさー。」

「うーん……。でもさあ……。」

「何怖がつてるの。私が保証するから、

今度ヒロミに有ったら言っちゃいなさい。

付き合ってくれて。解った！」

「そうだよ、言っちゃえよ。もうすぐ文化祭だしよ。」

みんなビックリさせようぜ。なっ！」

一年の頃から、皆は口を揃えて俺に言ってた。

「絶対大丈夫だ。」って。

でも、俺の中ではどうしても確信がなかったんだ。

時々やってくる難題は、大丈夫だって言う確信が有ったから乗り越えて来れた。

でも、ヒロミのことだけは、なぜか確信が持てなかった。

『口にしたら、大事な何かを失ってしまいそう』な気がいつもしてた。

「やまゝ！」

急に下から声がした。ヒロミの声だ。
俺たち三人はビックリして固まった。

するともう一度、

「やまゝ！居るんでしょ！」

仕方なく俺が顔を出した。

「ホラ、やつぱり来てたんだ。早く椅子下ろして！」

俺が椅子を下ろしているとき、ヨージが、続いてカオリが顔を出した。

「あれゝ、カオリも居たのか。私だけ仲間外れなの?！」

「いや、俺がせっかくのんびりしてたのに、勝手に上がってきやがつて。」

「のんびりじゃない!ずゝとサボってたんでしょ。何話してたの?」
「イヤ別に……。」

ヒロミは上ってきて、俺の隣に座った。

「あつ、私達、お昼食べてないから行くね。後は二人でお幸せに。」

「えっ？行っちゃうの？」

「うん、おなかすいたから、ゴメン、ヒロミ。んじゃ、トシロー君、頑張つて……。」

ヨージは無言で俺の肩を叩いた。

そうして二人は降りて行ってしまった。

「昨日はゴメンね。」

「いや、俺の方こそ、ホントにごめん。」

ヒロミは首を振った。

「ねえ、三人で何話してたの？」

「昨日俺が怒つて帰っちゃったから、そのこと。」

「ふーん。ちゃんと謝った？」

「うん。……なあ、話し変わるけどさあ……。」

「何？」

「お前の好きなタイプって、スポーツマンなの？」

「うん。そうだよ。」

「ふーん。んで、真面目でさわやかな奴がいいの？」

「うん。あー、カオリから聞いたんでしょ。」

「うん……。」

「でも、なんで？」

「いや、別に……。俺は汗掻くの嫌いだなあ。真面目ってのもなあ……。」

「うん。知ってる。かつたるいんでしょ。」

授業もサボるし、タバコは吸うし、ホント真面目じゃないよね。」

ヒロミは笑いながら言った。

『言っちゃおうかなー、付き合ってくれて、言っちゃおうかなー。でも、この話の流れじゃ変な感じだよなー。言えないよなー。』

ため息が出た。

「どうしたの？急に……………」

「いやさあ、俺は、お前の事、なーんにも知らないのかもしれないなあ……………」

結構一緒に居るのにさ……………」

「そうかなあ、一番知っているかもよ。」

「そうかなあ……………」

中々チャンスが掴めない……………」

「ねえ、そんなことよりさ、もうすぐ夏休みだね。」

「うん。」

「どうするの？夏休みは。」

「多分、いや、絶対、補習に引つかかるだろ、あとはバンド。」

「ねえ、バンドなんだけど、合宿するの？」

「ああ、近所迷惑にならない程度の練習プログラム組んで、申請してみようと思ってる。」

「そうかー、楽しみが出来た！」

「ん？」

「合宿見に来るね。差し入れもって。」

「ああ、頼むよ。」

「夏休みが終わって、文化祭で、そしたらいよいよ地獄の受験勉強か……。」

「ねえ、もう進路決めたの？」

「いや、全然。なんか、”パツ”としたひらめきがないんだ。」

「そんなの、ひらめきで決める事じゃないでしょ。」

「そうなんだけどさ、この間のライブ、主催したお兄さんが居てさ、その人にうちのバンドに入らないかって誘われるし、親や、親戚はコネがあるから役場に入れて言っし、

でも、いきなり仕事するって、実感湧かないんだよね。

「そうかといって、大学や専門学校って将来どんな仕事したいかで入る所決めるだろ。」

「俺、自分がどんな仕事したいかなんて考えた事ないもん。」

「なんで普通科ってないんだろ。」

「将来、どんな仕事したいかって、おぼろげにでもないの？」

「うーん……。プロレスラーか、ミュージシャン……。」「

「そう言っんじゃなくて、もっと現実的なのは？」

「ない……。プロレスラーは体が小さいから無理として、

ミュージシャンは現実的じゃないかなあ……。」「

「だから、それは”夢”って言うの。」

「そうか……。」「

「ともかく、文化祭が終わったら、ハッキリしなさいね。」

「午後の授業はちゃんと出る事！さあ、降りよ！」

結局、肝心な事は言い出せないままだった。

でも、この時初めて自分の中に、

”ミュージシャン”という選択肢ができた。

”パッ”とした閃きだった。

でもそれを、ヒロミは”夢”と言い切った……。

第十五章・Wagner

「第十五章・Wagner」

夏休みに入り、8月も半ばに差し掛かった。

田舎の夏は短く、

夏休みも7月下旬から、8月20日近辺までと昔から決まっている。それからわずか2週間後に文化祭があるので、

多くの生徒達は夏休みの大半を、文化祭の準備に充てている。

俺たちも例外ではなく、

今年の夏休みは、補習とバンド練習に明け暮れる毎日だった。合宿は”近所迷惑になる”という一方的な見解で許可されず、仕方なく、補習が終わるお昼から夕方まで、毎日練習にした。

計算高いキョウは、文化祭に向け、曲順を考え、構成を考え、コマーシャルを考えた。

コマーシャルは、田舎者にとって、余りにセンセーショナルであった。

夏休み前に、

デザイン画とタイプライターを使い、やたらロックぽいチラシを自作り、

お姉さんのいる美容室を初めとする、若者が集まりそうな店や、公民館、等に貼ってもらった。

町中にチラシが溢れた。

「キタ校”始まって以来の伝説的ロックバンド”松竹梅”」

のキャッチフレーズが、恥ずかしかったが、
注目を集めている手応えだけは充分に有った。

とはいえ、このコマーシャルは、
キョウよりも、お姉さんの力によるところであるのだが……。

「おい、トシロー、オリジナル、まだ書けないのか？」
「スマン。何かイマイチ言葉が浮かんでこないんだ。」

メロディーは完璧だった。

詞の方は、なんとなく出来上がっているのだが、
肝心なサビは何も書けていない。

しかも最悪な事に、この曲はサビから始まるのだった。
完全にお手上げ状態だった。

「早くしねえと間に合わねえぞ。どうしてももう一曲オリジナルは
必要なんだ。

出来なかったら、予定が全部狂うからな。

それと、アンコール曲をどうするかだ……。」

「解ってるよ。そうせつつくなよ！」

今回はアンコール曲も用意する。

ただ、その曲が一番大事だ。

盛り上げるだけ盛り上げて、最後にコケれば、今までの苦労は水の

泡だ。

その逆で、もし盛り上がらなくても、最後の曲がよければ、印象はかなり挽回できる。

ライブは、” 終わり良ければすべて良し ” だと思っている。

俺たちは、慎重になりすぎて、今だ決まっていけない。

演奏する曲は全部で8曲、一曲五分計算で四十分。

準備やらで、二十分の余裕は見ておくという、

緻密なキヨウの計算だった。

「それより、トシロー、ヒロミとはどうなったんだよ。進展あったのか？」

「なんだよ、いきなり！別に変わんねえよ。

ちえ！良いよなあ、二人とも” この世の春 ” だもんなあ・・・。」

「その状態を書けばいいじゃん。無理にラブソングにしなくても。」

ヨージの言葉に、頭の中の白い霧が一瞬にして晴れた気分だった。

「おい、キヨウ、チョットひらめいた。アコギ（アコースティックギター）持て。」

悪いがヨージは、今回休みだ。」

そういつて、俺もアコギを持ち、弾いてみた。

「フラメンコ風にリフ入れてくれ！」

「おいおい、全然違った感じですよ〜いいぞ〜。」

ヨージが頷きながら笑った。

何回も、何回も、繰り返し弾いた。

そつする事でハミングに当てはまる言葉も、

キヨウのリフも決まってくる。

「おい、チヨット時間くれ！完璧に詞が浮かんだ。」

そして……ようやく残りのオリジナル曲が完成した。

「W a g g n e r」

まるで安いB級映画の世界さ

歯車が一つまた一つ

答えなんて求めちゃダメなのさ
流れ流され何処までも……

ただ一粒の雨がホコリまみれの頬を濡らす
二人はまだ幼すぎて 行き先さえ知らない
人ゴミに身を任せ 時間だけが過ぎてく

まるで安いB級映画の世界さ

歯車が一つまた一つ

答えなんて求めちゃダメなのさ
流れ流され何処までも……

交わす言葉もなく 乾いた瞳の中のおとぎ話のような夢なんていら
ない
一人砂漠の中の宝探しみたいさ

まるで安いB級映画の世界さ

歯車が一つまた一つ

答えなんて求めちゃダメなのさ

流れ流され何処までも……

「トシロー、お前はやっぱり天才だ！」

「へ、へッ、そ・そうかなー。」

「うん。ヒロミとのグズグズした様が上手く書けてるねえ。」

「てめえ、誉めてんのか、貶してんのか！」

「いや、誉めてんだよ。」

「ああ、”墮天使”と詞の内容がまったく正反對つてのがいい。」

「えっ……？」

キョウに言われるまで気がつかなかった。

ヒロミとの気持ちを書いたこの曲と、
クミコとの気持ちを書いた”墮天使”とは、
まるっきりに言ってる事が正反對だ。

「よし、忘れねえうちに練習だ。」

「こんにちは。」

「あれ、カオリ！」

「チヨット練習見てっていい？」

カオリが廊下からすまなそうに聞いた。

「ヨージの彼女なら良いに決まってるだろ！入れよ！」

俺はご機嫌でそう答えた。

「もう一人いるんだけど……。」

「えっ？」

ヒロミが顔を覗かせた。

「トシローの彼女なら良いに決まってるだろ！入れよ！」

キヨウが俺のマネをして、ニヤニヤしながら答えた。

「おい！キヨウ！」

「差し入れ持って来たよ。」

そう言つて二人はお菓子とジュースを差し出した。

もちろん、フアントアレレンジも。

暑苦しい教室での練習が、急に涼しくなった気がした。

やっぱ、女の子がいると違うな。

空気がキラキラしてていい感じだ。

「あんまりダラダラしてても・・・。」とキヨウが言い出し、
本当はもっと雑談していたかったが、練習する事になった。

ヒロミの前では初めての演奏だ。

「それじゃあ、せっかくお客もいるので、今、出来たばかりのオリジナルと、

先日出来たばかりのオリジナルを中心にやろう。」

「まだ上手くないけど、率直な感想頼むね。」

初めに”墮天使”を演った。

カオリモ、ヒロミも静かに聴いていた。

続けて、”Waggnerr”。

今、本当に今出来上がったばかりの歌だ。

ヒロミは何て言うんだろう。

そんなことを気にしながら唄った。

「どうだった？」

「すごいねー、二曲ともオリジナルなんですよ？自分たちで作ったんですよ？」

「うん。」

「二曲目は、どうしてドラムないの？」

カオリがふて腐れたように言った。

「いや、俺は今年から始めたんで、飛ばしすぎて体がもたなくなっちゃうから、

休憩できて助かってんだ。」

「そうなの？それなら仕方ないけど。」

「おいおい、アツアツじゃないか君たち。ところで、感想聞きたいんだけど。」

「感想といってもねえ……良かったとしかいえないもん。」

「ホント、いい曲だなーって思ったよ。」

この二人に感想を求めても、仕方ないのかもしれない。

やはり、こういうのはクミコじゃないと……。

あいつなら、”ズバッ”とした感想を言うんだろうなあ。

「んじゃあさ、どっちの方が良かった？」

そう質問しながら、内心ドキドキだった。

ヒロミとの関係を歌っている事がバレてるんじゃないかと。

「私は最初の方。だって、ドラム入ってないんだもん、二曲目。カオリの感想なんてこんなもんだ。」

「んで、ヒロミは？」

「どっちもいいけど……私も最初の方かな。」

「なんで？」

「詞が好き。」

「ふん。」

キヨウとヨージがニヤニヤしている。

「さあ、もっと練習、練習！」と言って誤魔化すのに精一杯だった。

結局二人は最後まで聞いていてくれた。

機材を片付け、学校を出た。

キヨウはいつも通り、反対側の坂を降り、

町へ・・・お姉さんのところへ向かった。

俺と、ヨージと、カオリと、ヒロミで駅までの坂を下った。

無論、ヨージとカオリは俺たちの後ろを仲良く歩き、

俺はヒロミと肩を並べて歩いた。

昼間の暑さが嘘のように涼しくなり、

夕焼けがとても赤く、綺麗だった。

「もう、夏も終わっちゃうね。」

「うん。早いよなー。」

「もうすぐ文化祭だね。頑張ってるね、見に行くから。」

「うん。」

夕日に照らされたヒロミの横顔はとても綺麗で、

胸が”キュン”となった。

さっき書いた”W a g g n e r”の詞が浮かんた。

『答えなんて求めちゃダメなのさ 流れ流されどこまでも・・・』

そうさ、このままで良いじゃないか、このままで・・・。

気持ちなんて確かめなくても、ずっとこのまま”キュン”として
れば・・・。

第十六章・クミコ

「第十六章・クミコ」

その夜は、良い気分で、早々に風呂にも入り、今日の練習のテープを聞きながら、新曲「W a g g n e r」のカッティングを練習した。

「ジ・リ・リ・リン」

突然、電話のベルが呼んだ。

「ハイ、もしもし。」

「・・・・。」

「もしもし？」

「・・・・トシロー。」

「クミコか？どうした？」

いつものクミコと様子が違う。
胸騒ぎがした。

「おい、どうした？」

「・・・・ちょっと、来てくれないか・・・・。」

「来てくれて、東京にか？」

「ううん。今日帰ってきたんだ。」

「そうか、それで、どうしたんだよ！」

「もう遅いから来れねえーか・・・・。」

「いや、わかった、何とかして行くからちょっと待ってる！」

何だか全然解らなかったが、ただ事じゃない気がした。
慌てて服に着替えて、家を出た。

駅に向かいながら、考えた。

もう電車は終わっちゃってる。タクシーか。
でも、そんなに金持ってるねえーし・・・。

途中の公衆電話で、ノリユキに連絡した。

「おう、トシロー、どうしたんだ？こんな遅くに。」

「ノリユキ、悪いが何も聞かないでバイク貸してくれ。」

「何だいきなり。とりあえず家にこいよ。」

「わかった。」

ノリユキの家まで走っていった。

ノリユキは、外に出て待っていてくれた。

「すまん、いきなりで。」

「おう、何だかわかんねえけど、ただ事じゃなさそうだから、いいよ。」

好きに使えよ。」

「すまん。」

ノリユキから、鍵と、ヘルメットを受け取り、俺はエンジンをかけた。

「トシロー、おまわりには気をつけろよ。」

「ああ。」

そう言って俺は走り出した。

クミコの住む隣町まで約10キロ。
もちろん免許なんて持っていない。

運転は、ノリユキ達と何度か遊んだ事があるので問題なかった。
ただ、ノリユキの言うように警察だけが問題だ。

もし捕まったら、確実に謹慎。

文化祭どころじゃない。皆に迷惑がかかる。

『落ち着け、落ち着け。』と言い聞かせながら、
夜の国道をぶっ飛ばした。

クミコの家の近くまで来て気がついた。
俺はクミコの家を知らない。

多分、こちら辺としかわからない。

一軒一軒、表札を見て回るわけにも行かないし、
仕方なく、公衆電話から、電話をした。

「プルルルル・プルルルル」

『頼む、出てくれ。』

コールが10回を過ぎた辺りで、ようやく、出た。

「ハイ。」

とても小さな声だった。

「おい、クミコ、俺だ。今近くまで来てるんだけど、
お前の家が解らねえ。教える。」

「・・・・ホントに来たのか・・・・。」

「おい、ホントってなんだよ！心配してんだぞ！
バイクぶっ飛ばしてきたんだぞ！」

「ゴメン。今、外に出るから・・・。」

俺は受話器を置くと、バイクのエンジンを切って、何件かある社宅の傍まで、バイクを押していった。

暗闇の中、一軒の家の玄関が開き、クミコらしき女が出てきた。俺は、その家に向かって歩いた。

クミコは俺を見つけると立ち止まってこっちを見ている。

すぐ近くまで来た時、何も言わず背中を向け、家へ入っていった。俺もバイクを止め、玄関に入った。

「上がってこいよ。」

「ああ。」

靴を脱ぎ、家の中へ足を踏み入れた。

小奇麗に片付けられていて、都会の雰囲気でした。

「トシロー、こっちだ。」

クミコの部屋へ案内された。

「おい、どうしたんだよいったい。」

「もう、いいんだ。そんなことより、のど渴いてねえか？」

そう言っでビールを差し出した。

部屋のテーブルにはビールの空き缶が転がっている。

「なんだ、酔っ払ってるのか？」

「ああ、酔っ払ってるよ。悪いか？センコーみたいな事言っなよ。」

「親父さんは？」

「まだ東京。」

「ふーん。ちよっと一服して言いか？あせってきたから、ちよっと落ち着かせろ。」

そう言つて許可を得ないままタバコに火をつけた。

「心配させやがつて。何かと思つたら酔つてただけか。

まったく、せつかくバイク借りてすつ飛んできたのによお……

」。

「悪かつたな……。」

「もういいよ。これ吸つたら帰るからな。」

「帰るなよ。今夜は泊まっていけよ。」

「な、何言つんだ。泊まっていけるわけねえーだろ。」

大胆な発言にビックリした俺は、タバコを消し、立ち上がった。

「せつかく来たんだから、ビールくらい付き合えよ。

今夜は宴会にしようぜ。」

クミコはドアを塞ぐように立ち上がっていった。

『帰るの面倒だし、何もしなければいいかな。』

と一瞬考えた矢先、ヒロミの顔が頭に浮かんだ。

「い・いや、ダ・ダメだ。帰る。」

クミコを振り切ろうとしたとき、

クミコがいきなり抱きついてきた。

俺は足を取られ、ベッドに座るような体勢になり、

クミコは床に膝を立て、俺の胸に顔をうずめていた。

「頼む……居てくれ……。」

クミコを離そうと肩に手を置いたとき、
その肩が小さく震えているのに気がついた。

『泣いてるのか・・・？』

「どうした、クミコらしくねえぞ。

解った。今夜は泊めてもらうよ。もう、何も聞かないから・・・

、
だから安心して、好きなだけ泣け・・・。」

そういつて、クミコの肩を抱きしめた。

クミコには、やはり何かが起きていた。

そして、クミコは俺に助けを求めてきてくれた。

俺を頼りにしてくれたのだ。

今まで、こんなに自分の事を必要にしてくれた奴がいただろうか。

胸が一杯になった。

クミコは泣き続けた。

あの、クールを気取った、大人びたクミコだって、
同じ歳、そう、１７か、１８歳なんだ。

嫌な事があつたら、泣く事だつてあるだろうし、
淋しい気持ちにもなるさ。

しばらく同じ体勢のままで居た。

クミコも少し落ち着いてきたようだ。

「なあ、クミコ、新曲聴かないか？テープ持ってきたんだ。」

急いで家を出るとき、それでもと思つて、

ポケットに入れた練習のテープを取り出して見せた。

胸から離れたクミコの目は、真っ赤だった。

恥ずかしいのだろうか、クミコはうつむいたまま頷いた。

アンプのスイッチを入れ、カセットデッキでテープを再生した。

クミコはベッドに上がり、壁にもたれていた。

「ビール貰うぞ。」

俺は、ビールと、灰皿を持って、クミコの隣に座った。

”墮天使”と、”Wagner”が流れる。

クミコは、俺の肩に頭をもたげ、聴いていた。

「もう一回聴かせろ。」

少しは、いつものクミコに戻ったようだ。

「ハイハイ。」

俺もおどけてテープを巻き戻し、また再生した。

「立ったついでに、冷蔵庫からコーラ持って来て。」

「ビールは？」

「もうビールはいい、コーラ。勝手に開けていいから。」

「ハイハイ、まったく、甘えてんだか、威張ってんだか。」

台所に行き、冷蔵庫を開けた。

ビールと、コーラと、わずかな調味料しか入っていない冷蔵庫。東京に行ってたんだから仕方ないけど、どこか淋しさを感じた。

部屋に戻り、コーラを渡し、またクミコの横へ座った。

「どうだ？」

「前のオリジナルより凝って来たな。いい感じだよ。アレンジもいいし。」

「どっちの方が良い？」

「どっちも良いけど、私は後の方が良いな。詞が良い。」

ドキッとした。

クミコの事を歌った唄をヒロミが良いと言い、ヒロミの事を歌った唄をクミコが良いと言う。

作り手としてはとても残念なような気もするが、詞に対しての感じ方が違うのだろうか？
複雑な心境だった。

「ところで、ジェームス・ディーンのポスター、貼ってねえじゃないか。」

超能力、外れてたのか……。」

「いや、あの日、トシローにバカにされたから取ったんだ。」
そういつて、クスツと笑った。

「フツ、そうか、やっぱ貼ってたんだ。ところで、始めて見たよ。」
「なにを？」

「スッピンでジャージ姿のクミコ！」

「バ・バカヤロ……変か？」

「いや、とっても似合ってるよ。」
「バカにしゃがって。」

「いやほんと、いつもより若く見える。年下みたいだ。」

スッピンのクミコの顔はあどけなく、
泣いたためか、少しむくんでいて、それが妙に可愛く思えた。

何とかいつも通りの会話だなと思った矢先、
クミコはまた真剣な表情になった。

「実はさ……。」

「……うん。……どうした？」

「親父とお袋、離婚するんだ。」

俺は絶句した。

俺の家でも確かに両親は仲が悪いけど、

”離婚”は現実的ではなかった。

T・V・の中の話のようだ。

「東京に居た時から仲が悪かったんだ。

親父は帰らない日も多かったし……。そしたら突然の転勤だ。
何か事情はあると思っていたけど、どうも同じ会社の人らしいんだ。

今でも時々、知らない女の人から電話が来たりしてたんだ。
でもまさか、離婚するとは思わなかった……。」

「……実感沸かねえから上手く言えねえけど、確かにショック
だよな……。」

でも、来年の今ごろはもう、俺たちは一人で暮らすんだ。
もしかしたらそれからずっと、一人かも知れねえ……。
慰めになってねえか……。ごめん。」

クミコは首を横に振っただけで、

俺の首に手を回してきた。

俺はクミコを抱きしめた。

クミコの体は、とても華奢に思えた。

やけに冷静だった。

冷静だったもんだから、よけいな事が頭をよぎる。

『俺は鬼畜かあ！クミコが大変な時に何考えてんだ！』

と自分を戒めたが、クミコの息が首筋に掛かるたび、
くすぐったいような、気持ち良いようなで、

しかもクミコの胸は、俺の胸で押し潰されてるわけで……。
俺のちん、いや、その……下半身は……。

クミコに気付かれないように枕を股間に置いたが、それがいけなかった。

「トシロー、どうしたんだ？」

「ベ・べつに……なんでもねえ。」

クミコは腕を振り解き、俺の顔を覗き込み、視線を枕に移した。
クスツと笑ったかと思うと、また抱き付いてきて言った。

「起っちゃったのか？」

「起つわけねえだろ！な・何言ってるんだ。」

「私、超能力あるんだ。ホントの事言ってみろ。」

「ホントだ。お前に超能力はねえ！」

「ウソつき……。」

そう言っただかと思うと、急に顔を近づけて、
俺の唇にクミコは唇を重ねた。

ただ、心臓の音だけが、部屋中に響いてた。

クミコは、おでこをくつつけて言った。

「トシローのファーストキス奪っちゃった……。」

「おかわり……。」

俺はクミコを押し倒し、あとはもう、無我夢中だった。頭の中が真っ白になっていくようだった。

一体、何時間が過ぎたのだろう。

俺はタバコに火をつけた。

クミコは指先で俺の胸をなぞりながら言った。

「ねえ、トシロー、もし私が家出るって言ったらどうする？」

「俺もついてこっかな。」

「……。」

「何だよ、ついてっちゃダメ？」

「うっん。トシロー、やさしすぎて嫌いになりそう……。」

「どう言う意味？なんで？」

「うっん……。」

そう言っただけでクミコは俺の腕の中に顔を埋めて目を閉じた。

俺もクミコを抱きしめながら眠った……。

第十七章・妨害

「第十七章・妨害」

新学期が始まった。

さあ、いよいよ文化祭も近い。

ワクワクしながら学校へ向かった。

ただ一つだけ、ヒロミのことを考えると、複雑な気分だった。これから一体、ヒロミに対して、どんな顔をすれば良いのか。

あの夜以来、クミコのことを考えるたび、

胸がキュンとするようになった。

クミコのことを好きになってしまったのか？と、いつも自問自答していた。

いままでの感情とは明らかに違う何かになっているのは事実なのに、

ヒロミのことも愛しい……。

誰かに相談するにも、

キョウや、ヨージには、クミコとの事をなぜか言いたくはなかった。

『あゝ、俺って最悪な人間だぁ……。』
考えるだけ落ち込むので、

できるだけ結論を出さないよう、出さないようにと、二人の事を同時に考える事を避けるように心がけた。

昼前の授業が終わり、俺は担任の佐川に呼ばれた。

「おい、トシロー、弁当食ったら職員室に來い！話あるから……」

ドキツとした。

まさか無免許が見つかったんじゃない……。

ヨージが心配そうな顔をしていった。

「おい、何しでかしたんだよ。文化祭も近いって言うのに……」

「わからねえ……」

不安で、弁当もソコソコに、俺は職員室のドアを開けた。

「おう、トシロー、もう弁当食ったのか？」

「あのー、俺、何かしましたっけ？」

「お前、ジュン知ってるよな。」

「ジュンって……。はい、知ってますけど。」

「どういう知り合いだ？」

「どうって別に……」

「あいつはお前たちの前に俺が担任してたんだ。」

「はぁ……」

「そのジュンが先日電話してきて、文化祭の手伝いをしたいって。しかも、その手伝いってのが、お前たち”軽音部”のコンサートに、

ミキサーとして参加したいって言ってきたんだ。」

「えっ？」

「あいつも昔、軽音部だったから、OBとして協力させろってさ。べつに問題ないから了承しておいたけど、お前からも、ちゃんと

お礼言えよ。」

「はい。」

『やったー！なんてラッキーなんだ。あの凄い機材で、しかもミキサーまでしてくれるなんて、何てツイてるんだ。もしかしたら、クミコって”あげ○ん”かも……。いやまでよ……。いやいや、これはキヨウの差し金だな。お姉さんから手を回したのか……。』

思わずガッツポーズを決めていた。

「ところで、話はこれからだ。」

「えっ？まだ何か……。」

「ああ、これから一緒に校長室へ行くぞ。」

「えっ……。？校長室？お・おれ、何もしてませんよ……。」

「

佐川は黙って歩き出した。

仕方なく俺は後を付いて行った。

中に入ると、凄いメンバーの揃い踏みであった。

校長、教頭、生活指導の杉田。

まるで”謹慎決定”と言われているのも同じだ。

『おいおい、一体何がバレたんだろ……。』

バイク？あつ、大人ライブ？まさか……。屋上？』

思い当たる節が、次から次へと頭を駆け巡る。

そこから逃げ出したくなるほど、思い空気が漂っている気がした。

「失礼しまーす。」

そこへ突然校長室のドアを開け、入ってきたのは、文化祭実行委員長のダイスケであつた。

「よし、みんな揃つたな。実は、夏休み中、私の所にこんな手紙が届いたんだ。」

そう言つて、生活指導の杉田は話し始めた。

「その手紙によると、今年の文化祭には、ミナミの不良グループが大勢来るといふ。」

その目的は、トシロー、お前たちのバンドを聴きに來るためだそうだ。

この手紙の差出人は、怖くて文化祭に集中できないから、お前たちのバンドの演奏を中止するか、ミナミは出入り禁止にしろと言っている。

トシロー、ここに書いてあることは事実か？」

『くそっ！汚い真似しやがつて。誰が書いたか解つたぞ。ポップスバンドの奴らだ。』

あいつら、この間のライブの仕返しをこんな手でしてきやつた。

□

校長を初め、すべての教師、そしてダイスケの目が俺に集中した。俺が答えあぐねていると、佐川がダイスケに話を振つた。

「おい、ダイスケ、お前はどう思ふんだ？」

「はい、僕は、この手紙に書かれている事が事実だとしたら、ちよつと問題だと思います。でも、ミナミを出入り禁止つてのは、

無理なので、

トシロー君達に我慢してもらうしかないかと……。」

「おい、ダイスケ、我慢しろって、ライブやるなって事か？」

「うん。悪いけど、みんな文化祭に向けて頑張ってきたんだから、皆の考えたを考えたなら、ここは我慢してもらうしかないよ。」

「何言ってるんだ！俺たちだって、頑張ってきたんだぞ！」

『完全に頭に来た。よし、こいつら全員と戦ってやる！』

アドレナリンが全身に回ったかのように、体中の血が騒ぎ出し、俺の体は熱くなった。

「まず、杉田先生は、この手紙の内容は事実かと聞かれましたが、私には解りません。なぜなら、ミナミに不良グループって存在するんですか？」

大体、こんな田舎に不良なんているんですか？

そりゃ、格好はいろんな奴もいるでしょう。

でもそんなのファクションじゃないですか。

先生方だって、いろんなカツコしてるでしょ。

杉田センセなんか、いっつもジャージじゃないですか。

教頭先生、教師はジャージでも教師らしいんですか？」

「ばかやろ！教育はカツコじゃないんだ。」

慌てたように佐川が言った。

『引つかかってくれてありがとうー！』

「そうですよねー。」

人間は格好じゃないから、僕達は杉田センセイを尊敬するんです。それなのに、先生方は、ミナミの連中の格好が可笑しいからとい

って

差別するんですか？」

「いや、私たちは何もそんなことを言っているのではない。
ただ、ウチの生徒が怖がるというのは問題あるだろ。」

「べつに誰も怖がっていませんよ。」

だって、中学時代は一緒に過ごしてたんですから。

こんな狭い田舎、みんな知り合いですよ。

大体、この差出人は、変ですよ。名前、書いてあるんですか？」

「いや、無記名だが。」

「杉田先生は、無記名の手紙と、俺たちと、どっちを信用するんですか？」

この手紙は多分、俺たちのバンドに対する嫌がらせです。

そんなのに、天下の生活指導の星、杉田センサーが踊らされてどうするんですか

？」

俺の口は止まらなくなっていた。

「んじゃあ、仮に、この手紙が真実で、不良グループってのが実際あつて、

俺たちのコンサートを聴きに来たとします。

それはイケない事じゃなくて、凄い事でしょ？！

ケンカしに来るわけでも、イチャモンつけに来るわけでもなく、コンサート聴きに来るんですから。おとなしいもんですよ。

だからむしろ、ミナミ大歓迎の形を取った方が盛大に盛り上がるじゃないですか。

校長先生から、ミナミの校長へ口添えしてもらって、

この際、ミナミとキタのわだかまり無くしちゃいましょうよ。

この文化祭を気に、キタとミナミが仲良く手を取り合う。

歴史が変わりますね、校長先生、教頭先生！！

そしたら、ダイスケ、お前、男が上がるよ。ベルリンの壁をお前が壊すんだ！

「」

「わっはっはっ！」

いきなり校長が大声で笑い出した。

「トシロー君だっけ、君は面白いねえ。」

私もその、ミナミの不良グループとやらが聴きたいコンサート、見てみたくなったよ。

どうだね、杉田先生、教頭先生、確かこの手紙は無記名で信用性も薄いし、

我々の前でこれだけ熱弁する、トシロー君の口車に乗ってみては。

「

「実は、OBから私の所に連絡がありまして、

是非トシロー達のコンサートに協力したいと言って来まして、

それから考えても、こいつらは別に悪い事してとは思えないし、

ここは一つ、私も何とかこいつらに演奏させてあげたいのですが・

・・・。

「

校長に続き、佐川もフォローしてくれた。

ダイスケはもう、ベルリンの壁を壊す事で頭がいっぱいの様子だ。

「校長がそう言われるんでしたら・・・。」

と、教頭も、杉田も了承した。

「では、先生方の特等席を用意してお待ちしています。」

そう言つて、校長室を出た。

佐川は俺の頭を小突き、

「よかつたな。がんばれよ!」と言つた。

教室へ帰ると、ヨージとキョウが待っていた。

「何だつたんだよ。」

俺は校長室での事を説明した。

「きつたねーマネしやがつてー!ノリユキ使つて懲らしめようぜ!」

「いや、何の証拠もねえ。」

それより、これから色々な妨害があるかも知れねえから、気を
つけようぜ。」

「そんなことより、後二週間しかねえぞ。アンコール曲決まつてな
いけど、

どうするんだよ。」

「そのことなんだけど、いま、トシローがいない間にヨージと話し
た。」

「何やんだよ。」

「いや、文化祭にはピッタリの曲さ。じつはさ……。」

第十八章・選択

「第十八章・選択」

いよいよ、待ちに待った文化祭当日。
今年は9月の第一週の土日だった。

すべての部活が、この文化祭で三年は活動を止め、
これからは二年が主体となる。
もつとも、スポーツ系の部は、大会で活動を止めてはいるが……。

バンドをやっている連中も、皆このコンサートで解散する。

俺たち松竹梅も、あつという間の数ヶ月な訳で、
これからのことなんて、何も話しちゃいない。
キョウと、ヨージはどう考えているのか。

それから、文化祭が終わったらすぐ、進路も決めなきゃいけない。
担任の佐川に釘を刺されていた。

『進学か就職か……。』

俺たちのライブは、日曜日の2時〜3時の一時間を選ばせて貰った。
その選択により、今年の”軽音部”は、
土曜日は小さな体育館でアコースティック系、

日曜日は大きな体育館でバンド系となった。

土曜日は、もちろん、アコースティック系のスタッフとして、手伝いをしたが、今年は凄い機材を持ち込んで、ジューンさん達、”軽音部OB”が協力してくれているために、大した仕事もなくなった。

明日のライブのことを考えると、多少緊張したが、逆に早く明日にならないかと考える余り、

色々なクラブの出し物を見て周っても、目に入らなかった。

結局、メンバーそろって、明日の打ち合わせをもう一度確認したり、MCを考えたりするだけだった。

「あゝ、いよいよ明日だな。緊張するぜえ。」

「ああ、もう終わっちまうんだな、俺たち……。」

「なんだよ、トシロー、やけに暗くなって……。」

「……なあ、なんとなく聞くのアレだったんで、何なんだが、お前ら、どうすんの？進路。」

「俺は大学行くよ。受かればだけど。キョウは？」

「……俺は、進路はともかく、松竹梅は続けたいんだが……。」

中々言い出せなかったんだけど、ヨージ、お前、東京の大学に絞れ。

俺も、東京の大学だけ受ける。受からなくても、別にかまわないんだ。

問題は……。」

「俺か……。」

「トシロー、就職でも、進学でも、何でもいい。三人で東京へ出よう。」

それで、ライブハウスで活動続けよう。トシローが東京に出なか

つたら、

俺の計画も終わりだ……。」

「俺はいいよ。東京の大学に絞る！バンド続けようよ、トシロー！」
「そんなにプレッシャーかけんなよ。」

文化祭が終わるまで、考えさせてくれ……。」

『継続か解散か……。』

「トシロー君！」

カオリが現れた。

「今日はね、大事な話があるの。ちよつといい？」

「何だよ。ヨージとの別れ話か？相談に乗るぞ！」

「違う違う、ヒロミの事。」

「何？」

「まだヒロミに告白してないんでしょ？」

「うん……。」

「明日の”告白タイム”に勝負かけちゃいなよ。」

”告白タイム”とは、日曜日の4時から5時までの一時間、

後夜祭の準備をしている間、

グラウンドで音楽を流し、フォークダンスを踊る。

ここ数年、全校生徒が集まりだす4時半頃から、

”告白タイム”と銘打って、好きな人に告白をする時間になっていた。

ほぼ全校生徒を前に告白をして、見事、カップル成立した者だけが、

グラウンドの中央で踊り、自分たちは恋人同士ですと宣言する。

ヨージとカオリも、他のカップルも、

この時間に踊るために、今までコッソリと付き合っていたのだ。

文化祭最後のビッグイベントなのである。

「うん……。」

「絶対大丈夫だから。昨日ね、ヒロミとその話になったの。」

やっと、文化祭だね、これでヨージ君とも堂々と付き合えるって私が言ったら、

ヒロミは、いいなあっ言うからさ、

ヒロミだって、告白タイムにトシロー君誘えば良いのって言うたら、

何て言っただと思う？」

「な・な・な・何て？」

「私からはとても誘う勇氣ないけど、誘ってくれたら踊ろうかなあ
って言っただのよ！」

「え~~~~~!!」

俺が驚く前に、キョウとヨージが声を合わせて驚いた。

「やったな！トシロー、逆転サヨナラホームランじゃん。」

「つ・ついに……トシローに彼女ができるのか……。」

「お前ら、俺の事バカにしてたのか？」

「バカにはしてないけど、情けねえー奴だとは思ってたよな、ヨージ。」

「うんうん。でも、明日一緒に踊れるぜ！トシロー、良かったな。」

「……。」

嬉しかった。

嬉しかったけど……クミコの顔がチラッと浮かんだ……。

第十九章・松竹梅

「第十九章・松竹梅」

ステージの脇で、二年のバンドが終わるのを待っていた。

「まだ15分あるから、イッブクしよう。」と言ったのはキヨウだった。

部室でイッブクし、急いでステージの脇に戻った。

二年のバンドの演奏は、もう最後の曲だった。

キヨウがギターを持って、今回、俺たちのスタッフになった一年に、何か叫んでいる。

「キヨウ、どうした？」

「ギターの6弦が切れてる……。」

「えっ?……おい、誰かキヨウのギターに触った奴いるか?」

「いえ、気がつきませんでした……。」

キヨウの弦はさっき取り替えたばかりだった。

しかも、演奏中に伸びないよう、随分念入りに引き込んでいた。

今から張り替えたら、一曲が終わるたびにチューニングしなければならぬ。

「おい、まさか……。」

「ああ、うかつだった……。弦は至急張り替えるとして、まだ何かするかもしれないぜ。気をつけよう。」

「ああ。」

ちょっと嫌な気分になったが、まさか演奏中は無いだろう。
それでも気をつけるに越した事無いのだが。

二年の演奏が終わった。

さあ、いよいよ俺たちの出番だ！
準備が終わり、俺たちはステージへ上がった。

客席は超満員。

キヨウのチラシ作戦が功を奏した。
校長をはじめとする、教師たちも、中央に座っているのが見えた。

『ホントに聴きに来たのか……。』

少し動揺したが、それを振り切るように、俺はマイクに向かって叫んだ。

「待たせたなあ！松竹梅だ！！」

すると突然、「ブツ」と会場の電源が落ちた。
ステージ、客席は真っ暗だ。

客席が、ざわざわと淀めいている。

「おい！どうしたんだ？」

「一年！ブレーカー見て来い、ブレーカー！」
キヨウが絶叫している。

『あいつらの仕業だ！絶対！ここまでするとは、許せん。』

俺はステージから、ノリユキを探した。
あの特異な髪型は、遠くからでも良く解る。
一年に急いでノリユキを呼んでこさせた。

「おい、トシロー、どうしたんだ？一体。」

「ノリユキ、悪いが、あそこ、体育館の隅にブレーカーがある。
そこを気付かれないように見張りを立ててくれ。」

「じゃあ、これは事故じゃないって言うのか？」

「ああ、多分誰かの嫌がらせだろう。」

「クソッ！見つけたらぶっ殺してやる！」

「いや、まだ、ハッキリしないんだ。でも、用心に越した事は無い
からな。」

「解った。ノブ達にでも見張らせるよ。」

「いや、お前と、ノブは、ちゃんと言われた所にいてくれ。
面白い事が起きるから。」

「えっ？何？」

「それは後のお楽しみだ。」

「……とにかく解った。任せとけ。」

「すまん。頼んだぞ！」

思った通り、ブレーカーが落とされただけであった。

体育館の電源はすべてついた。

でも、すべて仕切りなおした。

俺たちは一度ステージの脇に引込み、

ジュンさん達がマイクなどのチェックをしている。

ヨージは照明係、打ち合わせの変更に走った。

思ったより時間を食った。

「クソッ！まさかここまでするとは考えもしなかったぜ。」

「かなり時間も押しちゃってるから、MC少なめで行こう。」

「アンコール、出来ないかもしれないな……。」

「まあ、仕方ないさ。このお礼は後でキッチリとさせてもらうさ。それより気を取り直していくぜ。」

もう一度ステージに上がった。

俺は、スポットライトに包まれた。

「あまりのパワーに、ヒューズが飛んでしまったようです。今度は頑丈なヒューズを取り付けたようなので……。フルボリウムでいくぜ……！」

ワン・ツー・スリー・フォー……！！

「よーこそ」

良く来てくれた このコンサートに 良く来てくれた わざわざここまで

良く来てくれた こんなところに 良く来てくれた よーこそ！

じゃあバンドのメンバーを紹介しよう

ギター弾くしか脳の無い奴さ

古くからのオイラのダチさ 紹介するぜ ギター キョウ！

ギターソロ

気の合う奴なんてそうザラにいるもんじゃないぜ
だけどコイツならとキョウが目をつけた

古くからのオイラのダチさ 紹介するぜ ドラマー ヨージ！

ドラムソロ

オイラ友達を集めてバンドをやってるのさ

バカな頭で考えたこれは良いアイデアだ

イカれた奴らが集まって演奏が始まってるぜ

オイラ トシロー！ どうぞヨロシク！

ベースソロ

それからもう二人忘れちゃならないぜ

いつでも何処だってメチャメチャ暴れまくってる

古くからのオイラのダチさ 紹介するぜ

ミナミの番長ノリユキと次期番長ノブ！

打ち合わせ通り、ノリユキとノブにスポットを当てた。

奴らは、予想通りビックリしたが、ノリユキが手をあげてアピールを始めると、

ノブは調子に乗って踊り始めた。

ヘンテコな踊りだったが、客席は以上に盛り上がった。

どうだい！ノラないか！よオーこそ！

どうだい！ノラないか！よオーこそ！

どうだい！キタ校ベイビー！よオーこそ！

ノリユキ達にスポットを当てたのは大成功だった。
これはヨージの提案で、今まで協力してくれたお礼と、
奴らは怖くないんだぞっていうアピールと、
最初からこのライブを盛り上げるための、
一石三鳥を狙ったことだった。

大盛り上がりの中、二曲目、”FEEL SO BAD”、
三曲目、”JONNEY BE GOOD”と続けてぶっ飛ばした。

やはり血の気の多い”ミナミ”の連中を中心に、
大盛り上がりを見せた。

今、ステージを降りていても良いと思うほどで、
俺の体はまたしても鳥肌が立っていた。

「ちょっと飛ばしすぎたんで、ここらで少しゆっくりめな曲を。」

スタッフの一年が、椅子とアコギを用意し、
キョウと二人で椅子に座った。
ヨージはヘトヘトで、息を切らしている。
本当に良いタイミングの休息だった。

四曲目”Wagner”。

ヒロミのことを考えながら、歌った。

客席は暗くて、ヒロミが何処にいるか、聴きに来ているのか解らな
いでいた。

歌いながら、ヒロミと出会った時の事や、
ドキドキさせられた事などが浮かんできて、

自分で歌いながら、自分で切なくなってしまった。

その切なさを残したまま、五曲目の”墮天使のささやき”。

クミコとの事を歌った唄とは言え、

クミコの事を考えながら歌えるほど、

簡単に頭を切り替えられるほど、俺の頭は上手く出来ちゃいない。

ヒロミとの2年半のウジウジした時間と、

クミコとの中身の濃い数ヶ月を比較していた。

『俺はずるい人間だ……』

どっちも好きだ何て許されるわけ無い。正直になろう……。
もう、ハッキリさせよう……。

そんな事を考えながら、歌い終わると、
さっきの盛り上がりとは打って変わり、
客席は静寂に包まれてた。

さあ、残り二曲だ。

これで盛り上げて、スッキリしよう。

今まで、ずっと、一年の時からやってきたことのすべてを、
俺のこれまでの感情のすべてをぶつけるんだ。

そして、一つ結論が出た。

「早いもので、もう残り二曲になっちゃいました。

俺たちはもう三年で、俺たちだけじゃなく、三年のバンドは皆、
この文化祭でスッキリして、これから向かおうと頑張ってきた
わけで。

皆、それで解散していく訳だけど……。」

お決まりの”解散宣言”である。

どのバンドも、何年も、何年も、繰り返し行われてきた、お決まりの文句である。

客席も慣れたもんで、「やめるなー」とか、叫ぶ奴が何人かいるが、そのバンドの最後の”決め台詞”を心待ちにしてやがる。

今も、俺の最後の言葉を、皆が待ち望んでいるのが、手に取るように伝わってきている。

俺は、キョウとヨージを見た。

二人とも俯いている。

そりゃあそうさ、俺がこんなことを喋るなんて、予定には入ってなかったから。

「……俺たち、”松竹梅”は……解散しません!」

「えっ?」と言う、沈黙の後、会場がざわめいた。

俺はもう一度振り返り、キョウと、ヨージの顔を見た。

キョウはヨージにむかってガッツポーズのサインを出し、その後俺を見てにこつと笑った。

ヨージはニコニコしながら、胸を抑えるポーズを取り、

「ドキドキせんよ。」と俺に伝えた。

「だってさあ、まだやりてえー事、沢山あるんだよ。

三年だからって、やめなさいけねえ決まりなんてねえーだろ?

何年も何年も前から、三年は解散宣言ばっか……。

”解散しまーす”、”今までありがとー”、こればっか。

誰が決めたのか知らねえけど、俺たちはそんなのクソツくらえだ
！」

俺は、曲を始める合図を出した。

ズドン！

ヨージのスネア一発で始まる、初めてのオリジナル”Show me please”。

気分は最高だった。

今まで何をウジウジしてたんだろう。

世間の常識に少し翻弄されていたのかもしれない。

俺は俺のスタイルで行くぜ！

さあ、最後だ。今までのイライラをすべてぶつけてやる。

”SATISFACTION”

もう、気分は完全にミックジャガーだった。

シャウトしまくった。

会場も、”満足できない奴ら”で、大騒ぎだ。

ようやく俺は……。

溜まりに溜まったフラストレーションを、発散する事が出来た……。

。 歓声と、達成感と、虚脱感の中、俺たちはステージを降りた・・・

第二十章・英雄と悪漢

「第二十章・英雄と悪漢」

汗だくになりながら、ステージの脇に下りた。

「まったく、ハラハラさせんなよ。何言い出すかと思ったぜ。」

「本当だよ。勝手に解散しちゃうかと思ったぜ。」

「へへっ！カッコよかったろー！解散しません宣言。」

「いや、あれやられちゃあ、ポップスバンド、かわいそうすぎだぞ。」

「なんで？」

「いくら嫌がらせ受けたからって、あの仕返しはなあ……………」

「だからなんで？」

「えっ、あのセリフ、狙って言ったんじゃないの？」

「うっん。全然！なんで？」

「マジかよー！だって、あいつら、これから解散宣言しようと思ってるのに、

あんな言い方されたら、言い憎いだろ。」

「そうそう、」 解散しまーす！ばっか。」 って、あんなにバカにされた後で、

しかもそれがウケちゃった後で、” 解散しまーす！” なんて、俺は、とても言えねえな。」

「そうか……………全然気がつかなかった……………」

でもまあ、あんだだけ嫌がらせしたんだから、

バチが当たったんだと思う事にしよう。」

「ハハッ、そうしよう。」

「いやいや、まだそう言うわけにはいかなそうだぜ……………」

そう言つて、キヨウは目で合図した。
ポップスバンドがこっちへ向かつてきた。

「残念だけど、アンコールは出来そうに無いね。
もう、タイムアウトだ。」

ポップスバンドでギターを弾いてる何とか（名前知らない）が、
嫌味を込めて言つた。

他のメンバーも、ニヤニヤしてこっちを見ている。

「アンコール？」

アンコールは出来ないだろうと覚悟していたため、気にしてなかったが、

場内は、”アンコール”の大合唱だ。

「ハハッ、スゲエ。やったぜ！」

「なるほど、そう言うことだったのか。」

「うんうん。中々考えたじゃねーか。」

奴らの嫌がらせは、
すべて”アンコールが出来なくするための作戦”だったと言つ事に、
今、気がついた。

「なんだよ、俺たちが何かしたとでも言つのか？」

「いやいや、そんな事、何も言つてねえよ。」

「可愛そうだけど、せつかくのアンコール遮らせてもらつよ。
只でさえ、時間オーバーしてるんだから。」

そう言つて、ポップスバンドはステージに上がっていった。

「まあ、仕方ねえか。」

「でも、こんなアンコール、勿体ねえなあ……。」

「しかし、奴らバカだぜ。」

「なんで？結構いい作戦だったじゃんか。」

「作戦は成功だけど、これだけのアンコールの中、時間ですから僕達がやりまして始めても、盛り上がるわけないだろ。」

立場が逆だったら、俺はアンコール譲るね。」

「いや、俺だったら演っちゃうね。」残念だったなー”って叫ぶね。」

「トシローならやりそう……。でも、奴らポップスバンドだぜ。散々悪態ついて、いきなりラブソング歌えねーだろ。」

「そりゃそうだ。」

もう俺たちは、アンコールなんてどうでも良かった。気分爽快だ。

「おい、何か変だぞ。」

「何が？」

ポップスバンドが出て行つても、場内は一向に静かにならないのである。

それどころか、床を踏み鳴らし、どんどん大騒ぎになっていくではないか。

しかも、コールが”松竹梅”に変わっている。

そう、場内は”松竹梅コール”一色だ。

「おい、マジ！」

「おい、こんな事、二度とねえかもしれないから、浸つてこつぜ！」

「うんうん。」

俺たち三人は目を瞑り、コールに耳を傾けた。

「おい、お前達！」

そう言つて担任の佐川が入ってきた。

「浸つてる場合か！早くステージ上がつて、アンコールやって来い！」

「えっ、でも、もう奴らの時間だし。」

ボカッ！

佐川はそう言つたヨージの頭を叩いた。

「イテエ、何すんだよ。」

「何言つてるんだ。あいつらがこのまま出来ないのは解つてるだろ？意地悪しないで演つて来い！このままだと生徒が暴れだすから、早く演れ！校長先生からの伝言だ！！」

「ちよつと待った。大体、あいつら、降りてこないじゃないですか。演るのは、あいつらが降りてきてからです。」

あいつら、アンコール潰す気で上がつてったんだから……。」

松竹梅コールが収まるのを、

オドオドしながらただ待っただけのポップスバンドに向かつて、

佐川は、階段を上り、何か話している。

そして、そんなキツカケを待っていたかのように、奴らは引き上げてきた。

とても悔しそうに俺たちを睨んでいる。

「残念だったねえー、俺たちの勝ちだ。」

「言っとくけど、俺たちは、なーんも汚ねえことしてないからな！」
「恨むんだったら、自分達を恨みな！」

こういう悪態をつくときには、絶妙なコンビネーションなのは、
やっぱ付き合いが長いからなのだろうか……。

「クソッ！」と言って、ポップスバンドの中で唯一気が強い、
ギターの奴が、俺の胸倉を掴んだ。

こっぴう奴らには吐き気がする。

面と向かつては何も出来ないくせに、

” 姑息な嫌がらせ ” を散々仕掛けてきたわりには、
結局自分のケツも拭けない。

そして八つ当たりだ。

胸倉を掴んできて、戦意が無いのは見え見えだった。

担任の前で俺が反撃するはずがないと高をくくっての行為だ。
最低だ。

『クソッ、お気に入りの ” ジャニスのＴシャツ ” が伸びるじゃねえ
か！』

俺は思わず、奴の頭を両手で掴み、鼻っ面に軽く頭突きをした。

「やる気だったらいつでもやってやるぜ。アンコールが終わるまで
待ってな。」

ポタポタと鼻血が滴り落ち、奴の白い綿のシャツは赤い花を咲かせた。

奴らは血を見て、完全に戦意喪失だ。

そんなんなら、最初からつつかつかてくるな。

「おい！トシロー！！」

佐川が血相を変えた。

「軽く鼻擦ったんで血が出ただけですよ。

最初に暴力振るって来たのは奴ですから。先生も見てたでしょ。」

そう言い捨てて、ステージに上がった。

”ウオー”

場内は興奮の坩堝だ。

『あーあ、でもなんで男の声ばかりなんだろう。

”キヤー”って歓声聞きたかったな。』

そんな事を考えながら、マイクに向かった。

「お待たせー！アンコールありがとう。

校長先生、じきじきに許しが出たんで、アンコール、出来る事になっただぜ。」

キョウも、ヨージもスタンバイOK！

さあ、始めようかといった矢先、いくつかの影がステージに近づいてきた。

逆光の為、誰なのか確認できないでいた。

一番最初にステージの前に到着した影は、お姉さんだった。手に、大きな花束を持っている。そしてそれをキョウに渡した。

「ヒュー、ヒュー！」

場内に冷やかしの声がこだまする。

さすが東京帰り、やることが派手だ。

そして場内の注目を一気に集めてしまっている。

続いてカオリが、目の前の俺を完全に無視し、ヨージに小さな花束を差し出した。

『さあ、俺の番だぞ！』と思い、少し間を開けた。客席の誰もがそう思ったに違いない……が、誰も現れなかった。

俺はおどけてキョウとヨージを羨ましそうに見、大きなため息を吐く仕草をした。

「トシロー！トシロー！」

可愛そうな俺に向かって、客席は”トシローコール”だ。なんか、とっても惨めな気分だ。

と・ところが、カオリに押されて、照れくさそうにヒロミが目の前に現れた。

そして俺は、ヒロミが差し出した一本のバラと、ファンタオレンジを受け取った。

「ゴメン……。私、何も気がつかなくて、この花、カオリに貰ったんだ。

だから、これだけじゃ可愛そうかと思って、ファンタ買いに行ってたなら、

遅くなっちゃった。」

「聴きに來てくれてたんだ……。ありがとう！」

「ねえ、淒くカッコよかったよ。じゃあ、最後の曲も頑張ってね。」

ヒロミはそう言うと、首を傾げてニコツと笑って、暗闇の中へ消えていった。

冷やかしの声に、我に帰ると、急に恥ずかしくなった。

俺はみんなの前で、ヒロミにドキドキする仕草を見られてしまったのだ。

冷静になるにも、ヒロミの笑顔がチラついて、ニヤニヤしてしまう。思わず、貰ったファンタを開け、グビグビと飲んだ。

「さあ、いよいよ文化祭も終わりだ。

後はお待ちかねの告白タイムがまっています。みんな、誰と踊るのかな？

じゃあ、それにピッタリの曲です。

校長先生も知っている、有名なラブソングを！

”ラストダンスは私に”！」

誰もが楽しみにしている告白タイムのダンス。本当にピッタリな曲だと思った。

そして俺も、今年は勇気を出して誘おう。
今確信が持てた。

そうさ、ヒロミはいつも傍にいた。
入学式で、初めて逢った時も、学校の色々な行事も、なんでもない
時も……。

いつも突然現れて、俺をドキドキさせた。
授業中にも何度も目が合った。
そして、一番話をした。

何でこんな単純な事、今まで気がつかなかったんだろう。

”俺は、ヒロミと一緒にいる時間が一番好きだ。”

クミコに謝ろう。許してくれないかもしれないが、
もう逃げるのはやめよう。

ハッキリさせよう。何もかも。

俺はこの文化祭を期に、今までの自分とおさらばしよう……。

『ラストダンスはヒロミだ!』

演奏を終え、俺たちはステージを降りた。

入れ違いにポップスバンドがステージに上がった。
奴らはもう、目を合わせようとはしなかった。

『完全に勝負がついたな。』

「おい、タバコ吸いに行こうぜ。」

「あー、おつかれ。とりあえず部屋だ！着替えようぜ。」

三人とも汗だくである。

早々に着替え、タバコに火をつけた。

達成感の後のタバコは実に美味い。

ただ、疲れているためか、何となく皆無口だ。

「今ごろ、ポップスバンド、ガタガタだぜきつと……。」

キョウが口火を切った。

「ああ……。」

「ちよつとやりすぎたかな……。」

「えっ？何？」

「じ・実はさ……俺、演奏終わって、アンプからジャック抜く時、

奴らのギターが立てかけてあったから……その、つい、出来心で……。」

「えっ？出来心で何したんだ？」

「いやその……ペグ回して、チューニング緩めた……。」

一瞬、空気が固まった。

「いや……実は俺も……。」

「えっ？トシローも？何したの？」

「いや……俺もつい出来心で……ベースのチューニング緩めた。」

いや、まさか、キョウがするとは思わなかったんで、ちよつと復讐してやろうかと……。」

「って言う事は、ギターとベース、両方ともチューニング、ガタガ

「タ……。」

「いや、ドラムもだ。」

「えっ？」

俺はキョウと顔を見合わせた。

ヨージは誇らしげに言い放った。

「俺も演奏が終わってすぐ、ねじ回しみたいな奴で適当にタムのネジ回してやった。」

だが、これも天罰！悔やむ事は無いぜ！！奴らは最低だからな！

！！」

「お・おい……適当につて、お前……。」

ドラムのチューニング、すぐには直らないんだぞ。」

「そんな事は知らん。ただ、それでもスネアだけはしないでおいでやった。」

「お前……鬼だな。」

「鬼畜め！！」

「よく言つぜ。奴ら、チューニングメーターがなけりや、ギターだつて、

ベースだつてチューニング出来ないんだぜ。皆同罪さ。」

「……それもそうだな。」

元々、俺たちにケンカ吹っ掛けて来たのは奴らの方だし、気にしないでおこつぜ。」

「しっかし、ヨージ、お前、性格変わったな。カオリのおかげか。」

「トシローも、これから頑張つて、性格変えてもらいなよ。」

「うるせえ！」

「さあ、いよいよ文化祭もクライマックスか。」

今年の注目はトシロー、お前だぞ。がんばれよ！」

「あー、うるせえなあ、解つてるよ！！」

第二十一章・文化祭の女神

「第二十一章・文化祭の女神」

俺たちが時間を押したために、
後片付けを終えると、もう5時近くになっていた。

グラウンドでは、”告白タイム”がきつと始まっているに違いない。
俺たちは焦り、特にヨージは「カオリに怒られる」と焦りまくり、
急いでグラウンドに向かった。

下駄箱で外履きに履き替え、玄関を出たところにノリユキが立っていた。

「おう！ノリユキ！今日はサンキュー！」

「ノリユキ、話したいけど、俺たち急いでるんだ。
また連絡する。打ち上げでもやろうぜ！」

ノリユキは、いつもと違って、少し硬い表情だった。

「トシロー、ちょっと話があるんだけど、すぐ済むから……。」

「あつ、俺？ いいよ。二人とも先行っててくれ。」

「ああ、遅れるなよ。楽しみにしてんだから。」

そう言つて、二人はグラウンドへ向かった。

「何だよ、話つて。」

「ああ、急いでるとこ悪いな。話そうか、やめようか迷ってたんだ

が、

「やっぱ、トシローには話しといた方がいいと思って。」

「なんだよ、もったいぶらずに言ってくれ。」

「……絶対、内緒だぞ。実は……クミコがミナミ退学したんだ。」

「……。」

ビックリして言葉が出なかった。

「いつ？」

「一昨日、退学届け出したって。東京に帰るらしいんだ。」

頭の中を、この間の夜のことが過ぎった。

『そうか、クミコは母親と暮らす事にしたのか。』

でも、何で教えてくれなかったんだろう……。』

「それで、いつ東京に帰るんだ？もう、いないのか？」

「いや、それは教えてくれなかった。」

誰にも、何も言わないで消えたいから、絶対誰にも話すなって口止めされてる。」

「じゃあ、何でお前はその事知ってるんだよ？」

「たまたま、校長室へ入って行く所を目撃したんだ。」

だから出て来るの待って、問い詰めた。」

「そうか……。今、クミコどうしてるんだ？来てないのか？」

「いや、ライブも後ろで見てたよ。」

俺、何があつたのか良く知らないけど、ここ最近、クミコの様子が変で、

気になってたんだ。そしたら退学だろ。何も話してくれないし……

……。」

「……それで、何で俺に話したんだ？」

「恥ずかしいけど……俺、クミコに惚れてたんだ。マジで……

。。

だから、いつつも見えてたから、何となく解るんだけど、

クミコはトシローの事、好きだったんじゃないかと思うんだ。

トシローに逢った頃から、やたらお前のこと聞いてきたし……

。

その……俺はバカだからうまく言えねえけど、

クミコがお前を見る瞳は、明らかに違うし、

お前の話すると、何ていうか……キラキラしてた。だから……

……」

俺の前で話すノリユキは、ミナミの番長になったノリユキではなく、
良く言えば純粋な、悪く言えば単細胞な、中学時代と同じノリユキ
だった。

「なあ、トシロー、一生のお願いだ。クミコにいい思い出を残して
やってくれ！」

このまま東京じゃあ、何か可哀想で……。頼む……。」

「……お前、それでいいのか？お前の気持ちはどうなるんだ。

ノリユキこそ、このままで良いわけねえだろ。」

「……いや、俺はこのままで良い。

クミコがこの田舎に来て良かったと思ってくれればそれで良い。

そうじゃなきゃ、あいつは、この田舎の事忘れちまうに決まっ
てる。

俺は高校卒業しても、この街に残るから、きっと、一生外に出る
事はないから、

だからせめてクミコにはこの街の事、忘れて欲しくないんだ。

いい事が少しでも有ったら、思い出すだろ？！

そしたら、きっと俺のことも思い出してくれるかもしれないだろ

?!

だから頼む！トシロー！！」

あまりに純粋なノリユキの思いに、自分が情けなくなった。

俺は最低だ。

ヒロミが好きなくせに、クミコを抱いた。

クミコを抱いたくせに、ヒロミとダンスを踊ろうとしてる……。

ノリユキの真剣な目が俺の胸を締め付ける。

「で、ノリユキ、俺はどうすれば言いと思う？

クミコに何をしてあげればいいんだ？」

「何でもいいんだ。デートするとか、電話するとか、

何でもいいから、クミコを楽しませてやってくれ！」

「解った。考えとく。東京に帰るとしても、そんなにすぐじゃない
だろ。」

「スマン……トシロー。」

「いや、ノリユキ、お前カッコ良いな。さすが番長！男だぜ！」

ノリユキのボディに軽くパンチを入れ、俺はグラウンドへ向かった

俺は、ノリユキの男気にマジで感動した。

とても俺にはマネできない。

でも、どうしよう……。

頭の中がまたグチャグチャになった。

「おい、トシロー！こっちこっち！」

キヨウとヨージがグラウンドの脇にある鉄棒のところにいた。そこまで小走りに行き、腰をおろした。

グラウンドでは何組かのカップルがダンスを踊っている。

もう五時だというのに、今年はまだ盛り上がり欠けているようだ。

「何か今年はシヨボいな。ヨージ達もチャンスを窺ってる。

トシロー、ヒロミはあそこ、カオリ達という。

でも、今行ってもまだ盛り上がらないな。もうちょっと待て。」

キヨウはすっかり解説者だ。

ヨージは隣ですっかり緊張しまくっている。

そして、カオリからの合図を待っているようだ。

「おい、キヨウ、お楽しみのもとこ悪いんだけどさ、ちょっと相談に乗ってくれ。」

「なんだよ、この期に及んでまだ迷ってんのか？」

「良いからチヨットこっち来てくれ！」

俺は、鉄棒から少し離れた桜の木の下までキヨウを引っ張って行き、今までの経緯を話した。

さすがのキヨウも目を真ん丸くして驚いた。

「……マジかよ。クミコと何かあるとは薄々感じてたけど、まさかヤツちゃったとはな！」

なるほどー、”墮天使”が妙に真実味帯びてたはずだ。うん。しかし、ノリユキは男だぜ。」

「おい、感心させるために話したんじゃないぞ！」

「解ってるって。選択は2つだ。今日、ヒロミと踊るか踊らないか。もし踊れば、ヒロミはトシローの彼女になるだろうけど、

このことはいずれクミコの耳にも入る。そしたら、クミコは傷つく。

もし踊らなかったら、ヒロミも、クミコも傷つきはしないし、クミコは東京へ帰っちゃうわけだから、その後、ヒロミと上手くやれる。

ただ、ヒロミに関しては今がチャンスだと思う。

今回を逃したら、もしかしたら、もうチャンスはやって来ねえかも知れないぜ。

多分、ヒロミの中でも、決着を望んでるはずさ。

そうじゃなきゃ、あの性格でステージまで花持ってきてやしねえよ。

「

「・・・うん。」

「トシロー、はっきり言っちゃうけど、クミコことは仕方ないさ。クミコは頭がキれるから、薄々感じてると思う。

お前が自分の事、好きじゃないってな。

確かに、少しは傷つくかもしれないけど、あいつなら解ってくれるさ。

それより、俺には、二年半のお前の思いのほうが多く感じるけどな。

俺は、トシローのそういう”クミコの気持ち”を考えるとところ好きだけど、

逆に優柔不断でもあるよ、時によつては。

それは、両方を傷つける事になると思う。

だから、悪い事言わねえからヒロミと踊るんだ。なっ！」

「俺がグズグズしていたツケが一気に周ってきちゃったんだ。

全部俺のせいさ。だから、今日、全てをハッキリさせたいと思っ

てた。

っていつか、ノリユキの話聞くまでは、ヒロミを誘って決めてたんだ。

「・・・もう時間ないけど、もう少しだけ考えるよ。」

「ああ、好きにすればいいさ。自分の人生だもんな。」

でも、もう一つだけ言わせてくれ。

たまには自分の幸せを選べよ。素直になれよ。」

「ああ。」

そして二人でヨージの所へ帰った。

ヨージの緊張はそれどころではなく、俺たちがなくなったのも、また、帰ってきたのも気が付いていない。

「おつ、随分人が増えてきたじゃん。これから動き出すぞ。

ホラッ、テツオがいった。あー、テツオフラれた。

あの娘は競争率高いぜ、身の程知らずが・・・。

あつ、テルが動いた。あいつ、誰誘う気なんだろ。」

キヨウの切り替えは早く、もう解説者に逆戻りしていた。

「おつ！テルの奴、彼女3人いるくせに、カオリのところ行く気だぜ！

あいつ、まだカオリの事好きなのか・・・。

ヨージと付き合つてるとも知らずに、バカだなあ・・・。

あつ、やつぱ行つた。カオリに何か喋ってる。

あつ、断られた。ザマーミ口ってんだ。おい、ヨージ、そろそろ合図来るぞ。

準備はいいか！それにしても今年はカップル少ないねえ。」

確かに今年はカップルが少ない。

誰もが知ってるようなカップルばかりで、7組しかない。

「ヨージ、今年は目立つぜえ〜！気合入れて頑張れよ！」

キョウがそう言ったと同時に、カオリからの合図が出た。

「おつ、合図だぞ、ヨージ！」

「ヨージ頑張れよー！」

「うん……。」

ヨージは緊張しながら、カオリのところまで歩いていき、手を差し出した。

カオリはヨージの手を掴んで起き上がり、二人はグラウンドの中央へと進んでいった。

周りのどよめきは、次第に拍手へと変わっていった。

「よしっ！やったぜヨージ！」

トシロー、見る、見る！あのテルの悔しそうな顔！」

キョウはとても興奮している……。

「おい、キョウ、やけに興奮してない？いつもらしくないぜ……。」

「これが興奮せずにいられるかってんだ。」

トシロー、最高のシュチュエーションだぜ！

今年の”文化祭の女神”は、完全にお前に微笑んできるとしか思えねえ。」

「そ・そうかな……。」

「そうさ！ライブは大成功！！今年の文化祭の主役だぜ、松竹梅は。そのボーカルのお前が、告白タイムに動いたら、全校生徒の注目の的さ。」

そして相手がヒロミと来たら、もう、興奮の坩堝だ。

ヒロミ、結構”静かな人気”有るんだぜ。

ああ、いいなあ、トシローは。

そういう星の元に生まれてるんだなきつと……。」

「あつ、キヨウ、サチ、サチが動いた。あつ、下級生だぞ！あいつ。」

「上手くいったみたいだ……。よかったなあ、サチ。」

「えつ、少しくらい動揺しないの？」

「全然。」

「ウソ……。少しくらい嫌な気分だろ？」

「もう、ガキには興味ないんだ。」

「マジで？」

「ああ、全然。」

自分を捨てた元彼女に、新しい彼氏が出来た瞬間を目撃したと言うのに、

少しも動揺せず、祝福をしているキヨウは凄いと思った。

いや、それだけお姉さんと充実した日々を送ってるって事だろう。それがとても羨ましかった。

「よし、俺も腹を括って頑張ってみるぜ。」

「おう、トシロー、いいタイミングだ。行つて来い。」

グラウンドの真中を通って行けよ。目立つように。」

「ああ、そのつもりさ。」

俺は真っ直ぐにヒロミを見つめた。

グラウンドの反対側にいるので、表情は良く見えないが、心なしか、俺の方を見ている気がした。

『よし、やったるわい!!』

そう決意を固め、キョウをもう一度見たとき、
校門の傍に、ミナミの団体がこっちを見ているのに気がついた。
ノリユキやノブ達だ。

奴らは、この告白タイムや、後夜祭には出られないから、
もう帰るところだ。

「おい、キョウ、ノリユキ達、帰るみたいだ。

まだ時間少し有るから、挨拶してくる。お礼くらい言わないとな。

」

「それもそうだな。俺も行く。」

俺たちは手を振りながら、ノリユキ達、ミナミの軍団の方へ走って
いった。

「おう、皆、今日はありがとうな。」

「いや、トシロー君、キョウ君も、カッコよかったす!

でも、スポット当てられたときはどうなるかと思いましたよ。」

」

「いやいや、ノブの踊りがなかったら、あそこまで盛り上がりなかつたよ。」

さすが次期番長!」

「次期番長はやめてくださいよ、キョウ君。」

「いや、俺の中では来年の番長はノブしかないね。」

キョウがノブをからかっている時、

俺は後ろの方で知らん顔しているクミコを見つけた。

真っ赤なブラウス、真っ赤なタイトスカート、

真っ赤な靴下、そして真っ赤なパンプス、

そう、全身真っ赤だが、妙に落ち着いて見える。
そして真っ赤な口紅が、大人びて見えた。

なぜだか、俺と目を合わせようとせず、
グラウンドの方をずっと見ている。

「おい、クミコ、どうだった？俺たちの演奏。」

「べつに・・・良かったんじゃないかねえのか。」

「どうしたんだよ、素っ気ねえなあ。もっと率直な感想言ってくれよ。」

「べつに、いつもと変わんねえよ。」

様子かなりおかしい。

俺はクミコを、ミナミの軍団から少し離れたところへ誘った。

そして、奴らには聞こえないくらいの声で話し掛けた。

「なあ、クミコ、コーラ飲みたい。」

「さつき、フアンタ飲んでただろ。だからねえーよ。」

『なんだ、クミコはヤキモチを焼いていたのか。』

クミコが可愛く思えた。

俺はおどけて言った。

「いや、ある！そのバッグの中に入ってるコーラをよこせえ。」

「ねえって言うてんだろ。」

「いや、ある！俺は超能力あるんだー！！」

「ふざけんな。あつてもやらねえ。」

「ほら、やつはあるじゃねえーか。うゝ、喉がカラカラだあゝ。」

「ったく、バカじゃねえーのか！」

そういいながら、クミコは俺の苦しそうな表情に苦笑いし、
「仕方ないなあ」と言いながらバッグからコーラを取り出した。

受け取ったコーラは、もう温くなっていた。

きつと、ライブが終わったらすぐに俺に渡そうと、
俺たちが一度引込んだ時にでも買ってきたんだろう。

そう思ったら、なぜか悲しくなって、
俺は、温いコーラを一気に飲み干した。

「あゝ、うめえ。」

「無理すんな。もう、温くなっちゃってるからうまくねえさ。」

「いや、今まで飲んだ飲み物の中で一番うめえ。」

「バカ！」

クミコはそう言い、下を向いた。

その刹那、グラウンドにダイスケの声が響いた。

「さあ、皆さん、後15分で告白タイムも終了です。

そのあとは、いよいよ後夜祭です。

校舎に残っている生徒は、急いでグラウンドへ集まってください。

」

「トシロー、俺たち帰るぜ、またな。」

ノリユキの号令で、ミナミの軍団が歩き出した。

クミコも、何か言いたげな表情で俺を見たが、
何も言わないで、歩き出した。

俺は、クミコの後姿を見送りながら、
もう二度とクミコに逢えないような気がした……。。

”文化祭の女神”は、なんて意地悪なんだ……。。

第二十二章・ラストダンスは私に

「第二十二章・ラストダンスは私に」

「おい、クミコ！」

俺は思わずそう叫んでいた。

クミコはビックリした様子もなく、俺の目をジッと見つめた。

「ちょっとだけ、俺に付き合ってくれ。」

「なんだよ。」

「いいから、ついてこいよ。」

俺はクミコの手を握り、グラウンド目指して歩き出した。

離れる時、キョウの顔を見て、親指を突き立てガッツポーズをした。キョウは外人がする様に両手を広げ、首を窄める仕草をして見せた。俺はそれに、首を傾けて答えた。

『体が勝手に動いちゃった。』

「お・おい、トシロー、何処行くんだよ。」

「俺と踊ってくれ、クミコ。」

「バ・バカ、そんなことできるわけねえだろ。」

「俺のこと、嫌いか？」

「そうじゃなくて、私はここの生徒じゃないし……。」

「関係ねえさ、そんな事。俺はお前と踊りたいんだ。」

「周りなんか気にすんな！誰も止めやしないさ。」

俺はグイグイと躊躇するクミコを、グラウンドの真中に引っ張っていった。

グラウンドに集まっている、ほぼ全校生徒達は、ザワザワとしている。

そりゃあそうだ。

俺は誰の許しも得ず、勝手に他の学校の生徒を連れて踊ろうとしているんだから。

俺の背中にキョウが声を掛けた。

「トシロー！カッコつけすぎなんだよー！」

俺はその声に振り返らず、手を上げて答えた。

そして、クミコと向き合つと、クミコの両手を握った。

クミコは、潤んだ目で俺を見て言った。

「私でいいのか？」

「お前がいい……。」

「……バカ。」

不思議と落ち着いていた。

そして、クミコ以外、何も見えなくなっていた。

周りで踊ってる奴らも、それを見ている奴らも、

そして、ヒロミさえも……。

「少しずつ、体を動かして憶えろよ。」

これが田舎の最高のダンスだ！都会ではダサいって言われるけどな。」

「うん……。」

クミコは”クスッ”と笑った。

俺は、このままクミコとサヨナラするなんて出来ない。
そんなの、悲しすぎるじゃないか。

親の都合でこんな田舎に来て、慣れて来たかと思ったら、
また親の都合で東京に帰る。しかも高校中退だ。

クミコは、さつき帰ろうとする時、俺の目を見てこう言いたかった
んだ。

『サヨナラ……。』って。

ふざけんなだ。

サヨナラも言わないで行っちまうなんて事させるか。

この気持ちは、愛とか、恋とかじゃないかもしれない。
でも、俺にはクミコを悲しませる事は出来ない。

たとえそれで、何かを失ったとしても、俺はそれでかまわない。

それだけの事をクミコは俺にしてくれたんだ。

大事なものをクミコに貰ったんだから……。

なぜか泣きそうになった。

それを振り払おうと、俺は大げさに、クミコをくるくる回したり、
自分もくるくる回ったりして、ふざけて踊った。

周りの奴らも、誰も止めようとはしなかった。

俺は、完全に二人だけの時間……。世界にいるような気分だった。

「なあ、トシロー、卒業したら東京へ行くんだろ？」

「ああ。」

「バンド続けるのか？」

「そのために行くんだ。」

「今日のライブ、凄く良かったぞ。」

「あれ？さっきは”まあまあ”って言ってなかったっけ？」

「あれはウソ。本当は鳥肌立ったんだ、トシロー見て。」

「気持ち悪くてとか言うんだろ。」

「バレたか……。」

「超能力者だからさ。」

「なあ、トシロー、絶対ミュージシャンになれよな。」

「なんで？」

「そしたらみんなに自慢するんだ。トシローの初体験の相手は私だぞって。」

「ハハハ。」

「もし、ミュージシャンになったら、欲しいもの、何でも買ってやるよ。」

「ホントか？」

「ああ。」

「じゃあ、なれなくて、貧乏のままだったら、私が働いて食わしてやるよ。」

「おっ！それいいなあ。憧れのヒモ生活か……。」

「よし、クミコ、約束だぞ！絶対の絶対だ。」

「うん。約束。」

「なあ、クミコ。このまま時間が止まればいいな。」

「止めてくれよ、超能力あるんだろ。」

「俺の超能力は、お前にしか効かないんだ……。」

「……バカ。」

そして俺たちは、黙って踊り続けた。

俺の頭の中で、

さっきアンコールで歌った唄が、
鳴り響いていた。

「ラストダンスは私に」

あなたの好きな人と

踊っていらしていいわ

優しい微笑みも

そのお方に おあげなさい

けれども 私がここにいることだけ
どうぞ忘れないで

ダンスは お酒みたいに

心を酔わせるわ

だけどお願いね

ハートだけは盗られないで

そして私のため 残しておいてね
最後の踊りだけは・・・

あなたに夢中なの いつか二人で
誰も来ないとこへ旅に出るのよ

どうぞ 踊ってらっしゃい

私 ここで待っているわ
だけど送って欲しいと

頼まれたら 断ってね

いつでも 私がここにいたいことだけ
どうぞ忘れないで・・・

きっと私のため 残しておいてね
最後の踊りだけは・・・

胸に抱かれて踊るラスト・ダンス
どうぞ忘れないで・・・

最終章・約束

「最終章・約束」

文化祭は終わった。

一つの山を乗り越えた俺に残ったものは、
充実感ではなく、虚脱感だった。

『何もやる気がしない。』

結局俺は、いつものようにお気に入りの場所で、
授業をサボって、タバコを吹かしながら空を眺めている。

朝、電車の中で、ノリユキから”クミコからの手紙”を受け取った。
その手紙は、クミコに似合わず実に女の子っぽく、
便箋の折り方が複雑で、開くのに少し手間取った。

『トシローがこの手紙を読む頃は、私は東京の空の下です。
逢うと辛くなるから、”サヨナラ”も言わないでいなくなる私を
許してください。』

私は母親と暮らす事にしました。トシローが私の前に現れてくれ
たおかげで、

田舎の暮らしも楽しく過ごせたけど、やっぱり母親を一人にはし
たくなって、

東京へ帰ることにしました。

でも、随分悩んだんだ。トシローに相談したら、何て言うだろう
って考えたりして。

始めて逢った時、何てふざけた奴だと思ったけど、気がつく
トシローは、

いっぱい思い出をくれました。歌ってるトシロー。電話でのトシ
ロー。私が淋

しい時、バイクで来てくれたトシロー。超能力者のトシロー。そ
して、”田舎の

ダサい最高のダンス”を教えてくれたトシロー。私の中はトシロ
ーとの思い出

ばかりです。本当にありがとう。

今度逢う時はいつになるんだろう。また逢えるのかな。頑張っ
ていればきっと

逢えるよね。こんな事書いてるけど、淋しくなって電話しちゃっ
たら、

いつものトシローでいてね。

あの時の”約束”忘れないからね。

それでは、またいつか。

親愛なるトシローさま

クミコ

P・S・ あの娘と仲良くな！

□

何ふざけた事言ってた！

こんな勝手な言い分あるか。
手紙には住所も電話番号も書かれちゃいない。
俺からは連絡するなって事だ。

それなのに・・・自分が淋しくなったら電話しちゃうかもなんて、
あの約束は忘れないなんて・・・。

俺の目から溢れそうな感情を抑えようと、
またタバコに火をつけた。

青い煙が目に染みた・・・。

4時間目の授業を告げるチャイムが鳴った。

『もうすぐ昼飯か、昼になったら家に帰ろう・・・。』

そんな事を考えながら、ボオーとしていた。

「コラ！また授業サボってるな！」

その声に”ハッ”とし、下を見ると、ヒロミが立っていた。

「早く椅子下ろしてよ！」

俺は急いで椅子を下ろし、ヒロミは慌てて上ってきた。

「お・お前、授業は？」

「サボっちゃった。」

「えゝ、ヤバいんじゃないの？」

「誰のせいだと思ってるの？でも、気持ちいいね、こういうのって、
言っとくけど、始めてサボったんだぞ。」

「俺のせい？」

「そう！だつて朝はいたのに、それからずっといないんだもん。ねえ、進路の事、ちゃんと決めたの？」

「ああ、朝イチで佐川のところ行って来た。」

「それで、どうするの？進学？就職？」

「どっちもしない。」

「えー！じゃあ、浪人つてこと??」

「いや、東京へ出て、バイトでもしながらバンド続ける。」

「でも、バンドは、進学や就職しても続けられるじゃない。」

「俺は、音楽がやりたいんだ、自分が満足するまで。」

「だから、親のスネはかじりたくないし、時間の拘束もされたくないんだ。」

「で・でも、先生や親は何て言ったの？」

「親は、好きにしろつて、もう諦めてるつて。」

「佐川は、お前らしいなつて。羨ましいとも言ったぞ。」

「そんなあゝ、変だよ、そんなの。ミュージシャンに本当になれると思ってるの？」

「結果はどうでもいいんだ。満足するまでやってみたいんだ。」

「もつと真面目に……。」

「俺には……やりたい事我慢して、

何となく進学したり就職する方が、不真面目に感じるんだ。」

ヒロミは”ハァー”とため息を吐いた。

「ゴメンな、心配してくれてたのに。」

「ううん。」

ヒロミは首を横に振った。

「ねえ、……あの綺麗な人、やっぱり彼女だったんだね。」

「いや、ついさっきフラれた……。」

「えっ？」

「黙って東京へ帰っちゃったよ。」

「ふん、それでイジけてサボってるんだ。」

「……違うさ。こうなるの、解ってたんだ。」

「サボってるのは、いつもの事だろ。」

「ふん……。」

急に不穏な空気に包まれたような気分になった。

「実はね……。」

しばらくの沈黙を、淡々とした表情でヒロミが破った。

「後夜祭、出ないで帰っちゃったでしょ。あ後の事、何か聞いてる？」

「誰から？」

「やつぱ知らないんだ。あの後ね、キョウ君が私の所に来て、後夜祭の最中、ずっと話してたんだ。」

「キョウが？なんだって？」

「”あれには色々な事情があるんだ”って、”だから気にしないでくれ”って。」

それから……。」

「それから？」

「……言えない。」

ヒロミは恥ずかしそうにうつむいた。

『キョウの奴……余計なことしゃがって……。』

「昨日は、朝からカオリに呼び出されて……。」

「えっ、カオリも？」

「うん、せっかくの休みなのに朝8時に電話が来て、駅前の喫茶店でお昼まで。」

「……それで何だった？」

「キヨウ君と同じような事……。」

「マジかよ……。まさか、ヨージもなんて事ないよねえ。」

「ううん。私、ヨージ君に言われてここへ来たんだよ。」

「あ……？ヨージが、授業サボれて言ったのか？」

「ううん。キツカケはそうだけど、私が決めて来た。」

「で、ヨージはなんと……？」

「”きつといつものところでイジけるから”って、すごく真剣に……。」

「あいつら……！」

「みんな、心配してくれてんだから、怒っちゃダメでしょ。」

「……うん。」

『あいつら、余計な真似しやがって。何話したんだ一体。』

俺がヒロミにベタ惚れだって事、バラしちまいやがったに違いない。

どんな顔して良いのか、どんな態度をして良いのか、

恥ずかしさとか、責任感とか、色々な物が入り混じって、

俺は動揺しまくりだった。

「みんなの話、色々聞いて思ったんだけど、

私が一番、何も解ってなかったのになって、

一番解ってるつもりだったのに……。」

「いや、一番解ってるさ。いつかの電話で、俺に”強くなれ”って

言っただろ。

俺は強がっているけど、本当は”情けねえ弱虫”だってこと、バレちまつてるんだなって思ったもん。」

ヒロミは少し笑って俯いたが、すぐにジッと俺の目を見て言った。

「ねえ、私たち、ずっとこういう感じでいられるかなあ。
お互いに彼氏や彼女が出来ても……。」
「うん……。」

少し悩んだ。

今更、何を言っても始まらないのは解っていたし、でも、適当に話を合わせるのは違うと感じた。

「……勝手な言い分だけだよ、
もし、ヒロミに彼氏が出来たら、こういう感じじゃいられないよ。」

「どうして？」

「多分、気が狂っちゃうよ、俺。……だってお前の事……。」

「このままの方がいいよ！」

”好きだから”と言いかけた時、
ヒロミはその言葉を遮るように言った。

「……そうか、そうだな。」
「うん、そうだよ。」

俺だってこんな事言うつもりじゃなかったんだ。

思わず口走ってしまったただけだ。

でも、本当はずっと、ずうーと言いたかった言葉だった。だけど、やっぱり言える訳がない。

言っではいけないんだ。

「ねえ、約束して。」

「約束？」

「そう、約束。」

「どんな？」

「私たちが大人になって、もし離れ離れになつたとしても、お互いの事は絶対に忘れないこと。時々は思い出すこと。特に、この夏の出来事は……。」

「……うん。約束するよ。」

「絶対だよ！約束！」

そう言つてヒロミは小指を差し出した。

俺はヒロミの小指に、自分の小指を絡めた。

そして、その小指を離したくないと思つた。

離したら、ヒロミは遠くなつてしまふような気がした。

最悪のタイミングで、

4時間目の授業終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

絡めた小指を引き離す鐘の音だった。

「あゝ、お腹空いた。じゃあ、私行くね。」

ヒロミは椅子を下ろし、下に降りた。

「5時間目はサボっちゃだめだよ！トシロー君……！」

ヒロミはそう言うと、大きく背伸びをし、駆け足で行ってしまった。

『トシロー君か……。』

俺は屋根の上に寝転び、タバコに火をつけた。

青い煙が空に溶けていく。

俺はこの夏、二人の女の子にフラれた。

でも、その二人の女の子と”約束”をした。

とても小さな”約束”だったけど、
とても大切な”約束”だ。

きつともうすぐ、あの”うるさい奴ら”が押し寄せてくるだろう。
”ああでもない、こうでもない”と、俺は説教を喰らう事になるだろう。

でも俺は、少しだけそれを心待ちにしている。

澄み切った青い空に、

大きな鳶が風に乗って、悠々と輪を描いている。

大きな羽を広げて、羽ばたきもせず、

風に身を任せて、悠々と……。

「俺も少しは飛べたのかなあ・・・。」
□

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7828d/>

約束

2010年10月9日11時38分発行